
魔王陛下の雑談

尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王陛下の雑談

【Nコード】

N4228L

【作者名】

尋

【あらすじ】

魔王陛下の〜関連の小話

主に別視点とか。裏話とか。キャラ同士の雑談とかです。

基本ナチュラル、所によりシリアス、残酷、コメディ、ほんの少し恋愛？

雑談 後日談直前の場合（前書き）

魔王陛下の暇つぶし、第61話の直前。

雑談 後日談直前の場合

「陛下、少々ご相談したいしたい事がございます。失礼しても宜しいでしょうか」

主人の部屋を示す純白の扉。

この『秋の館』のどこにも存在しないにも関わらず、必要とした時だけに忽然と現れるその前に佇み、セシエンは主人の思索を妨げない、しかしその注意を惹くに十分な程度の強さをもって扉をノックした。

ややあつて、「入れ」と甘い響きを帯びる声がして扉が自動的に内に向かって開く。

それにセシエンは恭しく礼を一度取り、すつと背筋を伸ばして敷居を跨いだ。

純白の雪花石で出来た、磨かれた鏡面のような床。

その上にはフランメルの白い絨毯。

天井の薔薇窓から差し込む光はあくまで清浄に白く、その輝きを一身に集めて彼の主人はレカミエの上に横になっていた。

ぼんやりと宙を眺めていたその紫眼が動いて、物憂げにセシエンを見る。

チリン、とその身につけた漆黒の装身具がその動きに従って触れ合い涼やかな音を立てた。

「どうした、お前から訪ねて来るとは珍しい」

「お休みの所申し訳ございません」

「良い、それで何の用だ」

深く頭を垂れたセシエンに投げやりな、しかしその仕草すら優美に手を振って、魔界の王ディアヴォロス・デュランはその瘦身を動かす、寝椅子レカミエに腰かけるように姿勢を変えた。

そして先を促すように小さく微笑む。

その微笑を正面から見てしまい、セシエンは思わず胸を抑え、赤

らんだ顔を恥じるように面を伏せた。

彼の動揺を見て、主人の眼差しが微かに曇る。

それを察し、セシエンはなるべく自然に見えるように静かに深呼吸すると、再び顔を上げ、真っ直ぐに主人を見て落ちついた声で報告する。

「先日までご滞在いただいておりましたナカバ様の件でございますが」

「ああ、あのチビすけか」

セシエンの口から出た人間の名前に、魔王は瞳を覆う愁いの色を僅かに薄れさせて小さく微笑む。

数日前までこの館の一室を与えられていた人間の子供は主のお気に入りだった。

その遠慮のない行動や振舞い、その後ろに見え隠れするまだ未熟だが確かな才気を主人は愛していた。それ故に、その存在がこの孤独にならざるを得ない己の主人の慰めになればとセシエンもまた、その幼い客人の滞在を許容し、持て成していた。

だが

「あれがどうかしたか？」

「はい、ナカバ様のお荷物ですが……如何致しましょうか？」

「ああ、荷物か……そう言えばあったな」

きよとんと一度、妙に幼い表情で瞬いた後に頷いた主に、セシエンは小さく、礼を失しない程度に笑む。

物欲に欠けるこの主には時折こういう事が起きる。

先日、キューブを貸し出してあの人間の子供に買い物させた時間も大して気にも留めていなかった。

物質を持ち帰ることのできない滞在だと分かっていたはずなのに、その買物の中身まではまるで考えていなかったのだらう。

「ナカバ様へお送りいたしましたでしょうか？」

「そうだな……」

控えめに提案したセシエンに、主人は伸びた黒髪を指先で弄びな

がら頷く。

「連絡を取って向こうで送らせるとしよう。梱包はお前に任せて良
いな？」

「承りました。それでは直に取りかかります」

「ああ。いや、待て……」

「はい」

呼び止められ、セシエンはその場で止まったまま主の方を伺う。

それに、いつの間にか取りだしていたメモへ万年筆を走らせてい
た主人は、それをピリツと一枚破り取ってセシエンの方に差し出し
た。

それを丁重に受け取り、セシエンは主へ「共にお送りすれば宜し
いですか？」と確認を取る。

「ああ、送っておいてくれ……引き止めて悪かったな」

「とんでもございません。では、また御用の時はお呼び下さいませ」

「ああ……頼む」

頼む、の一言に湧き上がった歓喜の思いを押し殺すように、セシ
エンは最敬礼を取って「お任せ下さいませ」と微笑んだ。

余談　ヒマ潰し三日目の舞台裏（前書き）

あの頃あのゴク……ヴィスカスの話。

流血表現がありますので苦手な方は回れ右

陛下はコーヒー好きの五歳児だと思っていた人も回れ右

余談 ヒマ潰し三日目の舞台裏

唐突に。

まるでプツリと蜘蛛の糸が途切れるかのように周囲の映像が、熱が、音が、全てが消え失せ闇に包まれたその瞬間、ヴィスカスは己が賭けに勝った事を知った。

「くっ……」

紅唇を堪え切れぬ喜びに歪めつつ、ヴィスカスは展開していた炎を収める。

この後訪れるであろう至高のお方の目の前にこんな無粋な物を晒す訳にはいかない。

周囲を漂う熱気も残存魔力も一つ残らず掃き清め、ヴィスカスは高鳴る胸を抑えてその場に膝を着き、訪れるべき人を待つて頭を垂れる。^{100%}

そして、

「余計な事をしてくれたものだな、ヴィスカス」

深く柔らかな響きを持つ声。

同時に全身の骨を砕かれる衝撃に、ヴィスカスは咄嗟に上げかけた苦鳴を飲み込んだ。損傷はすぐさまその身を流れる魔力によって再生されるがしかし痛みまでは消しきれず、ヴィスカスの体は床へ沈む。

「陛下、下……」

「実に、残念だ」

激痛に痙攣するヴィスカスの頭上から何処までも優しげな、しかし聞く者の心を畏怖に凍らせずにはおかない冷やかな声が降ってくる。

しかし、神経と言う神経、痛覚という痛覚を苛まれるかのような痛みを与えられながらもなお、ヴィスカスはその声を耳にするだけで湧き上がる歓喜と畏敬の念に、己の血に塗れた口元を笑みの形に

歪めた。

この痛み。この力。

魔王は彼に向って何をした訳でもない。

ただ、不愉快だと思いつつ視線を彼の身に注いだけ。ただ、それだけの事。

しかしその気分が高位魔族であるヴィスカスを一瞬にして肉塊に変え、切り刻み、押し潰し、消滅させる力を持ち、世界を動かす。

それこそが魔王。

これこそが本来魔王のあるべき性^{さが}。

魔界で最も強大な力を持つ王の意思は世界の形を変え、巨大な力の渦となって全てを蹂躪する。

何人たりともそれには逆らえない絶対的な力。

畏怖されるべき存在。

畏敬するべき存在。

絶対にして絶大なる魔族の王　美しき我らが至高の主人。

全ての魔族の生殺与奪の権を握り、それをほんの些細な気紛れで与え奪うお方。

それこそが『魔王』。

ゴフ、と血を吐き出し、しかしいつそ凄惨な笑みを浮かべてヴィスカスは一度妙な方向に折れ曲がった首を動かし、深紅の瞳で求めるべき存在を仰ぎ見る。

「こうでもしなければ、陛下は会っては下さらない……」

陛下、と囁いてヴィスカスは手を伸ばす。

まるでそうすれば、そこに居る相手に手が届くと思っているかのよう。

しかし、切望を込めたヴィスカスの言葉に返ってきたのはただ一言だけだった。

「下らんな」

冷たさすら無い、何の感情も籠らない、故に明確な意思を宿した言葉にヴィスカスは刹那紅い眼を見開き、それから小さく苦笑つた。

（ これこそ、我らの王）

絶対者にして支配者、超越者である貴方はこう在らねばならない。しかし、それでも四大卿にして悪魔種の頂上たるヴィスカスには、言わねばならない事がある。

「陛下、どうぞお戻り下さい……我らの元へ」

先刻の一瞥の余波が体内を未だに掻き回し、内臓を引き裂いているの感じつつヴィスカスは声を振り絞るようにして王の憐みを、慈悲を乞う。

「陛下。我らの王。我らの主。貴方は我らの光。我らの道標。我らの誇り……何故我らの前にそのお姿を見せては下さらないのですか」
陛下。

切なくヴィスカスは^な哭く。

「貴方が命じれば全て成し遂げましょう。

貴方が望めば全て叶えましょう。

貴方が求めれば全て差し出しましょう。

我が身も、我が命も、我が力も、我が一族であつても、領民全てでも、全て喜んで捧げましょう。

我らが持たぬ物ならば奪つても、何処にもないものならば作つても、貴方の前に飾りましょう。

貴方の微笑みの為ならば誇りなど捨てましょう。

貴方の愁いが晴れるならば願いなど潰しましょう。

貴方の座興の為ならば塵のように生き、芥のように死するともどつして悔いる事などありません。

何事も貴方より大切なものは無く、何物も貴方より尊いものは無く、何人も貴方に及ぶものは無い。

陛下。

我らの陛下。

我らの王、我らの導き手、我らの君臨者。我らの蹂躪者。我らの創造者。至高の御方。

貴方こそ我らの全て。

それなのに何故、このような所にいらっしゃるのですか。

それなのに何故、我らの前から立ち去られたのですか。

それなのに何故、貴方は我らを拒むのですか。

落葉たる『秋の館』など、栄光たる貴方に相応しくは無い。

どうぞ陛下、我らにご慈悲を。我らに憐憫を。我らに幸福を……」

まるでかき口説くかのようなヴィスカスの嘆願に、しかし紫眼の王はその白皙をちらりとも動かさなかった。

ただ、心底下らない物を見るかのような眼でその姿を見下ろしているだけである。

その周囲を圧倒的な力を持った紫暗の力が光の粒子となって静かに旋回しながら乱舞し、その姿は神々しいまでに恐ろしく、禍々しいまでに美しかった。

ヴィスカスの両目から血色の涙が溢れる。

それは歡喜の涙であった。

「陛下」

その三音が何よりも愛しく、素晴らしいものであるかのように呻いたヴィスカスに魔王は一度、ゆっくりとその目を閉じ、再び開いた。

「その程度の事で、お前は私の気に入りに手を出した……と？」

ギシツと硝子の軋むような音を立てて空間がひずむ。

それに微塵に血管を寸断され、ヴィスカスは喘いで床をのたうちまわった。

いつそ滑稽なその姿にしかし、魔王は何ら感銘を受けた様子も無くただ沈黙したまま哀れな吸血種の長を見下している。

「陛下……」

「……」

「何故です……何故、あのような者を取り立てられるのです」

今度のヴィスカスの声には微かに恨むような、なじるような響きがあった。

「あのような、力も無く、容姿も劣る……出来損ないを何故」

「……」

「あれは、恐れ多くも陛下に牙を向いたあの罪人の血ではありませんか！」

我らの陛下に仇成した咎人の血を持つ分際で！！

「あれは陛下に相応しくない！ 何故他ではいけないのです！ 何故我らではいけないのです！」

我らの王よ。

我らの渴望を知って何故、応えては下さらぬ。

我らの全ては陛下の物であるのに、貴方は何も返しては下さらない。

残酷な、残酷な、美しき我らの王よ。

どうぞ我らに微笑みを。

「……ヴィスカス」

声。

荒げずとも深く響く、その声。

「お前の声は聞き飽きた」

す、と眼の前に伸ばされた白いその指。

漆黒の、桎梏の輪が触れ合い彼の嘆願をあざ笑うかのようにチリチリと微かに鳴る。

「だから、暫く黙っている」

黒く長い爪が焼けるような痛みを伴って体を犯してくる。

例えその先に待つのが破滅だけだとしても

王の前に在る事

ただそれだけの事で幸福を感じる魔族とは、何処か狂ってしまった
ている存在なのかもしれない

分かっていて猶^{なほ}、紫眼の暴君に耽溺する己を嘲笑いつつヴィスカ
スは王の願いに沿うべく眼を閉じた。

余談　ヒマ潰し三日目の舞台裏（後書き）

ヴィスカスだけがこんなではありません。
魔族全体が魔王についてはこんなスタンス。

ヴィスカスはまだ高位魔族だからこそ、こうして魔族全体の為に捨て身の嘆願をするだけの理性が残ってますが普通の魔族はもっと極端です。

表現方法、捉え方（可愛さ余って憎さ百倍とか）は十人十色ですがね。

懐かしき日々(1)

「さて、第四十八回名前決めようぜ大会の開催をここに宣言する。今回の議題はこいつだ」

いつものように【円卓】に各々好きな物を持ちこんで着席したところでデュランは立ち上がり、パチンと指を鳴らした。

その音を合図に彼の後方に浮かんだビットがシールドを張り、そこに一つの図面を映し出す。

黒の地に緑の電子線で描かれた巨大な設計図　ナタリア発案の彼ら【レギオン】の拠点にして将来的には一大プラントとなる予定の建造物（名称未定）である。

もつとも、今現在は彼らが雨風を凌いで生活するという一番基本的な欲求をかるうじて満たす程度の小規模な、建造物というにもおこがましい程のささやかな物だが。

それでもこの計画に彼らが抱いている情熱、希望は計り知れない。「前々から考えてきた俺達の家についても、やっぱり名前は必要だろう。って事で、名前考えてきた奴拳手」

「はい」

真つ先に手を上げたのはそもそも家を作ろうと言いだしたこの計画の発案者にしてデザイナー、ナタリアだった。

「ん、ナタリア」

「お名前をー、発表しまあーす。ばばーん」

口で効果音を言いながらのんびりとした動作で彼女は抱えていたスケッチブックをめくって他の六名へ見せるように掲げる。

そこには、黒々と太く丸い文字で「チャッピー」と書かれていた。

「……いや、訳が分からないのだが」

ポツリとこぼしたザイオンの言葉が場にいる全員の意見を代表し

ていた。

何故「チャッピー」。

それにナタリアは不思議そうに首を捻り、

「えー？ チャッピーですよ。チャッピー」

「意味は？」

「チャッピーはチャッピーなんですよう」

パンパンと木炭でスケッチブックを叩きながらのんびりとした口調で主張を繰り返すナタリアに、その場にいた四名はスッと視線をその右側二人目に座ったシキへ視線を移す。

「……何故、皆で私を見る」

「え？ ナタリア語を翻訳できるのはシキだけだから？」

「ナタリア語ってなんですかぁー。ウチ、ちゃんとしゃべってますよー」

「ナタリア、お前少し黙っててくれ」

「シキ……」

「そう言われてもな……」

ナタリアを除く全員の視線を受け、シキは少し困ったように微笑んで「推測だが」と前置きして口を開く。

「ナタリアはこれにそう言うイメージを抱いているのではないか？」

「そうです！」

シキの言葉に我が意を得たりと大きく頷くナタリア。

「この辺がババーンで、こっちがドドーンで、この辺はチャッピーなんです！」

「いや、意味分らないから」

力説するナタリアの横で思わず突っ込みポーズをとるデュラン。

「ええー、デュー君何で分からないのう？ 良いですかぁ？ もう一度言いますよう？ ここがババーンで、こっちがドドーンで、この辺がチャッピーなんですう」

「……今の分かった奴拳手」

疲れた顔を見合わせて沈黙する彼らの中でシキだけが手を挙げた。

少し遅れてユー・デイスもソツとその隣で控え目に手を挙げる。

「えー……理解二票につき却下する」

「えー、どうしてですかあ。議長の横暴ですう」

「お前の擬音語だらけの感性は分らん。はい、次」

「はい議長」

「……。アリス」

「ここはやっぱり古典から引いてくるべきね」

ニヤリ、と笑みを浮かべて一拍間を置き、アリスは「あたしはバル・ゼルブ……館の王を推すわ」と胸を張って宣言した。

ついでにその動作につれて揺れた発育の良い胸に一瞬目を取られ、デュランは咳払いをして「ま、アホ女の提案にしちゃあ悪くないな」と呟く。

それに「そうでしょう」とにこやかにアリスも頷き、

「ちよつと変えるだけで八エの王になるあたり、毒が効いてて素敵じゃない？」

「却下！」

「えー、何だよ馬鹿議長」

「八エとかつけるな。俺らの家だぞ？ 八エが寄ってきたらどうすんだアホ女」

「そんなの追い払うにきまつてるじゃないバカ男」

「ふ、二人とも……喧嘩は良くないよ……」

「何よ。これは権限に物を言わせて意見を潰そうとする独裁的な脳筋アホ男への正当な抗議よ」

「誰が脳筋だこのアホ女。胸に常識に回す分の栄養でもとられたみたいなの発言ばっかしゃがって」

「はあ？ 何？ 人の体型に何か文句あるわけ？」

「だからこれ見よがしに胸を張るな。脱ぐな。お前本気でアホだろっ？！」

「何よ。良いじゃない。脱ぐ自由すら与えない気？」

「変態かお前は。着ろ。見せるな」

「それは間違ってるわ」

「ビシッと正面から指差すデュランにうっとうしげに手を振り、アリスはこともなげに言う。

「アンタの目がつぶれれば万事解決じゃない。世界からゴミが一つ消えてとてますがすがしい気分になるわ」

「……俺はお前が嫌いだ」

「あたしもアンタが嫌いよ」

「二人とも良い加減にしないか」

【円卓】越しに視線に火花を散らした二人に制止の声をかけたのはザイオンだった。

「デュラン……今回の議長はお前だ。進行役が冷静に事を進めるところか議題外の事を荒げてどうする。

アリスもデュランで遊ぶな。それと肌を外気に晒すのは危険だから止めるべきだ」

「……すまん」

「そうね……こんな馬鹿男相手にあたしも無駄な体力と貴重な時間を割くなんてするべきじゃなかったわ」

「お前……後で覚えてる。で、アリスの案はどうだ。賛成者は？」
ぐるりと見まわし、デュランは「誰もいないんで却下な」と肩を竦め、

「って、お前自分で案出しておいて手挙げないのかよ！」

「別に良いじゃない。ほらさっさと先進めなさいよ、ぎ、ちょ、う、さ、ん」

「……お前、絞めるぞ」

「デュラン、提案をしても良いだろうか」

「あ、ああ。悪い。よし、ザイオン」

「オーサカジョー、と」

「オーサカジョー？」

「ああ、あの城か」

「うむ」

直ぐに反応したシキにザイオンは無表情に頷く。

が、生憎他のメンバーには心当たりが無いらしく互いに顔を見合
わせるばかりである。

「シキ、説明頼む。ショートカット二十秒バージョンで」

「分かった…… オーサカジョーというのは軍事建造物の固有名称。

建材は石および木材。出典は『名跡年鑑』。複合連結型構造を有し
ていたがのちに戦火によって灰燼に帰したと伝えられていたはずだ」

「……燃えて壊れちゃってるんだね」

ぼつりと呟くユーデイス。

「……あまり縁起が良くありませんね」

「すまん……それは把握していなかった」

同じようにぼつりと呟いたレメクにザイオンが恥じるように顔を
赤らめ「今の提案は無かった事にしてくれ」と肩を落とした。その
悄然たる様子に慰めるようにナタリアが背を撫でる。

「なかなか決まらないな」

「まあ、いつもの事だけどな……そういうシキは何か考えてないの
か？」

「……。家、とか」

「いや、さすがにそれは……」

相変わらずシンプルそのもののシキの意見にデュランは苦笑いし、
視線を隣のユーデイスに移すがこれまた黙ったまま首を横に振って
シキの後ろに隠れてしまう。

これもある意味いつもの光景だ。

デュランは嘆息しつつ今まで沈黙を保っているレメクへ顔を向け
る。

「……レメク、お前どうだ？」

「今回はあまり下調べの時間がありませんでしたからね。サグラダ・
ファミリアというのも考えたのですが……」

「ですが？」

「未完のうちに地殻変動で崩壊したという結末を迎えていました」

「それも微妙だなあ……」
「ですね」

オーサカジョーと良い勝負である。
「そういう君は何か案は無いのですか？」
「よくぞ聞いてくれた」

尋ねたレメクにニヤリと笑い、デュランは「俺はユルグシラドル
つてのが良いと思う」と告げる。
それに一同が首を捻る。

「ユルグシラドル……？」

「やはり何かからの出典ですか？」

「シキ、聞いた事ある？」

「……いや」

尋ねたアリスにこちらでも聞き覚えが無いのか唇に手を添えて考え
込むシキ。

「……シキも分からないって事はオリジナル？」

「い、いや……ちゃんと根拠がだな」

「じゃあ、シキが知らない原典からひっぱってきたとか？」

「シキが知らないなんて無いと思うけど……」

控え目に、しかし目にかたくなな光を宿して呟いたユーデイスに、
デュランは「おっかしいな」と首筋を搔く。

「確かにあったんだけどな……」

「ああ、分かった」

そこへポン、と手を打ち鳴らしシキが顔を上げてにつこりと微笑
む。

「『グリームニルの言葉』のユグドラシル世界樹の事ではないか？」

「ユグドラシル？」

「ユグドラシル……」

「ユルグシラドル……つて、要は読み違い？」

間。

「だっさ……」

「うるせえ！ ちょっと読み間違えただけだろ！」

「ユルグシラドル、ユルグシラドル、ユルグシラドル」

「だあっ！ 連呼するな！」

「はい、あたしユルグシラドルに一票」

「お前絶対それ悪意だろ！」

「面白そうだからあー、ウチもそれにしますう」

「悪くないのではありませんか？ 捻りがあって」

「いや、レメク……別に捻った訳じゃなくてな……」

「他に案も無いのだ。世界樹もどきなのだし……」

「いや、もどきって」

続々と投じられる賛成票にデュランは最後の望みをかけてシキを見る。

「そうだ、シキならばきつと。」

「そんな彼の視線を受け、シキは無邪気に微笑む。」

「私も賛成で」

「シキがそう言うなら僕も……」

「はい、満場一致で決定！！」

「アリスてめえ！」

「ふっふっふ……民主主義って素晴らしいわねえ、デュラン」

かくして、後に【レギオン】の最高傑作の一つとして数えられることになる【ユルグシラドル】^{世界樹}はこの後文字通り世界を支える礎となるのだが、それはまた別の話である。

懐かしき日々(1) (後書き)

用語解説

・レギオン

第零世代の七名で構成された一集団。

メンバーはデュラン、ナタリア、シキ、ユーデイス、アリス、ザイオン、レメク。

・名前決めようぜ大会

レギオンの誰かが何かを発案・開発するたびに開かれる恒例の大会。正式名称は命名会議だが、其々が好きな名前で呼んでいる。

議長は持ち回り制。投票制。

第一回の議題はチーム名。

・円卓

会議の事。

この時点ではまだテーブルも椅子も無いので円座で座っているだけ。後にユルグシラドル内上階部に設けられた作戦会議所兼談話室の名称となる。

・ユルグシラドル

ナタリア考案、設計の建造物。

元々は「活動する時に、雨をしのげる屋根が欲しいよね」というだけの琴だった。

余談 全面禁煙の裏側（前編）（前書き）

ナカバが席を立ってる間に何があったのかと言つと……？

余談 全面禁煙の裏側（前編）

リミュリシエルとナカバは同級生だ。

だが、その立場には天と地ほどの差がある。

片や若干十四歳にして魔法技官候補生に名を連ね、常に学内で実技、教養のテストで上位のポジションをキープし続ける才女。品行方正。誰にでも礼節を弁えた行動を取り、上の者だけでなく同級生、下の者にまで広く慕われる少女。

それがリミュリシエル・ミルフィリア　ミルフィリア家の魔女。それは努力の末に彼女が築いた立場であり、彼女の矜持の賜物であるが、彼女が同年代の中でもトップクラスに居る事は周知の事実だった。

それと比して、或いは比さずともナカバ・マサキの名を持つ少女はあまりに弱い。

あまりに脆弱だ。

だから、リミュリシエル・ミルフィリアは誓う。

ナカバを、己の大事な友人を一切の脅威から守る事を、誓っている。

「一体どういっつもりですか？」

「うわー、最悪だー。コーヒーって便所石鹼せっけんで落ちたっけ？」と実に彼女らしい台詞を小声で呟きながらトイレへと歩いて行ったナカバを見送り、リミュリシエルはスツと表情から笑顔を消す。

天使の微笑みなどと周囲では彼女の笑顔を呼んでいるらしいが、リミュリシエル自身は一度もそんな言葉に同意も共感も覚えた事は無い。こんなのはただの処世術だ。

そして、そんな愛想を何時までもこの正体不明の相手に振りまく理由が今の彼女には無かった。

それ故に、リミュリシエルは相手　デュラン・ケヒトなどとふざけた偽名を使って今ここに優雅に腰を下ろすその相手を睨みつけた。

「ナカちゃんを今、わざと追い出したでしょう……」

彼女の灰色の眼を受けて、しかし相手は小さく優しげに微笑んだだけだった。

その玲瓏たる美貌は顔色一つ変えず、眉一つ動かす様子が無い。

(殺気を叩きつけても、あっさり流すなんて……)

やはり、ただ人では無い。

リミュリシエルはその思いを一段と強くする。

普通の人間であれば戦闘訓練を受けている彼女の殺気を受けてまともに動いたり喋ったり出来るはずが無い。しかし、この一見優男にしか見えない相手は平然と笑って、受け流した。

この相手も、ナカバと同じ弱者であるはずなのに。

何の力も無いくせに。

それなのに、何故まるで上位であるかのようにリミュリシエルに對して振舞える？

「どうしてナカちゃんを追い出したんですか？」

「追い出し？」

「とほ恍けないで」

「恍けてなど……俺は何もしていないのは貴女も見ていたはずでは？」

鼓膜から染み込んで思考を甘く蕩かすような声で穏やかに返され、リミュリシエルは眉を顰める。

確かに、この相手がやった事と言えばコーヒーのお代わりを注文しただけで、コーヒーを注いだのも、零したのもこの店員のミスだ。その間カップにこの相手は一切触れていない。

言いがかりと思われるも仕方ない状況だが、リミュリシエルはこの相手が仕組んだ事だと確信していた。

しかし、証拠が無い。

それが分かっているから相手も悠然と構えている。
リミュリシエルも深く追求できない。

けれど、それだけだろうか？

この、正面から目を合わせる事を躊躇う程整いすぎた容姿をもつ
相手ももっている何か。

それがリミュリシエルの舌鋒を鈍らせているのではないのだろうか。

(何でこんなに攻めにくいのかしら……)

一体何がこの相手にこれほどの余裕を与えているのか。
リミュリシエルにはそれが分からない。

分からない。

分からないから 恐ろしい。

「……貴方の目的は何」

分からないから 気圧される。

まるで無力なはずのこの相手に。

「目的？」

「ナカちゃんをどうする気なんですか」

返答次第ではただではおかない。言外にそう含ませてリミュリシ
エルは相手の反応を窺う。

が、相手は柔らかく、美しく微笑し、

「別に、何も」

「何も？」

「用件は済んでいるから……今はどうする気も無い」

「用件……ですって？」

「そう。先程話しただろう……友人の見舞いの付添だ。お陰でアレ
も大分生きる気力を取り戻した。ナカバには感謝しきれん」

ナカバ、と無造作に名前を呼ぶ相手にリミュリシエルの胃の腑の
奥がチリリと焦げるような錯覚を覚える。

(どうして……?)

自分の名前を呼ばれるのをナカバは事の他嫌う。

はっきりと彼女は告げた事が無いが、幼少期にそのジパング風の名前の為に随分と嫌な思いをしたようだ。

それに、彼女の名前を呼ぶような親しい相手も居なかった。

だからこそ、ナカバは滅多に他人にその下の名前を許そうとはしない。

リミュリシエル達もナカちゃん、ナカ吉などアレンジして呼ぶ事は出来ても、ナカバとその名前を呼ぶ事は出来なかった。彼女が嫌がったから。

そのはずなのに、何故この相手はこうも無造作に「ナカバ」の三音を口に出来る。

自分の知らない、何処の誰とも分からないこの相手が、いつナカバにそんな事を許された。

(どうして、そんな当然のような顔をしてナカちゃんの名前を貴方は呼べるの? どうして?)

リミュリシエル達の方が先にナカバと出会っていたはずなのに、ずっと親しいはずなのに。

なんで、こんな奴なんか。

「貴方、誰?」

「先程名乗っただろう。デュラン・ケヒトだと」

「それは答えじゃない。分かってるでしょ」

リミュリシエルは血が滲みにじまそうなほど強く、自分の手を握りしめて相手の玲瓏たる美貌を睨む。

見つめているだけで頭の中に薔薇色の霧もやがかかって、敵意がもろくも崩れて消えそうになる。

それでも、気力を振り絞ってリミュリシエルは相手を睨む。

「貴方は誰? ナカちゃんと同じ魔力欠損症候群ムデルなんでしょう?

その縁を利用してナカちゃんに何をさせる気? あの子を騙して利用する気なら……絶対に許さないから」

「おやおや、随分警戒されてしまっているようだな」

「……当然、ではありませんか？」

ここまで沈黙を保っていたヴィクトリアがぼつりと無表情のまま
呟く。

それに、相手は紫色の瞳を細めて興味深そうに微笑む。

「当然、か」

理由を言っでござらん。

甘やかに囁かれた言葉に軽く戦慄を覚え、ヴィクトリアは慣れぬ
感触にごく小さく息を飲み込んだ。

余談 全面禁煙の裏側（前編）（後書き）

実はけっこうギスギス。でもこういつやりとり書くのは好きです。
聞いていると胃がキリキリしそうですが。

まだまだ続きます

余談 全面禁煙の裏側（中編）

たゆまぬ努力によって今の地位を得たりミユリシエルとは対照的に、ヴィクトリアはただ当人の才能によって自動的に、或いは成るべくして今の立場に立った。

努力するという経験が彼女には無い。

血を吐く程に、寝食を忘れる程に同級生が、或いは上級生が訓練を重ね、鍛錬を積み、経験を培い、敬虔に取り組む姿を彼女は幾度と無く眺めてきた。

しかし、彼らのその努力は、苦勞は、彼女の前にあっさりと敗れる。

何もしなくても勝てる。

何もしなくても上に立てる。

人が百回、千回、一万回の繰り返しに末にたどり着く成功に、彼女は一回で辿りつく。

それは、とても退屈。

何の感動も覚ええない。何の感慨も覚ええない、何の感想も生じない、何の感銘も受ける事は無い。

努力は尊いと皆は言う。同じ口で、何の努力もせずに成果をもぎ取る彼女を褒めそやす。

（つまらない）

世界は退屈だった。世界は簡単だった。世界は平坦だった。世界は味気なかった。何もしなくても同じことだった。

見回してみても同じ高さにも無い。同じ所に誰も居ない。

それなら、私がここにいる意味は何処にあるのだろう。私
ここに在る証拠は何処にあるのか。

何て空っぽ。

何も無いのとまるで同じ。

それなら、私には何も要らない。

挑戦する事ももう止めた。

競う事ももう飽きた。

笑う事などもう、忘れた。

私はきつと、もはや何も感じる事は無い。

私はきつと、一生全力を出せる事は無い。

そう思っていた。

まるで弱くてちっぽけで取るに足らない惨めなはずの彼女に、^{ナカバ}出
会うまでは

「ミスター・ケヒト」

ヴィクトリアは淡々と、感情のこもらない声で語る。

彼女自身、己の中にどんな感情が眠っているのか今ではほとんど
分からなくなっている。

あの口は悪いが面倒見の良い友人によれば、かなり表情豊かだと
言う話なのだが、ヴィクトリアはナカバに言われるまで自分の抱い
ている印象・感情に気付く事はまず無い。

けれども、この相手は別格だった。

それは目の覚めるような艶やかな美貌に驚いたのではなく、或い
はデュラン・ケヒト 恐らくは古生神話の医療神ディラン・ケヒ
トから取っているだろうあからさまな偽名に驚いた訳でも無かった。
仮に相手がディラン・デュラン・マツケイならぬデュラン・マツケイと名乗
るうが、デュラン・デュランと名乗るうが、それはヴィクトリアに
とってはどうでも良い赤の他人の名前である事には変わらない。

そんなものを一々気にするようには彼女の思考は出来ていない。
ただ、疑問は感じる。

「貴方の身分許可証の公示を要請します」

「ふっ……」

ヴィクトリアの言葉に相手は小さく息を吐いて笑った。

失笑と言うよりも愉快がっているようだった。

「なかなかストレートな要請だな。悪くない」

「見せていただけるのですか？」

「理由を一応聞こうか」

「……失礼ですが、魔力欠損者マナレスですね」

「そうだな」

「それは、変ですね」

リミュリエルのリーフグリーンの瞳と相手の紫の瞳が刹那交わる。

「マナレスには大きく三つの制限があります。行動制限、意志遂行制限、職業制限」

「よく勉強しているな」

「失礼ですが、貴方は二十代中盤の平均所得層よりも裕福と見ました」

SENSESは有名ではないが、それはごく一部の上層階級のみを顧客とするその姿勢故の事。

今日の前の男が纏っている服一式だけでかるく高級車一台分、へたをすると家が一軒建つかもしれないぐらいの値段がするはずだ。

モデルと当人は言ったが、そのまま私服化しているのならば幾らかの金を払って買い取ってははずだ。
通常の収入を得ている者でもなかなか手が届かない。

「否定はしない」

「……マナレスの貴方が一体どうやってそれだけの収入を得ているのか、非常に疑問です」

そして、マナレス 職業に対し厳しい制限のある彼らがそれほどの収入を得る事は、百歳まで働き続けたとしてもまず叶わない。

非常時に対応できず、またその特性ゆえに魔力による治療を受け付けない彼らを、社会の主幹部に置く事はリスクが高すぎるからだ。その職業の差による収入差を覆す方法は大きく二つ。

遺産相続。或いは、麻薬売買などの犯罪。

リミュリシエルがナカバの身を案じたのも、その二つ目の犯罪の可能性が頭にあつた為に他ならない。

「おまけにその瞳の色は紫ですね。それがゼロ・パーツの色と知ってやっているのですか」

紫眼はけっして自然には現れない禁忌の色。

戦乱の鬼子、混沌の忌子たるゼロ・パーツのみに現れる「警戒色」

（あれは偽物でしょうけれどね）

ゼロ・パーツは常に一つの時代に一体のみ。

最後に現れたのは二百年前。以降ゼロ・パーツは発生していない。それは魔界との戦端が開かれて居ない事からも明らかだ。

よって、この相手は興味本位か冗談かで目を紫に染色しているだけと考えられる。

（冗談にしては悪趣味ですが）
ともあれ、

マナレスにはあり得ない程の裕福な様子。

マナレスであるにもかかわらず見当たらない後見観察人の不在、或いは生活認証タグの不所持。

そしてゼロ・パーツと同じ紫に染色した瞳。

「リミュリシエルと同じ質問です。貴方は何者ですか……身分証明書の公示を要請します」

「やれやれ……まあ、構わないがな。どうぞ」

言って相手は予想以上にあっさりと、首にかけていたチェーンを引いてその先についていたタグを外した。

そして、テーブルの上に置く。

「ただし、ここにいる他の者には内緒にしてくれ」

桜唇に指を添え、艶めかしく笑んだ相手の顔を見れず、ヴィクトリアは視線をタグに落とした。

銀色の飾り気のない薄いそれに、全ての答えが詰まっている気がした。

余談 全面禁煙の裏側（中編）（後書き）

冒頭の独白みたいな文章を書いてる時が物書き中で二番目ぐらいに
幸せです。

書き易いったらありやしない。

一番はキャラ達が勝手に動いて、そのやり取りに思わずはまった時。
書き難いったらありやしない……。

次で終わり。

余談 全面禁煙の裏側（後編）

W E S P A N I A E X - F T

N a m e : D u r a n . K

A g e : 2 4

S t a t u s : A I D E

「^{エクストラ}別格研究員……？」

「補佐だがな」

タグから表示されたごく最小限の情報のトップ。

EX - FT、すなわち別格研究員の文字にデュランは微笑して頷いた。

「疑問は解けたかな？」

クスと笑ったデュランにリミュリエルが「本物だって証拠は……」と小さく呟く。

しかし相手は慌てずに「疑問があれば問い合わせてみれば良い」とコーヒールを一口飲んだだけだった。

訊いてみますか、と目線で問いかけたヴィクトリアにリミュリエルは小さく首を横に振る。

E 種国家公務員の一つ、別格公務員。

公務員の中でも大陸国家間を越境して活動する事が許されている数少ない職種の一つ。

生きた知的文化財とされる彼らは基本的に公表される事が無い。それは、その損失が国家にとって与えるダメージがあまりに大きい為存在を秘匿されているからだ。

まだ一介の学生でしかない彼女達が聞いたところでまともな返答が返ってくるはずも無かった。

その事に相手も思い当たったのだろう。

「ふむ」と何か思案するように顎に手を添え、それから緩く首を振る。

「まあ良い。信じようとも信じまいともそちらの自由だ。ただあまり表に出しておける物でも無いのでな……返してくれ」

「マナレスが別格研究員になれるのですか？」

「補佐だ。なれるぞ……規定の何処にも魔力所有量の制限は無い。むしろ、この体だからこそ重宝されているとも言える」

デュランの言葉に少女達はそれぞれに怪訝な顔をする。

その表情にデュランは苦笑し、空になったマグカップをドーナツ屋の安っぽいテーブルの上にコトンと置いた。

そしてするりと長い足を組み直す。

「精密機械と言うのは魔力の影響を受けるのでな。繊細な物ほど私のようなマナレスの方がより安定した状態で操作運用しやすい。計測についても同様の事が言える。魔力誤差抜きで正確な数値を即座に検出できるのでこれでも色々と重宝されているのだぞ？」

「そんな事……」

「考えた事も無かった、か？」

デュランは小さく笑い、首を傾げる。

濡れた絹のような艶を帯びた黒髪がさらりと透けるように白い頬にかかった。

「実際、今日に入れているこれも、私がマナレスだから被検体選ばれた物の一つでな。まあ、色は制作者によるゼロ・パーツへのリスペクト、遊び心だが……」

「何を入れているんですか？」

「そこは職業上の秘密だ。テストを繰り返して市場に発表されればそのうち分かる。市場に出されないまま廃案となるなら貴女方が知る必要も無い」

「……でしょうね」

「ところで」

何気ない調子でそう切り出し、相手は変わらぬ微笑を浮かべたま

まこう続けた。

「貴女達とナカバとの関係は友人だと聞いていたのだが、違うのか？」

まるで保護者が愛玩動物の飼い主のつもりで見えているように見える。

カアツとそれにリミュリシエルの頬に血が上る。

咄嗟に開きかけた彼女の口をヴィクトリアは手を掴む事で制止した。

万一。

万が一にもこの相手が本当に別格研究員だとすれば、ここで感情的になつては向かうのは得策では無い。

B種国家公務員への推薦枠に収まっているとは言え、あくまで彼女達の現在の身分は学生。

東大陸イーストリアの別格研究員と問題を起こしたとなればあっさり推薦など剥奪されてしまう。

(堪えてください)

ヴィクトリアの視線にリミュリシエルは下唇を噛んで浮かしかけていた腰を下ろす。

そんな二人のやりとりを相手は面白そうに眺めているだけで、何も言わない。

四人掛けのこじんまりとしたテーブルには沈黙が訪れていた。

ナカバはまだ帰ってくる気配が無い。

「失礼」

先にそう口にしたのはデュランの方だった。

しかし、その瞳に悪びれたような色は無く、口元は変わらず涼しげに微笑んでいる。

ゾツとするほどに美しい微笑みだった。

「ただ、随分とナカバを……そう、過保護に扱っているようなのでな。少々意外に思えたのだ」

「過保護なんかじゃないわ」

今度はリミュリシエルが呆れたような顔をする。

「あなたも魔力欠損者マナレスなら分かるでしょう？ あの子は特に先天性Δ魔力欠損症候群なのよ？」

「それが？」

「それが、って」

「ナカバが私をここに連れてきたのは彼女の判断力の問題だ」

「でも、彼女はまだ未成年よ」

「貴方もな」

クス、と笑われてリミュリシエルは屈辱に肩を震わせる。

「私は違うわ。今までに戦闘訓練もやっているし、分析の授業だって受けてる。でもあの子は普通の子なの」

「そうだな、だがそれが何か影響するのか」

「するに決まってるじゃない」

「リミュリシエル」

バン、と机を叩いた音に店内が一瞬静まり返る。

「まだ後見監察人もついてないのよ。その代わりを私達が務めて何がいけないの」

「……」

暫くリミュリシエルの言葉に黙って考える風にし、それからデュランは「成程」と何処か憂鬱そうな声で呟いた。

それに何ら罪悪感を抱く必要のないはずのヴィクトリアもリミュリシエルも思わず胸の痛みを覚える。

周囲で聞き耳を立てていた周囲も、まるで彼女達が冷血非情な極悪人であるかのように非難の眼差しを向ける。

計算してやっているのだとすれば恐ろしい相手だった。

否、計算してやっていない方がむしろ恐るべき相手と言えるのか

もしれない。

「まあ良い」

声は相変わらず優しく柔らかく、冷めていた。

「それもまた人間か」

「……どう言う意味ですか？」

尋ねたヴィクトリアに答えず、デュランはパチンと元通りにタグをチェーンに着け、服の内側に滑り込ませる。

数名が「見たい、けれど見てはいけない」という顔で視線をその胸元から逸らした。

「彼女の判断能力について私と貴女達とは見解に相違があるようだと
言っただけだ」

デュランは小さく苦笑したようだった。

「彼女に魔力的才能が一切ないとして、それが彼女の判断能力に何か影響するのかわかるか？」

「それは……」

「彼女の私に対する判断を疑うか、信じるか。それは貴女達の自由だ。好きにすれば良い」

「……」

「ただ後見監察人の役割が患者の監察の為では無く、事故の際の保護を目的として設定されていることぐらいは覚えておいた方が良いでしょう。患者の知的能力の欠陥を補う為の保護者では無い」

「っ」

「割合誤解している者が多いようだがな」

スツと細くなった紫の眼に心臓を射抜かれた気がして、リミュリシエルとヴィクトリアは言葉を忘れる。

「彼らには魔力要素が無いだけだ。思考能力も感情も人並みに備わっている」

言っただけ腕を組んだまま目を閉じた相手にリミュリシエルはぐつと唇を噛んで立ち上がる。

「帰ります」

明日の旅行の用意がありますから。

そう告げたりミュリシエルに特別興味を示す様子も無く、相手は「ナカバには伝えておこう」と応える。

その隣でヴィクトリアもまた、同じように立ち上がり、何か言いたげな顔でデュランを見下ろしたが結局何も言わなかった。

リミュリシエルが去り際に一度振り返り、キツと灰色の目で睨む。

「ナカちゃんに傷一つ負わせたなら許さないから」

「どうぞお好きに」

クスと小さな笑み付きで返された返答に、リミュリシエルは「最低」と呟いて踵を返した。

余談 中央到着から逃走成功まで

「班長？ どうしたんっすか？ 何かぼーっとしちゃって」

「え？ あー……まあさっきの依頼の事思い出してさ」

掛けられた声に意識を引きもどし、アドルフはついでに目の前に見えた緑の髪をわしゃわしゃと撫でつけながら答える。

それに「班長……俺班長より年上っすよ」と抗議の声が上がる。

その声に大して力がないのはけっして相手がそれを心地よく受けているからではない。

ただ諦めているからだ。

アドルフ。

DDDクラス5th、第二一八班の班長が「撫で魔」であるのもはや周知の事実であった。

そしてもう一つ、彼は極度の家族馬鹿おやばかであるのも有名な話だった。つまりとところ、ぐしゃぐしゃと緑に染めた髪を撫で回されている

リッドはアドルフの班の構成員であり、同時にファミリーだった。

朝から一時間かけてセットした髪型だと言っ事もこの班長の前では意味を成さない。

それこそ犬の子を可愛がる愛犬家のような勢いで、それはもう完膚なきまでにぐしゃぐしゃと撫で回されてしまう。

下手に逃げようものならば落ち込む困った人なのだ。

リッドは溜息を吐いて、とりあえず意識をアドルフの言っていた「先程の依頼」に戻す。

「まあ、強烈だったっすからね、あの人」

すらりと高い身長。

匂い立つ花もかくやと思わせる美貌に優美に引き締まった細身の

体。

一個の芸術品としてクリスタルケースに収まっている方が似つかわしいのではと思わせるそれは生身の人間で、おまけにそれが優しげな聖母のような微笑みを浮かべて銃を操り容赦なく襲撃者を打ち抜いているあの場面を見た時の衝撃ときたら　トラウマになりそうだった。

おまけにトドメのように外部魔力供出による精神汚染の解除までやってのけた。

「世の中にはとんでもないのが居るんっすね」

「だよなあ……まさか、一撃食らうとは思わなかったもんな」

「ええ？　班長どこかやられたんですか?!」

普段はただの家族馬鹿であつてもアドルフの実力は高い。

この年齢まで生き残り、一つの班を任されていることから上層部が彼に掛けている期待の高さが分かると言うものだ。

それがあの非現実的なまでに美しい依頼人から一撃を受けた　？

「そうなんだよなあ」

はあ、と溜息を吐いてアドルフは何かを思い出すように己の腹へと視線を落とす。

「何て言うか次の行動が読めなくなっさ……油断しちゃいなかったと思うんだけどな」

「何されたんすか？」

「トマトジューズをかけられた」

「……はっ？」

あの絶世の美女が？

リッドの頭の中に、あの麗人が艶麗に微笑み、「お前にはこれがお似合いだ、この犬が」とアドルフの頭からトマトジュースを浴びせかける図が浮かんだ。

似合いすぎ　ではなく、どこの女王様だそれは。

「本当にあの人がやったんっすか？　そんなステキプレイ……じゃなくて酷い事を」

「何でワクワクしてるんだお前……」
「気のせいっすよ、班長」

イイ笑顔で親指を立てたリッドを胡乱な目つきで眺め、アドルフは「やられたんだよ」とピンクの髪をクシャリと掻く。

「あのチビっこ……何なんだ」

「……チビッコ？」

「そうだよ。ほら、覚えてるだろう？　あのメンバーの中に居た」

「チビッコ、チビッコ……」

リッドは言いつつ首をひねる。

そう、依頼人だけではなくあの場には他に民間人が居た。

しかしチビッコ等と言う表現が当てはまりそうな誰かが居ただろうか？

「えーと、恐ろしいぐらいに綺麗な女王様に、金髪のFカップのお嬢様風の子に、社長秘書風のスーツの似合いそうなCカップのお姉さまタイプの子だったっすかね」

「そうそう、後もう一人居ただる。覚えてないか？」

「いや、さっぱりっす」

そもそも四人目が居た記憶すらない。

首を振るリッドにアドルフは太い眉を顰め、

「ほら、身長がこれくらい小さい、目がこーんな感じの、ものすごい目付の凶悪なチビッコが居ただろ」

「あー……」

眉間にしわを寄せて、目を指で横に引っ張って見せたアドルフにリッドは遅まきながらポムと手を打ち、

「はいはい、あの妙にふてぶてしい面構えで、生きしと生ける者全てを呪ってそんな目つきの……」

「そう、多分そいつだ」

「あの感じ悪い子供っすか。そう言えば居たっすね」

「え？ 結構印象的じゃなかったか？」

「いや、全然っす」

はたはたと手を振るリッドにアドルフは「おかしいなあ」と首を傾げる。

「班長から話が出るまできれいさっぱり忘れてたっす。実は今でも髪の色も目の色もさっぱり思い出せないっす」

「お前……」

「終わった仕事っすよ、班長」

「うーん、まあそんなだけどさ」

「班長は覚えてるっばいっすね」

「そりゃ覚えてるさ」

アドルフは右手の指を一つ一つ折りながら「ちびっこ」の特徴を列挙する。

「髪の色はちょっと赤みがかった焦げ茶で、長さはうなじぐらいで、耳が見えてただろ。で、わりと硬かった」
「班長……もしかして撫でたんですか？」
「いや、ウチの弟達みたいで、つい……」
「本当に手が早いっすね……」
「何かその言い方引つかかるな」

リツドの顔をじろつと横目で睨み、アドルフはそつと溜息を押し殺す代わりに視線をつま先に落としたりした。

本当にリツドは覚えていないらしい。

他の班員の反応も似たり寄ったりだった。

接触時間が自分だけ長かったせいかもしれない。

あのキラリと鋭く光る榛色の一重の目も、とがった顎も、四六時中不機嫌そうに結ばれていた口も、低い鼻も、アドルフは妙にはつきりと覚えてるにも関わらず、だ。

(笑つと結構普通の子供の顔になるのになあ……)

きつい感じの目が驚くほど優しくなるのに。

あれでもう少し愛想が良ければ大分印象も変わるだろうに。

もっとも、あの手癖の悪さと態度の悪さ、口調の悪さの三拍子そろい踏みではあの不愛想な顔の方が似つかわしいのかもしれないが。

「班長？ 思い出し笑いなんでどうしたっすか？ 頭大丈夫っすか？ そろそろ引退っすか？」

「馬鹿言え。俺が今引退したら残務処理全部お前らがひつかぶるんだぞ」

「ウソウソ！ 班長これからもついていくっすよー！」

「調子良いなお前……」

リッドの頭をもう一度抑えつけるようにぐしゃりと撫でてアドルフは顔を上げる。

セントラルの空は今日も良い天気だ。

あの小生意気なチビッコも今頃どこかで同じように空でも見上げているのだろうか。

あの駅で大はしゃぎしていたチビッコは。

(ま、良いか……)

何となく釈然としない物を感じつつもその思いに蓋をして、アドルフは「よし、じゃあ入った金有効活用するかー！」と叫んでぐっと伸びをした。

頭上ではパネル越しの光がさんさんと輝いていた。

余談 中央到着から逃走成功まで（後書き）

【作者後記】

ナカバの外見特徴を書いてみようと言っただけの理由で一気に書き下ろしました。

今晚は、こんな事やってる場合じゃないはずの尋です、どうも。

リクエストは書いてますよ……ええ、まだ途中ですが（目逸らし

後数行が埋まらない感じです。

何か落ちつかない（オチがつかないって事ですね……文字通り）の
で上げてませんが。

多分四本ぐらいほぼ同時に出来あがる事になるかと。

頑張りますー……ええ、ちゃんと挙げます。

作者拝

懐かしき日々(2) 前編(前書き)

リクエスト企画「酔っ払い話」です。
思ったより長いので、分割して挙げる予定です。

懐かしき日々(2) 前編

一体何がいけなかったのだろうか。

デュランはただ呆然とその場に立ち尽くしたまま、その言葉だけを頭の中で繰り返していた。

それはいつもと変わらない日常の続きとなるはずだった。

いつものように【外】で制限時間ぎりぎりまで擬獣を狩り続け、そのせいで浴びた体液をシャワールームで洗い流し、採取した断片をポッドへ投げ込み、今回使用した武器の試験データを保存し、これでやっと一息つけると上層階に昇ってきた。

そこまではいつもの日常の続きだったと言っのに。

自動扉の向こう側に広がっていたのは非日常の光景だった。

「……これは、一体」

ツンと鼻孔を突く異臭。

よどんだ空気の向こう側には変わり果てた同僚達の姿があった。

誰一人無事な者は見当たらない。

その事実デュランはすうと全身の血が冷えてゆくような恐怖を覚えた。

「一体、どうしてこんな……」

「うう……っ」

微かなうめき声。

それを耳で捉え、彼は視線を眼前の惨状から逸らし足元へと落とす。

そこには入口近くで力尽きたのか、扉に片手を伸ばした姿でぐっ

たりと倒れ伏す同僚の一人、ナタリアの姿があった。

その様に彼は一瞬躊躇い、それから何かを決意したかのように唇を引き結ぶと彼女の顔の脇に膝を着き、浅く呼吸を繰り返す彼女の頬を手の甲で軽く叩く。

「しつかりしろ……ナタリー、俺が分かるか？」

「う……ん……」

「説明してくれ。一体何があったんだ。どうしてこんな事に……」

焦点の定まらぬ目をのろのろと開いたナタリアに彼は苛立ちと焦りを抑えてデュランは尋ねる。

頭の中では既に結論は出ている。

追いつかないのは感情。

辿りつかないのは理解。

(一体何がいけなかったのだろうか)

こんな事になるはずでは無かったのに。

『シキ、前に文献にあった例の物、発見したぞ』

無造作に差し出したあのサンプルが、まさかこんな事を引き起すなんて。

『神経系への毒性があるのが難点だけども、ここさえ克服すれば問題ないと思う。一応検証しておいてくれないか』

『ああ、分かった。やっておこう』

そうして無造作に渡したあのシャーレ。

恐らく発端はそこだ。

それがこんな結末を引き起こすとは、あの時点で予測すらしなかった己の不明を恥じるべきか。

「う……………」

「ナタリー？」

ゆっくりと開いた水色の眼がデュランの顔へ焦点を結ぶ。
普段よりも赤みを帯びた唇が開く。

「あ……………ウランちゃんらー」

「俺は十万馬力の妹じゃないぞ」

こつんと額をつつき、デュランは大きく溜息をつく。

「酒くさ……………」

酔っ払い集団の中で一人素面のデュランは虚ろな目をしてぼやいた。

「うらんちゃん」

「デュ、ラ、ン。あとちゃん付け止めてくれって言ってるだろ」

「えへへー。うらんちゃんはあー、うらんなのれすー」

「あー、誰だこんな事したのは。てか何で酔ってるんだよ。まだ俺は酵母もどきを見つけただけだったってのに何で既にここまで完成してるんだ……って、こんな事出来るのは一人しか居ないか」

涼しげな容貌の天才の姿を探してデュランは視線を左右に向けるが、どうやらこのオレンジルームには居ないらしく姿が見当たらない。

可能性としては未だ研究室にこもっているのか、既にダウンして運び出されているのか。

前者であってくれ。

デュランは切にそう願った。

あれは【レギオン】の最後の良心の、はず、だ。

若干天然が混ざっているので、イマイチ言いきれない辺りが悲しい。胃がしくしく泣きそうな程度に悲しい。

(あいつに限って解毒薬作ってないなんて事無いだろうなあ……誰か無いと言ってくれ)

「るらるらん」

「どんだん原型が消えてってるけど俺の事だよな？」

首筋に腕をまわしてぶら下がってくる相手の頭をよしよしとしてやりながらデュランは「取り合えず解毒が先だな」と溜息を吐く。

目の前の円卓に乱立する瓶の山を見る限り、状況は最悪に近い所まで進んでしまっているようだが。

中にピーカーやら試験管が混じっているのは単純に容器が足りなかったせいだろう。

「張り切っちゃったんだな、多分……」

見れば誰の作品分かる。

この味もそっけもないシールに成分表としか思えない説明書き、ありとあらゆる調合を余すところなく網羅しているやり込みっぷりは明らかに

「う、あ、ん、ちゃらん」

「……こん平？」

難しい顔をしている処をぶに、と指先で頬をつつかれ、デュランは思考を首筋にコアラよろしくぶら下がっているナタリアに戻す。

「って近あつ?!」

「にへへえー、うにゃんちゃーん」

「俺は猫かよ……」

「ちゅーしよー」

「はいはい、良いから大人しく……は？」

(ちゅー? ……って、何だ?)

「うちゅー」

「だあぁっ!! 近い近い! ナタリー落ちつけ!」

慌てて寄ってきたナタリアの頭を咄嗟に掴み、デュランは精いっぱい胸を逸らし青ざめた。

そりゃデュランだって健全な青少年だ。

ナタリアのような美少女に言い寄られてキスを迫られて嬉しくない訳ではない。

が、

(これは違う、何かが違う……っ!)

少なくともこういうのはもつと違うもののはずだ。

もうちよつと夢とか、希望とか、男のロマンとかがあるはずだ。

断じてアルコール臭百二十パーセントの息を吹きかけられながら、タコ唇で迫られるものじゃないはずだ。

きつと違うはずだ。

違つてて欲しい。

「デュランー、えへへー、かくごー」

「覚悟が必要な事なのか?!」

いや確かに必要かもしれない。

応じたが最後、デュランの明日は絶対無事ですまない。

その事に思い当たり、デュランはさらに青ざめ、更に必死に離れようとする。

「ナターリーー！ はーなーれーろー！」

さすがに頭蓋を掴んだままではうっかり加減を間違えて握りつぶす可能性がある。

ので、掴む場所を肩に変更して押し離そうとする。
が、

「にゅふふふふー」

「ええー?! 何でだー!!」

本来白兵戦特化のデュランに他のレギオンのメンバーが純粹な力で勝てるはずがない。

はずがないのに、ナタリアの手足はまるで軟体動物のように絡んで外れない。

「ぐっ……このっ、正気に戻れー!!」

「うちゅー」

「い、嫌だぁー!!」

うつかり応じたら死ぬ。殺される。

その思いの一心でデュランはナタリアの絡んでくる体を押しつけようとむがく。

もはや絡んでくるついでに感じる体の柔らかさとか、匂いとか、体温とか、その他もろもろアレが当たってるとか、そんなものを自覚する余裕も無い。

「外れねえー!!」

「さけはによめどもによまれるにゃー」

「お前は既に吞まれてる!」

某北斗神拳継承者の海賊版のような台詞を返して、デュランは一歩下がる。

ナタリアが一步詰め寄る。

デュランが一步下がる。

ナタリアが更に一步詰める。

デュランが一步下がる。

背中に何かが当たった。

(い、行き止まり?)

絶体絶命だ。

かくなる上は覚悟を決めて壁を破壊してでも逃走するべきか？
デュランがその決意を固めて振り返ろうとしたその時、

「デュラン？ なぁに楽しそうな事をやってるのかしら？ んん

「？」

背後の壁が喋った。

否、壁では無くデュランの退路を断ったそれが喋った。

聞き覚えのありすぎる声に、デュランの関節がギギイと音を立てた。

(振り返るべきか、振り返らないべきか、それが問題だ)

某王子に匹敵するほど深い悩みと逡巡の後、デュランは取り敢えず眼前の脅威に視線を向けたままにする事を選択する。

「えーっと、アリス……だよな？」

「ゆっくりお話ししましょうか？ デュラン」

絶対零度もまだ温かい。

そう思わせるほどに冷たいアリスの声にデュランは一瞬、死とは何かを悟った。

「ア、アリス。お前……」
「はい、ストロップ」

振り向こうとした瞬間、後ろから回された手がデュランの眼を塞

ぐ。

ついでにグキツという音と共にデュランの頭は強制的に前を向かされた。

「……」

「……」

「……えーっと、何をしてるんだ？」

「あんたこそ何をしてるのかしらねえ？　ずいぶん楽しそうじゃない？」

ぎりぎりと眼球にかけてくる圧力にデュランの背筋に寒気が走る。言うまでも無いが、眼球は人体の急所の一つである。そこを破壊されればデュランとて痛い。

「ナタリアと何しようとしたのかしらねえ？」

「って誤解だ！　てか見ればわかるだろ！　この状況で襲われてるのはどっちだ？」

「うにやははははー、うちゅー」

「もう頼むから、お前も離れてくれよナタリー……お前タコみたいになってるぞ」

「うにょー？」

「絶対関節が妙な事になってるだろうっていかどうやったたらこんな風に曲がるんだ俺でも無理だぞ」

「うづーん……えへー」

「だあっ！　だから止めろって！」

「……楽しそうね」

「どこがっ？！」

突っ込もうとしてまた強制的に前を向かされる。

「い……っ！」

「前を向きなさい。首をもいだわよ」

「ええ？ 実行済み?!」

「デュラハンに改名ね」

「微妙に上手い……」

「ちゃんとマ抜けになってるのがポイントね」

「嫌なポイントつけられた!」

軟体動物のようにぐにゅぐにゅと絡んでくるナタリアの体を防ぎつつ、デュランは叫ぶ。

「そんな間抜けに問題よ」

「間抜けがいつの間にか名前に!」

「違うわ。ただの真実よ」

「……それはそれで嫌だ」

「ところで、今私脱いでるんだけど」

「また脱いだのか!」

「前を向きなさい」

「い、痛い! 髪を掴むな、抜ける!」

若禿げの恐怖におののくデュランにひたりと後ろから身を寄せ、アリスは見えてないだろう顔に笑みを刻む。

「ここで問題です。あたしは何処まで脱いでるでしょう」

「っ?!」

「だからあなたは前だけ見てなさい」

「もげたはずの首が痛い?!」

「で、どうなの?」

「何でこんな質問に答えなくちゃ……ってててて! 目! 目が壊れる!」

「で、どうなの？」

淡々と繰り返された言葉にぞっとし、デュランは「うーん」と近寄ってくるナタリアの頬を押しつけながら考える。

「え、えーと……上着だけ、とか」

希望的観測を述べてみた。

「残念、ハズレ」

「そ、そうか……」

「正解は……ぜん、ら、よ」

「今すぐ着ろ！」

「何よ、喜びなさいよ」

「この状況でどうやって?!」

叫ぶついでに振り返りそうになり、デュランは慌てて前を向く。背中に当たる二つの突起が非常に気になるが、今振り返ってはいけない。

そりゃデュランだって健全な青少年だ。

正直言って女性の体に興味がゼロという訳ではない。
が、

(これは違う、何かが違う……っ！)

少なくともこういうのはもっと違うものはずだ。

もうちよっと夢とか、希望とか、男のロマンとかがあるはずだ。

断じて生命と髪の危機にさらされながら脅されて目撃するようなものではないはずだ。

きっと違うはずだ。

違つて欲しい。

(つてこんな事さっきあつたような……てか、何だこの状況じきは)

前門のナタリア、後門のアリス。

進めば地獄、下がつても地獄。

逃げ場がない。

「だ」

ごくり、と唾を飲み込んでデュランは顔をひきつらせる。

「誰か、誰か助けて下さい　っ！」

世界樹の中心で叫んだ声に、取り合えず愛はこもっていなかった。

懐かしき日々(2) 前編(後書き)

【作者後記】

と言う事で第一段、須田様から頂いたリクエストの酔っ払い話でした。

(一部の)男の夢を叶えているのにさっぱり幸せそうでないデュラ
ンですが、まだまだ続きます。

作者拝

懐かしき日々(2) 後編(前書き)

やっとできた……。

懐かしき日々(2) 後編

どんな擬獣を相手にしても勝つ自信がある。
どんな敵に相對しても倒れない自信がある。
退かず、倒れず、負けない事。

【レギオン】の唯一の武力であり、剣である事。それこそがデュランの大切な役目の一つ。

後ろに守るべき物があるから。

だからこそ、己の力にデュランは誇りを持っている。
持っていた。

が、

(ど、どうすれば……)

擬獣より恐ろしいモノに挟み撃ちにされ、デュランはだらだらと冷や汗を流す。

前からはキス魔タコと化して襲い来るナタリア。

後ろからは春先に登場する露出狂と化して迫るアリス。

有体に言つて、絶体絶命のピンチだった。

「誰か！ マジで助けてくれ！」

>デュランはいのりをささげた。

>いのりはてんにとどかなかった

「って俺は口 ザかよ！ もう何でも良いからヘルプ！ ヘルプ！

すたっふー！」

イケメンデュランは声を振り絞って叫んだが、救いの手は何処からも差し伸べられる気配がなかった。当然スタップも出てこなかった。

その間にも刻一刻とタイムリミットは近付いてきている。

おもにナタリアの顔とか、生命の終わりとか。

頭の中に浮かぶ三枚のカード。

『紳士的』 『速攻』 『無理』 カードの切り方が人生だ。

(っつて、どうする俺、どうしちゃうのよ?!)
「か、かくなる上は……」

片手でナタリアの頭を抑えつけたまま、デュランはもう一方の手を背中に密着するアリスの体へ打ち込む。

狙うのは肋骨の別れ目からやや下。

不随意筋へ打ち込む命令信号。すなわち人為的な脳内血量の操作。その際手が何か柔らかいものを鷲掴みにしたような気がするだとか、今は気にしない。

(絶対後で殺されるけどな……)

泣きたい。

いや、泣かされるだろう。

が、一応謝っておく。

「アリス、すまん！」

「っつ……」

バチツと音がして、アリスの体がデュランの体にもたれかかるように崩れ落ちる。

こちらの背をクッションにして一度受け止め、頭を打たないように気をつける。

「なんまいだぶ、くわばらくわばら、じゅげむじゅげむごごーのすりきればるぶんで」

思いつく限りのまじないを唱えつつ、デュランは上着を脱いで、見ないようにしながらそつと後ろに倒れているアリスの上に掛ける。

「風邪引くなよ。まったく、何でこいつは毎回脱ぐかなあ……で、次はナタリーか、って」

「すぴいー……」

「おい」

いつの間にかプラインと頭を掴まれた姿のままやすやと眠っているナタリアに思わず突っ込みつつ、デュランは溜息を吐く。

「よくこんな姿勢で眠れるな……首おかしくするぞ」

これも一応抱き直して床に寝せ、ついでに「むはむは」と何と無く気になるが幸せそうな笑みを浮かべて夢の国に旅立っているナタリアのよだれを拭いてやり、デュランはやれやれと肩を落とす。

「何ていうか……無駄に疲れた」

どっかとその二人の間に腰を下ろし、デュランはうなだれる。

どっと疲れが押し寄せてきた。おもに精神面に。

先程まで【外】でやっていた命のやりとりなど鼻で笑ってしまう

ほど、さっきの状況は過酷だった。

（生還おめでとう、俺……誰も誉めてくれないから自分で誉めてみたんだよ悪いか）

さすがにちよっぴり気分がやさぐれたりささくれ立ったりしてるデュラン。

それでも一応いざってテーブルに近寄り、ビーカーの一つを手に取りる。

万一解毒の方法が確立されてない場合、この混沌たる事態を収拾できるのはデュランしか居ない。

ビーカーを顔の傍に寄せ、そつと手で仰ぐようにして匂いを確認し、デュランはその刺激臭に顔を顰める。

「えーと、どの辺の神経系に作用するんだったかな……」

「仕事熱心ですね、デュラン」

「うわ！ 脅かすなよレメク……何時から居たんだ？」

「最初からですよ」

カチリ、と縁なしの眼鏡を中指で押し上げ、レメクは小さく唇の片端を吊り上げる。

端正にして伶俐、氷の貴公子と名を取るレメクはこの場にあつて顔色に紅一つ差していない。

しかしその手に持っているグラスに満たされた琥珀色の液体は確かに「アレ」だ。

（まさか、レメクまでキスを迫ってきたり、脱ぎだしたりしないよな……）

それはなかなかぞつとしない話だ。

が、見た所異常は感じられない。

(もしかして個人によって耐性に違いがあるのか?)

「なあ、レメク。もしかしてお前、まだ酔ってないのか?」

「酔う……ああ、アルコールによる脳細胞のマヒの事ですね」

「そうそう、それだよ」

「そんな事はどうでもよろしい」

「へ?」

あっさり却下された。

「私は常々言いたい事があったのですよ」

「あ。ああ、そうなんだ……でも今はまずこの状態をどうにかしたい」

「デュラン」

「……おお」

「どうして何時も貴方ばかり、女性にもてるのでしょうか」

「……はい?」

もてた覚えが欠片もありません。

そう今この場で真顔で答えて良いだろうか? 多分駄目だろう。

(いや、そう言われてもな……)

女性陣に玩具や実験台やら技の試し撃ちやらに頑丈で便利だからと引っ張り出された事はあるが、あれを「もてる」にカウントするのは人として何か間違っているだろう。

あとはいわゆるご高齢のご婦人の皆さまか、生後数力月のお嬢さん方にはやたら引っ張りダコにされた覚えはある。

あれもまた「もてる」にカウントして良いのかは相当微妙なラインだが……。

「さつきも前後に二人を侍らせて楽しそうでしたね」

「必死だったろ?! どう見ても必死だったよな? 俺!」

てか助けるよ。

デュランは心の中で強くそう思った。

てか助けるよ、見てたなら。

そんなデュランの内心の呪詛に気付く様子も無く、レメクは「それに引き換え私と来たら……」と暗い笑みを浮かべてグラスを握る。

「ええ、そりやあ分かってますよ。私の仕事なんて地味ですしね。

地味なんですよね? 地味ですよ。ええ本当に。君みたいに派手じゃないですからね。ええ。下手をするとそのうち忘却の彼方へ葬られるんでしょうよ。ああ、それは無いですかね。何せ私は皆さんに注意を促す役割ですからね。そりや小言を言うような事は私だっただ好きでやってるんじゃないんですよ。でも必要だからやっているんですよ。それなのにまともな話は聞いてくれないし、君とさえほとんど新作を破壊してくれまして、アリスは服を脱ぎ散らかしたままにしますし、ナタリアの言う事は訳が分かりませんし、ユーディスは利益よりもシキを優先しようとするし、シキはシキであれほど健康管理をしるといつても倒れますし、ザイオンの研究費は馬鹿にならないですし……良いですか、お金は勝手に生まれたりはいらないですよ? ええそりやあ貨幣制度を復旧させたのはほかならぬ私ですけどね? だからと言って私が勝手に金を作り出せる訳じゃないんですよ? 錬金術じゃないんですから。大体経済がやっとなりだしたこの時期にそんな事出来るはずが無いでしょう。やっとなりルートやら造幣のめどがついてきた時期にそんな無茶出来るはず無いでしょう。というかそれが分かっていますよね。皆さん本当は分か

ってるんですよ。つまり軽い嫌がらせですか？ ええそりゃあ小言ばかりの私は皆さんにとってめざわりでしょうけどね。だったら言わなくてもいいようにしてくださいよ！ 私が好きで言ってると思ってるんですか！ 元老院との交渉まで私の所に回ってくるし、外交として愚痴も言えないし、苛めですか。そうですかそんな私には嫌な奴ですか。私だって、私だって……」

「ま、まあまあ……泣くなよ、な？ 泣くなつて……」

「どうせ空が黒いのも私のせいですよ。作物の伸びが悪いのも、実験の成果が思ったように出ないのも、白髪が白いのも、ダイエツトが上手くいかないのも、信号が赤なのも、機械系統のトラブルも、擬獣が出るのも、胃が痛むのも皆私が悪いんですよ。ううう」

「……ご、ゴメン、そんなに思いつめてるとは」

「うううう……どうせ、どうせ私なんて……」

「何かゴメンな」

首を強引に抱き込んだ状態で号泣するレメクに、デュランは今度もう少し仕事の割り振りを見なおそうと心に決めた。

考えてみれば彼らレギオンが研究に専念できるのはレメクが外交を一手に引き受けているお陰なのだから、もう少し今後は感謝の念を持つべきなのかもしれないし。

「苦労かけてるんだよな……」

「ううう……」

「って俺の肩がびしょぬれだよ。あー、だからレメク、悪かったってば。な？」

「……本当にそう思ってます？ 心から誓えます？ というか私の本気で言ってるのに貴方はこの期に及んで自分の肩の心配ですか。そうですか。私は貴方の肩ほどにも価値が無いと。ええ、そりゃあ分かってますよ。私の仕事なんて地味ですしね。地味なんですよね？ 地味ですよ。ええ本当に。君みたいに派手じゃないですからね。」

下手をするとそのうち忘却の彼方へ葬られるんでしようよ。ああ、それは無いですかね。何せ私は皆さんに注意を促す役割ですからね。そりゃ小言を言うような事は私だって好きでやってるんじゃないんですよ。でも必要だからやってるんですよ。それなのにまともに話は聞いてくれないし、君と言えばどんどん新作を
「……」

振り出しに戻る。

頭の中でそんな言葉が明滅するのを感じつつ、デュランはその一つ向こうで知らぬ顔でぐい飲みを煽っているザイオンに目を向ける。

「なあ、ザイオン……お前普段レメクにあんな無茶言ってるのか？
見ろよ、泣いてるぞ」

「私の子達の為には必要な事だ。例えば、『アッシュール・バニ・
アプリの図書館』」

「あー……うん、まあ分からないではないけどな」

シキのお気に入り玩具、L・O・Aロアを思い浮かべてデュランは苦笑する。

扱い切れるのは今の所シキだけ、生みの親であるザイオンですから辛うじて一部言う事を聞くだけというモンスターは、予算の半分以上を食いつくす暴食者でもある。

もっともそれ以上に生産性もあるのでコストパフォーマンスとしては安いもののだが　そう言えばあれはまだ稼働しているのだろうか。

（確か不在時も動けるように今度何か管理者を作るとか誰か言ってたな……えーと、確か何だっけ？　何かドールだとかそんな感じだったよな。名前が可笑しいとか可笑しくないとか言ってたけど）
「って、そう言えばお前は酔って無いのか？　あれ飲んだら？」

「あれ、とは？」

「その辺に並んでる試作品だよ……今お前が注いだ奴」

「ああ、コレの事か」

杯を傾け、ザイオンは無表情に呟く。

「それなんだけどさ。飲んでこう……体に違和感とか、つまり酔っているって感じはないか？」

「私が酔っている、か？」

「ああ、これらの液体には共通点があつて、確か脳の線条体、報酬系だったかな。いや、大脳新皮質、網様体……」

「和足しが四つて居る……」

「は？」

「渡しがよつ手入る……ふ、ふふふ」

「ザ、ザイオン？ もしもーし？」

思わず顔の前で手を振るデュラン。

しかし、ザイオンは無表情のまま声だけで低く「くっくっくっ……」と笑っている。

はつきり言おう。

見せて恐ろしく怖い。

「何がそんなにおかしいんですか？ 私が可笑しいですか。そうですか。そりゃあ滑稽でしょうね。ええ、君達のような優秀な人は良いんですよ。でも私は研究以外の事で時間を取られてるんですよ？ 私だつてですね、私だつてですね、もっと時間があれば色々やりたい事もあると言つのに雑事やら書類整理やら法律の草案やらで……」

「……」
「シヨル威勢りやら、なんてね……ふ、ふふふ」

「葬られるんでしょうよ。ああ、それは無いですかね。何せ私は皆さんに注意を促す役割ですからね。そりゃ小言を言うような事は私だって好きでやってるんじゃないんですよ。でも必要だからやっているんですよ」

「ふ、ふふふふ……」

「……この事態を俺にどうにかしろって言う事なのか？」

泣き続けるレメクと、笑いつづけるザイオン。

それらを交互に見て、デュランは思った。

無理だ、諦めよう。

(シキを連れてこよう……一刻も早く皆を解毒しよう)

同僚の知りたくも無い一面を知りつつ、デュランは一瞬の間を置いてレメクの腕を抜け出す。

振り返ってみるとレメクは相変わらず、今度は目の前の壁に向かって嘆き続けており、ザイオンはまだ一人でクスクスと笑いつづけていた。

「……」

デュランは黙って合掌しておいた。

「さつとと……気分を切り替えて、つと。お、居た居た。ユード」
「デュランさん……」

机に突っ伏していたままだった顔を上げ、とろ、とした眼差しを向けたユーデイスにデュランは「ごめん」と苦笑して、「シキを知らないか？」と尋ねる。

「シキ……」

「そうだ。お前なら分かるだろ？」

「シキ……」

「うーん……やっぱり思考が酔いで可笑しくなってるか……」

「君も……」

「ん？」

「君もシキのこと、言っただね……」

「……」

何だろっ。

物凄く嫌な予感がする。

デュランは今からでも回れ右して帰ろうかと思ったが、上目遣いのユーデイスの眼差しが妙に迫力があって逃亡を許さない。

「皆シキ、シキ、シキばかり……」

「いや、そんな事は……」

「シキって良い子だから……シキは優しいから、綺麗だから、そうやって皆シキの優しさに付け込んでくるんだよね、あの（ピー）で（ピー）（で）（バキューン）なウジ虫どもが」

「……お、おい、ちょっと」

大丈夫かこの子？

いや、絶対大丈夫じゃないだろう。

無音声で見ているに、何だろうこのさっきから聞こえる「お聞かせて浮かべているのに、何だろうこのさっきから聞こえる「お聞かせてきません」のオンパレード。

「皆、皆、シキを食いものにするクソ害虫ども……」

「も、もしもーし？ ユーディ、いやユーディさん？ ユーディ様？ 戻って来てくれないかな？」

「シキにたかつてくる害虫は僕が駆除しなくっちゃ」

「いやいや、それは拙いだろう」

「どうして？ あんな（バキューン）なんて、（ピー）を××してそれから して、（ピー）を根元から一寸五分刻みにして、それを（ピー）な（ピー）に（お聞かせできません）してあげようかな……」

「あげないでくれ」

と言うか聞いているだけで怖い。

これ以上傍にいてはいけない気がする。飛び火してきそうだ。

デュランはそつと傍を離れた。

ユーデイスにはどこか知らない場所で幸せになって貰おう。

「……って、これで全滅か」

とりあえず、まともに話が出るのは誰も居ない事は分かった。酒って怖い。

デュランはしみじみとそう思いながら一先ず事態の收拾を諦めて外にしようと扉へ向かった。

ラボに行けば多分、解毒剤があるだろうし無ければ自力で作るしかない。

（最悪簡易版でも注入するかな……けど、あれあんまりやりたくないんだよな……）

と、目の前で扉が開く。

ふわっと流れ込む新鮮な空気アルコール臭で淀んでいた空気が揺らぐ。

「あ……」
「おや」

目が合う。

「デュラン……どうしたんだ？」

「シキーー!!」

「え？ え？」

「シキー、待ってたー！ 俺らの救世主！」

「……は？」

きょとんと瞬いたシキの両手を握り、デュランは「良く無事で……」とちよつと泣きそうになった。

「大体さ、俺渡した時に言ったよな？ 酔っようなシステムは抜きにしようって」

「ああ、そうだな」

「はい」とデュランへサンプル二十一番を注ぎながらシキは微笑む。

それを「どうも」とあっさり受けてデュランはさらりとそれを水のように飲み干す。

「で、それがどうしてこうなるんだ？」

目の前は相変わらず死屍累々、阿鼻叫喚、混沌でもまだ足りない

ぐらいの酔漢地獄が繰り広げられている。

まあ、既に大半は潰れて今起きているのはザイオンが一人虚空に向かつて何か呟いては無表情に笑い声だけ立てている状態だが。

「ああ、それなら……アリスから提案があつてな」

その様子をまるで遊び疲れて眠る子犬でも見ているかのような優しい微笑みを浮かべて眺めながら、シキは返された杯を受け取る。

とはいえ、器が足りないのでデュランは茶碗、シキが持っているのは食器ですらない。メートルグラスだ。

その縁に口をつけて小さく舐めるように飲んで、シキは目を伏せる。

「アルコールによる酩酊状態にも利点はあるのでは、と。それで、一先ずそのままの状態で出してみた」

「またアリスか。あいつロクな事しないよな。その上素っ裸って…

…はあ

「……また脱いでいたのか？」

「おー……まったく勘弁してほしいよな。何で毎度毎度」

「アリスにはアリスの理由があるのかもな」

「素っ裸になる理由ねえ……」

ぐっ、とまた一杯呷り、デュランは胡乱な眼をオレンジルームの天井に向ける。

「そんなものあるか？ ってそうじゃなくて、それでこのまま出したって言う事か？ 俺との約束破って？」

「ん……それは、その……ごめんなさい」

「はあ……頼むよ」

「すまない、検証してみたくなくて……」

「この実験馬鹿」
「ごめんなさい」

しゅん、と肩を落としたシキにデュランは厳しい表情を改めて苦笑する。

「まあ、張り切るの分かるけどな。でも、これは作り過ぎだろ」
「ごめん、作ってたらつい……」

「ま、お前はそう言う奴だよな。解毒剤、あるんだよな？」

「ああ、ここに」

「じゃあ、後で皆潰れてから投薬するか」

「にえへへー」

「うわっ！ ナタリー！」

いつのまにやら復活してきたナタリーに飛び付かれ、デュランは前につんのめって危うく机に額から激突しそうになる。

バンと手を着いた拍子に卓上に並んだサンプルが一斉に跳ねて音を立てる。

「あ、危な……」

「にゅへへー、しーちゃん、うらんちゃん」

「その設定は続行なのか……って、だからちゃんは止めてくれてる言ってるだろ」

「うーん……えへ、うちゅー」

「うええっ?! またあっ?!」

「しーちゃんもうちゅー」

うにゅー、とタコ唇で迫るナタリア。

それにシキは小さく笑って頭を引き寄せ、

「はい」

額に軽く口づける。それに「おかえしなのですう」とナタリアも頬に口づけを返す。

「にゅへへへー、ちゅーしちやった、です」

「……え？ それだけ？」

「無理に拒むからこじれるのでは？」

「シキに説教される日が来るとは……」

「……デュラン、軽くひつかかる内容のような気がするんだが。はい、ナタリア。口開けて」

「うにゃ？」

「あーん」

につこりと女神の微笑みのシキ。

「あーにゅ」

へにゃーとエンジェルスマイルのナタリア。

その開いた口の中に笑顔のままシキはポイと何かを押し込んだ。数秒の沈黙。

「みぎゃ?!」

四肢を突っ張らせてそのまま後ろ向きに倒れたナタリアにさすがのデュランも青ざめる。

「い、今の……」

「解毒剤だが？」

きらきらと、罪の無い優しい微笑みを浮かべたシキに、デュランは青ざめたままの顔をナタリアに向ける。
白目を剥いていた。

「……シキ、後でちょっとこの薬について話し合おうか」
「？」

「まあ、どうせお前の事だから効率優先でいったんだろうかな……」
「何か拙かったのだろうか……」
「まあ、不味かったんだろうな……きつと」

デュランは溜息を吐いて、目の前のサンプルを取って一気に煽る。

「デュランは酔わないのか？」

「んー？ んー、そうだな。どうも【報酬系神経伝達制御端子】^{ベルセルク}の影響で勝手に解毒されてるっぽいな。シキも平気っぽいのは多分そのせいだな。この前の改良版が利いてるんだろ、多分」

「そうか……」

「何で残念そうなんだよ」

「いや、ほら、皆楽しそうだろう？ だから私もやってみたかったんだ……」

「楽しそう、ねえ……」

（ある意味面白過ぎる事態にはなってるけどな……）

まあ笑えない事の方が圧倒的に多かったが。
遠い目をするデュランの隣で頬杖を着き、シキは微笑する。

「アリスが言っていた」
「ん？」

「アルコールによる中枢系マヒには確かにマイナスの面は大きいけれども、暗黒期以前の文明では一種の娯楽やストレスの軽減、治療、

或いは創作活動の補助としても使われていたそうだ」

「あー、何かそんな話は聞くな」

「その面を軽々に無視して、完全に削除することが果たして私達のやるべき事なのかどうか……そう言われてな」

「ふーん……で、見てみてどうだ？」

「そうだな」

シキは周囲を暫く見回し、

「……レベルを落とした方が良いかな？」

「そうしてくれ」

ちよこんと首を傾げたシキにデュランはがっくりと肩を落として苦笑いした。

後日談。

この後デュランが発見した酵母以外にも三十四種類の新種の酵母が発見され、あの場の「第一回試飲会」の場で提供された物は酪酐レベルを八段階ほど落として、うち四種類が実験的に一部で公開される事となった。

ちなみに第二回についてはデュランの聞くも涙、語るも涙の努力の末に中止、凍結された。

その後の製酒法、飲酒規制法の制定など実際に稼働するまでには様々な思考錯誤と討論が【レギオン】の中で、繰り返されることになるのだが 彼らが最も優先して力を注いだのは、あの「死にそ

うなほどに不味い解毒薬」の改良だった事は秘密、である。

懐かしき日々(2) 後編(後書き)

【作者後記】

色々トラブルも挟んだ為に大幅に遅れましたが、須田様リクエストの「酔っ払い話」でした。

お待たせいたしましたして申し訳ございませんでした。

あ、ちなみに日本の法律では未成年者の飲酒は禁止されており、お酒はルールを守って愉しく、迷惑をかけず、脱いだりキスを迫ったり絡んだりつまらないギャグに自分で受けちゃったり脅しちゃったり呪っちゃったりせずに飲みましょうね。

作者拝

雑談 観光旅行の数カ月後 前編（前書き）

リクエスト企画、ナカバのスクールライフです。
基本的に健全です……のはずです。
では、どうぞ

遅い。

オレは校門に寄っかかったまま、タンタンと靴先でタップする。腕に着けたダイバーズウォッチを見てみた。

約束の時間から二分が経過してる。

これで十二分オレがここに立ちっぱだつて事が分かる。あーあー、戻ろっかなあ。変にじつとしてるとまた某ストーリーカーに絡まれかねんし。

「ったく、あのアホ苺頭め……中身までスイーツ（笑）にしたって遅刻するたあ何事だ」

禿げの呪いでもかけっぞこら。

心の中でオレがブツブツ文句を言っていると、人混みの中にちらつとピンク色の髪が見えた。

お？

「ちよつとすみません、すみません……」

中へ向かう人の流れに逆流しながらオレはそのピンクの後ろに回り込み、

「でやっ！」

ふくらはぎに蹴りを入れた。

「どわっ！」

「遅刻したら死刑だからな」

「お、おお…… お前、マサキか？」

おう、オレだ。他に見えたら目が重症だな。

「アポロ」。お前さあ、時計読めねえわけ？ 待ち合わせ何分前だよ」

「アポロじゃなくてアドルフ。いや、さっきからずっと居ただけだな。お前がどこにいるのか見つけ切らなくてさ」

頬を掻くこいつはアドルフ。

見た目は毒な頭にチヨコな顔、ピンクと茶色でアポロチヨ　な奴だが、これでも傭兵派遣企業DDDの構成員だ。

ま、性格行動共にスイーツ（笑）だけどさ。

ちなみにこいつ、オレの友人のリムリンというそりやあもうトリプルSランクの美少女に片思い中。

で、あんまり可哀そうだし、中身は笑えるが悪人でも無いし、ご飯奢ってくれるんで今日はその見返りとして奴をウチの学校の文化祭に招待したのだ。

まあ、せいぜい頑張れ。

無駄だと思うけどな。

だってさあ、服装がデートのつもりにしちゃアレだ。

今日も服装は至ってラフ、上は紺色のポーターシャツの上に白の半袖のシャツ。下は白っぽいチノパン、それから……おおおお、これはもしかやアディ　スの新作スニーカーか！　ちくしょう金持ちめ。

でもカツコイイなコレ。

いいなー、いいなー。

「……ってここでしゃがんだら通行の邪魔だぞ」

ああ、動くな！ 見えん！ スニーカーが見えん！

「おい、マサキー？」

「邪魔」

「……」

あー、良いなー。此処のライン好きなんだよなー。お、底の部分も何か工夫してあるっばいぞ。どれどれ。

「なあなあ、足上げて」

「こうか？」

「上げ過ぎじゃ、ボケ」

誰がY字バランスせいっつたか。
てか高すぎて見えねー！！
ぎゃーす！ ジャンプしても殆ど意味ねえー！！

「くっ……っのっ……！」

……。

ぜー……ぜー……。

「ごめんごめん、下ろすからちょっとどいてくれ」

「おのれ……良い根性してやがんじゃないかねえかこのヤロウ……呪うぞ

「ラ……」

「いや、つい何かこう……あ、いや、気にするな」

はい？ 何を？

まあ良いや、意味不明な尊頭はほっとくとして、取り合えず文化

祭当日である。

ウチのがっこは文化祭は二日間あって、一日目は校内専門。外部招待は二日目。

今日は二日目。

近所の人から保護者父兄、学外の友人まで自由に立ち入り出来る日だ。

私立つってもウチは別に出入り規制の厳しいお嬢様学校でも無いので、招待状は必要ない。

アドルフも別に来ようと思えば自由に入れるんだけど、まあこいつの立場上入りこむにや色々面倒だろうからオレから一応声をかけてやったって事だ。

後でポンデ奢ってもらえる事になった。リムりん、ダシにしてすまん。

「あっちが一番新しい十二号館……中身はパソとかその関係だな。んで、あっちが第二体育館。何かダンス系の出し物やってるハズだった気が……」

「お前は普段何処に居るんだ？」

「オレ？ 二号館」

歩きながらちよこちよこ説明する。

地図は苦手だから見ない。自分の学校の内部ぐらい地図見んでも把握してるしな。

「あっちの奥の方。何だ、リムりんの席とか知りたいのか？ むっ

「つりスケベ」

「ち、違う！　そう言う意味じゃなくってだな」

「へー……そーかそーか。お前もお年頃だもんなあ、アポロ」

「アドルフ」

「あれだろ？　女子学生のスカートとか、その中とか興味あるんだろ？」

「無い」

「本当か？」

「……まあ、その、ちょっとは」

「うわー、やっぱりか。リムりんは今日はピンクに黒の花柄レースだぞ」

「何でお前が知ってるんだ！！」

「ヒミツ」

ヒント、更衣室。

「お前なあ……そう言う事言うなよ」

「想像するからか？」

「……」

「ひゅー、若いねえ」

「お、お前なあ……」

ぎゃはは。ダメだ、笑える。

さつきからなーんかこっちの制服珍しそうに見てると思ったんだ。やっぱそーゆーこと考えてる訳か。

「お前がそういう制服着てると、その……あれだな」

「あれ？　あー、うん、似合わねえよなあ、コレ。デザイン可愛い子向けだもんよ」

オレはスカートの端を掴まんで、頷く。
ちなみに今着てるのはいわゆる冬服だ。

秋のこの時期はまだ夏服のセーラー着てる子もいるけど、オレは冬服にチェンジしてる。

ちなみに首から下は全部学校指定。

とりあえず、出来そうな所からは全部金取れるだけ取るうつつー
私立根性マル見えだ。

白いシャツにリボン、その上に黒のベストおあセーター。リボン
と同じ柄のプリーツスカート。黒靴下。靴。

この学校の卒業生のデザイナーさんがデザインしたらしい。

男子のがただの詰襟だつてのに比べて、女子のはすっげー凝って
る。

なんつーかこう、デザイナーさんの「女の子かわいいよ、女の子
ってイイんだよ」みたいな怨念、じゃなかった執念、妄念、うーん
……うん、まあそう言う主張を激しく感じるステキ制服だ。

雑誌の「可愛い制服特集」とかで中央大陸代表とかの一つで選ば
れちゃうぐらいの凄制服なのだ。

だが。

だがしかし。

いや、可愛いよ。可愛いんだけどすっげー着る人選ぶよなこれ。

こう、へそのチヨイ上までV字カットの入ったこのベストとかさ、
リムりんみたいなのぶにんぶにんのお胸には良いですよ？

でもオレみたいな大平原の小さな胸(?)には「わびさび」の局
地みたいな感じになるだけですから。

プリーツたつぷりのこう言うスカートとか、オレみてえな超安産
型下半身体型の奴にや似合わないんだよ。

ちなみに、女子柔道部、女子レスリング部の「漢！」なおねーさ
ま方が着ると、間違つてガンダが女装してます、みたいになる。

これって制服としてどうなんだろ。うーん。

「いや、そうじゃなくて……って、そう言う行動止めとけて」「ん？」

「スカート。ズボンと違って中見え……じゃなくて、見える危険性があるだろうが」

「あー、平気平気。ほれ」

言っただけはひょいっと膝上までめくってみせる。

「スパッツ着用」

「……」

「いたたたた！ てめえっ、何しやがるこのむつつりスケベ！」

「お前はもうちょっと考えて行動しろ！ 天下の往来で何やってんだ！」

「だから、中履いてるから平気だつてんだろが、ボケ！」

「そう言う問題じゃない！」

「じゃあ履いてない方が良いつーのかよ！」

「そんなのは問題外だ！」

さりげなくランク外にしゃがったなこの野郎。

ていつ！ がぶりっ！

「お、お前噛むか？！ 普通噛むかっ！？」

ぐきぎきぎきぎき。

「しかも地味に痛い……って、ストップ！ ストップ！ ギブアップー！」

ふっ……ごまあみる。

奴の手にくつきり歯形を残し、オレはふふんと笑って口元を手の

甲で拭う。

何故か奴がハンドタオルで拭き直した。

何だよ、ちゃんと拭いたぞ。

「いってー……お前、あーあー……よだれが……」

「ペっペっ」

「しかも地味に今追撃かけたよな、精神的な」

「や、別に……リステ ン、ファブリ ズ……」

「絶対わざとだよな？」

「や、別に」

オレが知らん顔すると、奴は「はーっ」と重い溜息をついて、オレの服の襟やらタイやらを直す。

お前はオレの親せきのおじさんですか。

「てか、どっか緩んでたか？」

「お前が暴れたからな……」
「……」
「……」

礼を言う気が失せました。

「ま、良いや。えーと、リムりん達の出番までまだ時間あるから屋
台奢れ」

「ん？」

「ん？ じゃねえよ。奢れ。慰謝料」

「何の？」

「……」

「はい、何でも致します」

無言で足を振りあげたオレに、奴は一も二も無く賛成した。

未だに急所蹴りの恐怖が忘れられないらしい。
人間は学習する。良い心がけである。

じゃがバター、焼きそば、キャラメルポップコーン、ホットサン
ドウィッチ、シューマイ……。

「むっ、むめーむ（むっ、くれーぷ）！ー！」
「まだ食べるのか」

勿論。

「クレープだな。って、アレ普通デザートじゃないのか？」
「あ、ツナ&コーン下さい」
「はい」

クレープはおやつです。

「お前も何か食うか？ お前の金だからな、遠慮しないで食うが良
い」
「……いや、俺は良い。あ、俺が払いますんで」
「毎度ありがとうございますー」
「ほら、さっさと」
「さっさと」

さっさと。

「その体のどこに入ってたんだろうな……」
「胃に決まってるだろうが」

がぶり、と食い付いて食べながらオレは返す。

あと焼き芋とか、タコスとか、焼き鳥の店もどっかにあるはずだ。
えーと、マップ、マップ。

「近くにあらあとたこ焼きの店があるぞ」

「あ、そこウチのクラスの出店だから良い、イラネ」

「お前の所も模擬店やってるのか」

「うん」

「手伝わなくて良いのか？」

「良いの良いの。オレ基本的に裏方だから仕事もう終わってるし、
店頭なんざ出ねえよ……っ」と

はみ出しそうになった具を舌ですくって巻き込む。セーフ。

見たら何故かアドルフが頭を抱えていた。

何だよ、制服クリーニング代高いんだぞ。こぼしたらアウトだろ
うが。

「お前なあ、動物か？」

「鉱物じゃねえな。てか動物じゃなかったら何なんだよ」

「いや、えーっと……もう少し上品に食べるよ」

「どうせオレ下品だもん」

何故目を逸らす。

良いよ、別に。

クレープの最後の三角形を大事に食べて、オレは包み紙を近くの
ゴミ箱にポイツと投げる。

外れた。

アドルフが拾って入れ直した。

うん、すまん。

「ちゃんと捨てるよ」

「分かってるって」

説教くさいなあ……まあ、面倒見が良いのは確かだろうけど。こいつ微妙なところで鈍いつーか無神経なんだよな。

オレが今日、ここに招待した意味がちゃんと分かってるんだろうか？

ま、気付かないならそれで良いけどさ。

「あ、そろそろリムりん達の出番だ」

「ん？ そうだっけか？」

ヲイ。お前が忘れてどうする。

リムりん見に来たんだろ？ しっかりしろよな。

「そうなんです。第一体育館で外部向けのデモやるからさ。リムりん成績優秀だし、可愛いから良い宣伝になんだよ」

「あー、なるほどな。だから招待制じゃなくて自由に入れるのか」「そうそう」

要は次の入学希望者への宣伝も兼ねてるって事。

実際、九号館じゃあ受験生向けの学校案内とかやってるし、生徒会からパンフ配布係なんかも出てる。

見栄えの良い連中が今も頑張ってるハズである。ご苦労さん。

「で、体育館に今から行くのか？」

「行かねえよ？」

「へ？」

「今から行っただって席埋まってっし、碌に見えもしねえ二階で延々突っ立ってるのもかったるいだろ？」

「いや、俺は平気だけど」

こいつ、体力馬鹿なの忘れてた。

オレはコホンと咳払いする。

「とにかく、安心しろって。ちゃんとリムりん見える場所案内すっからさ。特等席」

「へえ……」

信じてないっぽかったんで、取り合えず一度殴っておいてオレは目的の場所へ向かって歩き始めた。

雑談 観光旅行の数カ月後 前編（後書き）

【作者後記】

学校生活、と言う事でしたが学園祭になりました。

い、良いですかね？

とりあえず珍しくナカバが可愛いと親《作者》は思うのですがどうでしょう？

そして、この辺で既に人物関係読めたそこの貴方はニマニマしながら読むと良いと思います。

……ニマニマ出来ると良いなあ。

続きます。

雑談 観光旅行の数カ月後 後編

「ここって関係者以外立ち入り禁止……」

ロープをひよいつとくぐったオレの後ろでアドルフが何かブツブツ言ってるんで、オレは立ち止まって振り返る。

ここは第一体育館から道一本挟んで隣の三号館。別名、実験棟。つっても理科室とか、資料室とかその手が集まってるだけなんだけどさ。まあ、大したもんが無いんでこの管理なんてずぼらも良いトコだ。

実際、こんな日にロープ一本と数字の南京錠だけ。

えーと、ここの数字の暗証番号は多分……うーん、ゼロ、ゼロ、ゼロ、ゼロ、ゼロ、かな。

ガチャン。

ほら、やっぱり開いた。

ちよろいぜつ。

「おいつて。ここ関係者以外立ち入り禁止なんだろ？」

「オレ生徒。バリバリ関係者」

「俺は？」

「……。ま、見つかったら頑張れ」

「お、おい、せめて何かフォローしてくれよ」

オレはロープをどっこいせ、と跨ぐ。それからスカートのめくれたところを直す。

やっぱズボンじゃねえと動きにくいなあ。

「マサキ」

「何だよ。オレのフォローなんて意味ねえぞ？ マナレスの言う事なんざむしろマイナスに動くぞ。良くてあー、こいつか、で終わりだろ」

「……」

うーん、ちと薄情か。オレが誘った訳だしなあ。

一応フォローしねえとな。

「ま、じゃあ復唱」

「お、おお」

「生徒が屋上に上がりこんでゆくのを見て、危険だから助けようと思いました。で、DDDの身分証。これでOK」

「屋上行くのか？」

「うん」

オレは廊下を通過して外付けの階段に出る。そこから踊り場へ進み、壁についてる梯子に手を伸ばす。

「よーいせ、っとー！」

後は昇るだけだ。

ふふん、どうだ。運動神経切れてるオレでもこれぐらいできるんだぜ。見直したかこんにやろう。

「おーい、アポロ。お前も来いよ」

「い、いや……」

「何だよ、DDDの癖に。登れねえとかいうオチじゃねえだろうな。オレでも楽勝だぞ？」

「そうじゃなくて」

「ならとつと来いって。リムリンの出番来ちまうだろ」

さて、サクサク登るか。

えっちらおっちらやって、屋上まで登る。最後の突起に手を引っ掛けて、ひょいっと上に体を持ち上げる。

ずるっと手が滑った。

やばい。

「っ！」

「……お、つとお。あー、びっくりした」

落ちる前に掴みなおしたオレえらい。

「お、お前なあ！ 考えて行動しろよ！」

「何だよ、セーフしたじゃん」

オレは下で梯子に掴まってるアドルフを見下ろして言い返す。

まあ確かに、今落ちたらあんた巻き込む位置だけどさ。良いじゃん、落ちなかったんだから。結果おーらい、終わり良ければすべてよし。

仮にオレがどじって落ちてもDDDなら根性でどうにか出来るだろ。

「うし、リトライ」

オレは足を梯子に掛け直す。

「お前なあ、そう言う……ああもう、分かった。俺が先に登る」

「先って、どうやって？」

言ったオレの後ろをひゅうと何かが通り過ぎた。

「よっ！」

おお、こいつ梯子の下の段からオレを飛び越えて一気に屋上まで登りやがった。

非常識人間め。

万国びつくりショー人間め。

「……何でここで俺が睨まれるんだ？」

「や、別に……」

「？ まあ良いや。ひっぱり上げるぞ。掴まれ」

えー。

うーん、まあでも確かに時間もないし、仕方ないか。

オレは伸ばされた手に手を伸ばす。ついでに一言。

「ふぁいとー」

「……いつぱーっ？」

お約束だよな。

諸君、オレは高い所が好きだ。

諸君、オレは高い所が好きだ。

木の上が好きだ。歩道の脇石の上が好きだ。椅子の上が好きだ。二段ベッドの上の段が好きだ。三階の教室で窓の枠に座るのが好きだ。

この地上に存在するありとあらゆる高い所が大好きだ。

公園のと真ん中にあるジャングルジムのてっぺんで仁王立ちするのが好きだ。

公民館の壁につけられてるホチキスの針みたいな形の梯子を見た時など心が躍る。

台風の日に傘を持ってベンチの上からジャンプして、一瞬体が浮いた気分を味わうのが好きだ。

公園のオブジェに挑んでついにてっぺんまで登った時など胸がすくような気持だった。

木登りして、上の方になってる小さなサクラランボを食べるのが好きだ。

樹齢ウン百年の木の梢に跨って、葉っぱの間から空がキラキラしてるのを見た時など感動を覚える。

高層ビルの展望台から下を見下ろす様とかはもうたまらない。

ついでに腰に手を当ててこっさりムカ大佐の真似をするのも最高だ。

天気の良い日にじいちゃんちの屋根の上へのぼって、日向ぼっこ&隠れんぼするのが好きだ。

敢えてエスカレーターを使わずに非常階段で登るのも好きだ。

エレベーターで一階から最上階まで一気に行くはずが、途中で呼び止められて止まっちゃうのはとても悲しいものだ。

世界最大の噴水から吹きあがる水を見るのが好きだ。

折角並んだ高低差一五〇メートルの観覧車に身長制限でお断りされるのは屈辱の極みだ。

諸君 オレは高い所を、天国のような高い所を望んでいる。

諸君 オレと一緒に登ってきた諸君

諸君は一体何を望んでいる？

さらなる高みを望むか？

情け容赦のない高さを望むか？

それともリムリンの華麗な模擬演武を望むか？

「よろしい、ならばリムリンだ」

「いや、急にどうしたんだお前。大丈夫か？」

真剣な顔で心配された。主に頭の。

黙って拳握って息吹きかけたら視線逸らしやがったが。

このむつつりチキンめ。

「しかしここ、随分見晴らし良いな」

「だろ？」

んー、と伸びをしてオレは珍しそうにしてるアドルフの方を見る。

「ここ、気に入ってたんだ。登るのちつとめんどいけどさ、邪魔されねえし」

「お前ってもしかして高い所好きなのか？」

「うん、煙だから」
「そっちなのか」

別にもう一個の方でも良いけどさ。
オレはちょいちょいとアドルフを手招きして、屋上の端っこに腹這いになる。

「こっちこっち」

「お、お前ちよっとは気をつけろよ」

「何だよ、これぐらいで落ちやしねえよ。こっからリムりん達が良い見えるから来いって」

「いや、そうじゃなくて何ていうか……」

はぁ？ はっきりしない男だなお前は。

「お前リムりん見られなくなっても知らんぞ。お、出てきた！」

「いや、前より後ろ気にしろって」

「いえーい、リムりん、可愛いぞー！ ひゅーひゅー！」

やっぱ特待生の制服可愛いなー。ひらひらのフリッフリですよ。それと生足万歳。

足首ほっそいなー。

ふくらはぎのラインがたまりませんなー。

若い女の子は肌のつやが違いますなあ。

はー、眼福眼福。

「……お前、本当に十四歳の女か？ オヤジの発言だぞそれ」

あれ、口に出してたっばい。

「いや、でもピチピチのお肌だぜ」

「ピチピチって……お前何時の生まれだよ」

「今をさかのぼること十四年前の事じゃった……西の空には不吉を告げる赤き星が……」

「はいはい」

流された……。

「だいたい、ピチピチってんならお前も同じ年だろ」

「んー、まあオレもまだぴちぴちかも。触ってみるか？」

「はっ?! お前、馬鹿か? 馬鹿だろ!」

「……締めて良い?」

「ま、待った! 目つきが怖い! 目つきが怖い! それより今は彼女の演武が優先だろ!」

「ちっ……」

どうせオレ馬鹿ですよ。

ふん。

いいさ、確かに今はリムりん見てる方が大事だからさ。

気を取り直して、足をバタバタさせてリズムにのりつつオレはリムりん達の演武を眺める。

そしてたら、何か言いたそうな顔をしてアドルフがオレのスカート裾を引っ張って直しやがった。

をい、エロススケベ……。

横目で睨んだけどヤツはリムりん達の方を見ていた。

……正直な奴。

「何ていうか、彼女以外は本当に学芸会レベルだな」

「そうか?」

「動きも練度も構成も、彼女だけ頭一つ飛び抜けてるな……他は何

と言っか、酷いな」

「ふーん、オレにはよう分からんけど」

酷いかなあ……。

リムりんがすっごいとは思っけど。

「一般の教育機関じゃトップでもこんなものなのか……」

「？」

「……」

「……」

てーい。

「あいたあっ?!」

「何難しい顔してんだよ」

「……？」

「何か変な事考えてただろ」

「いつ？」

「……って何想像してんだ。エロ男」

赤くなるなよ。そう言う意味じゃねえよ。

「お前ここに何しに来た訳？ 別に一般の学校の教育レベルとか戦力の分析に来たんじゃないだろ。リムりん見に来たんだろ？ なら余計な事は考えない。思う存分みとれてろ」

ベシベシと頭を叩いて説教かますと、奴は苦笑いした。

おい……。

「いや、怒るなって。まあ、お前の言う通りだよな」

「そうそう。エロ妄想してる」

「……エロ妄想なのは決定なのか」

「え？ お前他に何かできんの？」

「……」

「あ、ちなみに妄想までは許すけど、実行したら……つぶす」

ぐっと手を握りしめた動作に奴が内股になった。

ふっ、分かればいい。

……や、実行しようとしてもオブジェクトAのオレがレベルM A

X勇者の奴に勝てるとは思えんけど。

それにしてもリムりんは可愛いなあ。

ふんふふーん。

「可愛いよなあ」

「ああ、可愛いな」

「だよなあ、だよなあ」

あの可愛さは国宝級だよな。

しっかり心のアルバムに焼きつけないと……思ったんだけど焼きつけたらアルバムって燃えちゃわない？

うーん、まあいつか。

取り合えず燃えカスになるまで焼きつけておこう。

それから、オレたちは演武が終わるまで一言も喋らずにいた。

屋上から戻る時にちょっとばかりもめたが、結局オレが三発殴つて、奴におんぶされることで妥協した。

てか、人一人抱えてあっさり屋上から地面に着地って……DDDの白いモバイルスーツは化け物か？

「ふーい、お疲れーオレ」

「俺じゃないのか」

「うん」

何でお前を労わにやならんだ。

「……」

「……」

「……」

……。

「はいはい、荷降ろしお疲れさん」

「そこなのか……」

「ん？ 他になんかあったっけか？ あ、うんうん。了解」

オレはパンツと両手を合わせ、

「ごちそうさまでした」

奢ってもらったんだしな。

「……」

「あと、ありがとうございました」

両手を前で揃えて、アドルフへ告げてからゆっくり頭を下げる。目を爪先に。

お礼はしっかりきちっと、誠意を込めて。じいちゃんの教えだ。

「ありがとう……って。急にどうしたんだ？」

何故おろおろしだすんだ責様。

「何か悪い物でも拾い食いたんじゃないか？」

「拾うのは決定なんだな。ほっほう……いい度胸だ」

遺書作成はすませたか？

神様へのお祈りは？

道の端っここでガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK？

「……す、すまん」

次やったら殴るぞ。

「悪かったって。でも急だったから驚いてさ……茶化す気は無かったんだけど」

「ふーん」

「てゆうか、本当にどうしたんだ急に？」

「あー……うん、まあ、付き合わせたし」

「付き合う？」

「何でそこでテンション上がるかな……違っつて。オレ、学園祭とか参加しない人だったから」

「参加しない人？」

「うん。下準備までで終わり」

一人でうろろしてて妙なのに絡まれても嫌だしな。
こんな風に普通に食べ歩きとか、こいつが居なけりゃ無理だった
ろっし。

「リムりんもヴィーたんも忙しいし、今回も止めとこつかなーとは思
ってたんだけどさ。アポロのお陰で色々見た回れたし。さんくす」
「忙しいし、って……他に誰か居ないのか？」
「あー、居ないんじゃない？ ま、しょうがないわな。迷惑かけられ
もん」

あっちがオレの事嫌いだとしてもさ、それが迷惑かけて良いつて
な理由にやらんだろ。

オレはそういう、きつたはったのドロドロが苦手なのだ。
苦手なもんには近づかない。

「……」

「ん？ 何だよ、暗い顔すんなって」

オレは笑って奴の腹をバシバシと叩く。手を止める。

「……やっぱ怒った？」

ま、怒るよな。

「うん、ごめん」

「あ、いやそっじゃなくて……何と云うか、俺で良ければまた付き
合おうか？」

「ん？」

「こっぴいイベントとかさ、一人で参加しにくいってんなら……誘

えよ

「えー」

「えー……っておい」

「いやいや、お前どう考えてもムリだろ。働いてんだしさ、お前の都合で仕事が動かせるわけじゃねえし、休日不安定、呼び出しいつ分からん状態だろ。見栄張って無理すんなよ」

ぺしぺし、と腹を叩いてオレは笑顔をつくる。

「気持ちだけもらつとく」

「……嫌そうな顔で言うなよ」

失礼な、笑顔のつもりだよ……一応。

……うん、そう見えないらしい事知ってる。

この前やったら「怖い」と言われた笑顔ですが何か？ 難しいんだよ、口がひきつるし。

「いや、ホント良いって。そこまでムリしてオレにコネ売ってもあんまし意味ないぞ」

「そう言うつもりじゃ……」

「なら尚更却下です」

オレは溜息を吐く。

「お前さ、良い人なのはもう分かったから。目的見失うなよ。ほれ、がんばれ。応援してやつから」

「あ、おう……」

「お前は何か言う事ねえの？」

「ん？ えーっと、誘ってくれてありがとう？」

「疑問系かよコラ……」
「スミマセンありがとうございましたあああつ！」
「……ちよつとひつかかるがヨシ。じゃ、また来いよ」
「……また？」
「そ、また」

オレは笑う。

「今回ので中の建物の配置とか、部屋の場所とか覚えてる？ これ
でリムりん誘って動く時も安心だな。大体リムりん使うのはあの辺
りだからさ」

「お前……案内しながらそんな事考えてたのか」

「だってさ、リムりんがDDDん中入る事出来ないならアンタが来
るしかねえじゃんよ」

当日になってどこに何があるか分からない、なんてオタオタし
たら絶対リムりん評価に超マイナスポイント加算間違いなしだし。
リムりん、基本男には厳しいから。

「ま、オレができるのはこの辺までだから、あとはお前が頑張れ」
「……良いのか、俺に教えて」

「オレ、友達の事考えなしにばらしたりしねえよ」

「いや……そうだな、ありがとう」

「同情するなら金をくれ」

「いや、感謝したんだけど……」

通じないかー、でも普通オレの世代じゃ知りませんからー！ 残
念っ！

ま、これでやる事全部……ん？ 全部？

「か、良かったらか」

「あー！ー！ー！」

「うわっ！ 今度はどうした！ 何があった！」

「ポンデ！」

「は？」

「ポンデ！」

「……ああ」

「ああ、って今言ったか？ ああ、って言ったなよな？ 言ったよなっ？ まーさーかー……」

「い、いや……忘れてたわけじゃ……」

「ほんとに？」

「……おお」

「本当に？」

「……おお」

「胸に手え当てて、お前の大好きなリムりんに誓って？」

「……おお」

「ふーん」

「……すまん、忘れてた」

「ちえりおー！ー！」

頭を下げた奴のつむじにオレのチョップが決まった。

余談。

この後、オレはアポロからポンデを奢ってもらった約束を取り付けた。

後日ってことになったけど。

アドルフは何か最初はブツブツ言ってたけど別れる時は笑顔だった。多分、サイフ延命出来たのが嬉しかったんだろう……正直な奴
うん、でもまあ、オレは義理を守る漢だ。^{オトコ}
だから、一応次にアドルフに会う時は今回のリムリンの演武写真
もってってやるうと思ってる。

オレって基本、気配りの人なのだ。

雑談 観光旅行の数カ月後 後編（後書き）

【作者後記】

何時か別視点書いてみたい。けど需要があるのかどうか……。

今晚は、尋です。

せっかくなので色々パロディいれてみました。

諸君、で始まる某演説をいれたばかりに、そこでずっと止まっていた事は自分だけの秘密です。

リクエスト残り二つ。

多分次は「ナカバ不機嫌になる」の巻です。

来週も見てね。じゃんけんはしませんけれど。

作者拝

飯談 夏と言えば海でしょう 前編（前書き）

リクエスト企画『女の子特有のアレで超不機嫌なナカバに、デュランが出掛けようとなだる。体調不良で嫌がるナカバにデュランがキレて、ナカバも一緒にキレて理由を叫び、空気が凍りつく話』……です。

先に申し上げておきましょう。
看板にある程度の偽りあり、です。

仮談 夏と言えば海でしょう 前編

カップルやら熱帯夜やらで色々と暑苦しい今日この頃、皆さんいかがおすごしでしょうか。

どうも、ナカバ・マサキです。

種族は人間、年齢十四、性別何故か女。

言ってみりゃ一応年頃のじょせーってな奴である。

ま、この年になるとあんまし普段女の子の子する気もねえし、してもねえオレでもまあ人並みに色々発生してくる事情って奴がございまして……うん、まあ、アレですよ。アレ。

女に生まれちゃったからにやどーしようもねえ、アレです。

や、確かに世の中になや「そんな事、まったくアタクシには関係ございませんことよつ、ホホホ」みたいな人も居るんだろうけど、オレにとってはこんな日はかるーく拷問レベルでうざったいです。はい。

オレはそんな感じの脳内中継を打ち切って、胡乱な眼で目の前にキラッキラした水面を睨む。

アホ魔王デュランが「夏と言えば海開きなのだろう?」と一言のたまったせいで、今オレ達は某スポーツジムの屋外プールに居る。

ちなみに例によってスポーツジムまるごと貸し切り中。

入り口の鍵をデュランが普通に開けてた。

何でも、こここのスポーツジムを経営してるオーナーさんがデュランの笑顔一つであっさり貸し出してくれたんだそう……ちっ、これだから美形の男は。死ね。

てかさあ、そもそもここ海じゃねえじゃん。プールじゃん。海開き違うじゃん。

いや、そんな事はどうでも良い。

オレとしては夏休みの貴重な時間をやりかけの脱出ゲームクリアに注ぎこみたかったんですが？

相変わらずの我がまま五歳児め。

呪われて髪の毛がワカメになってしまえ。ついでに「海の中で出汁が出ないの何でだろー」って水底で踊る病気にでもかかってしまえ。

「どうしたナカバ、泳がないのか？」

オレが心の中で呪いの言葉を唱えていると、その呪いの対象が暢気にやってきた。

相変わらずのお見事な九頭身のプロポーションに純白のオフショルダー、その上にシースルーの白いシャツ。白のクロップドパンツに白のミュール。

長い黒髪は今日はポニテにしてるが、長さがありすぎて先端は足首に届いてる。

立てば佳人で、座れば傾城、歩く姿は美の女神。

「……」

誰かこいつを殺^やっちゃくれないだろうか。

「どうした？ 何をそんなに不満そうにしている」

ほほう、感謝しろと言いたい訳か貴様は。

乙女のビミョーなジジョーというやつをことごとく無視しやがってオレを強制連行しやがるときながらそう言う事言いますか。

オレは体育座りしたまま、ジロツと奴のアホみたいにお綺麗な顔を睨み上げる。

それにデュランは首を小さく捻って「具合でも悪いのか？」とか聞いてきた。

「まあ、ある意味……」

「そうか」

オレの地を這うようなひくーい声にデュランはふむ、と頷き、

「では泳ぎに行くぞ」

「死ね」

脱いだサンダルで叩いておいた。^{はた}

避けられた。

てめえ、人の話聞けよ。てか避けるなよ。

「何をする」

「そりゃこつちの台詞だつーの。とにかく、オレは行かない。動かない。私は貝になりたい」

「なりたいのならばなつてくれば良いではないか」

「お前が沈んでこい」

「……何をそんなに不機嫌になっている」

オレの様子が変だつて事がそろそろ分かってきたのかデュランが紫色の目を少し曇らせ、膝を抱えて座り込んでいるオレの傍に膝を着き、視線を合わせる。

「どつした」

「……」

喋る気力も今のオレには無いんです。

ほつといてくれ。

「ナカバ？」

デュランの細くて長い、冷たい指がオレの額に触れてこめかみの方へそつと前髪を撫でつける。

……おかし気障い。やめる。

てか、オレはぐずってる赤ん坊ですか？

オレは重い溜息を吐いて、デュランの手をうつつうしげにペシッと叩き落とす。

「行きたきゃ勝手に自分で行って来いよ。オレここで見物してっから」

「しかし、そんな長袖姿ではのぼせるぞ？」

「ほつとけ。良いんだよ、これ気に入ってたんだから」

ニクロの長袖フード付きパーカー（灰色）。イチキュツパなり。うん、まあ別にそんな事はどうでも良いんだけど……。

オレは座ったまま向こうの方で遊んでる皆さんを見してみる。

リムりん、ヴィーたん、それから名前は知らんけどデュランが引き連れてきたぼんきゅっぼーんなお姉様、渋マッチョなおじさま、暗い感じの美少年。それからこの状況でもやっぱりキチツと執事服を着こなして、プールサイドでまめまめしく働いてるセシエン君。

あれ？ どっかにヴィスカスも居るはずなんだけど見当たらねえな。

「なあ、デュラン。ゴツキーどこ？」

「ん？ ああ……いきなり足に頬を擦り寄せてきたのでな。重石をつけて水底に沈めておいた」

「ふーん」

じゃあこの位置からじゃ見えんわな。
オレはもそもぞと座り直して、膝をぐっと抱えた姿勢で隣のデュランを見上げる。

「で、何でこのメンツでプールな訳？」

「此方側の連中は賑やかした。プールはお前の友人二名の要望だな」
……ごめん、リムりん、ヴィーたん。ちょっとだけ恨んで良い？

「お前は……」

「ん？」

「泳ぐのは嫌いではない、と前に言っただけじゃなかったか？」

「別に嫌いじゃないけどさ……」

いい加減返事をするのも嫌になってたが、オレは気遣いの人なんで、辛抱強く我がまま五歳児の会話に付き合う。

「でもとにかく今日は泳がない。此処に居る。艇子でも槍でも動かさない」

「……ふむ」

微苦笑すんな。

肩を竦めたデュランにムツとしたが、これ以上言っても無駄に会話して精神消耗したくなかったんでオレはむつつりと黙りこむ。

別にオレだって好きでここでじーっとしてる訳じゃないんです。デュランにはきつと分かんたらうけど。

オレがひたすら黙っていると、デュランはスツと視線を落とし「そうか」と呟いて立ち上がった。

ふわり、と奴の着ているシャツが風をはらんで揺れて涼しげな香

りが鼻先をかすめる……ってそう言えばお前も水着とか着てねえじゃん。泳がねえ気満々じゃん！

あんにやろう……実はあの顔でカナツチとかだったら大笑いしてやる……。

……うん、でも、ま、いつか。

とにかく折角静かになっただし、寝ようかな。

オレは膝を抱えた姿勢のままデッキチェアの上でゴロンと横になって目を閉じる。

ふー……さーて、どうやって時間潰そうかな……。

「……？」

そうして暫くぼーっとしてたら、また何かが傍に来ていた。

何だ？ 邪魔すんな。

そう思いながら閉じていた目を薄く開いてみる。

さっきの渋マッチョのおっさんが居た。

何の因果かこいつも美形だった。

肉食系男子。や、男子っつーにや年食い過ぎか。

がしつとぶつとい肩、がっちりした顎、無精ひげ、ワイルドタイプな感じのえーっと……おっさん。

……何？ また美形の男ってオレ呪われてんの？

何で出て来る男、出て来る男、全部こんなんばっかな訳？

そんな事を考えつつ、オレは愛想笑いを浮かべて一応聞いてみる。

「あの一……何か用ですか？」

「ああ、起しちまったか。悪いなちびっこ」

……ちびっこ。

「あの、オレもう十四歳なんですけど」
「十四?!」

何故そんなに驚く。

「あー、そっぴや人間ってなあ成長がやたら早えんだったなあ。成程」

頭ぺしぺしすな。縮む。

馴れ馴れし過ぎだろ、このおっさん。

てか、今の反応は十四にしちゃ成長してるなってな驚きだったのか……ちよつと新鮮。普段逆だもんよ。

で、逆ってことはつまり、

「その台詞からすると貴方はやっぱり魔族ですか？」

「……あ？」

「……え？」

暑いプールサイドで冷たく見つめ合うオレとおっさん。

無論ここから恋が芽生えたりなどはあり得ませんが。

「……」

「……」

「そちらのお方はリゼライ卿ですよ」

オレとおっさんが何か妙な沈黙のまま見つめ合っていると、爽やかボイスがさりげなく紹介してくれた。

ふむ、この声は、

「さすがだだっこ様の従卒^{おせじ}、卒ないねセシェン君」

オレは顔を上げて、現れたもう一人の魔族、銀髪金目の爽やか青年セシエン君を見上げる。

それに、セシエン君は「恐れ入ります」と流れるような動作で会釈した。

ちなみに、残念なことにこのセシエン君も美形な男の一人だ。デュランがレベル一〇〇美形だとすると、セシエン君は十七か十八ぐらい。

こっちのリゼライ卿っておっさんはうーん……十一ぐらいかな。好みが分かれそうだしなあ……ちょい悪オヤジ好きが採点したらもつとイイ線行きそうだ。

ん？ リゼライ「卿」？

「……って事はこの人も四大卿？」

「お、ちびっこ良く知ってるなあ。感心感心」

だから撫でるなって。軽く潰されそうですよ。てか、これはまたあれか。お手をする子犬をほめてる時の反応だな。

まあ、確かにアンタ方にとっちゃオレなんざ珍獣でしょうな。へいへい、どうせオレはコビトカバですよ。けっ。

「お？ 何だあ？ 拗ねたのか？ 可愛いなあこのボウズ」

「ボウズじゃねえし」

「お、もう一人前の男だったか？」

……。

「あ？」

……。

「いや、まさかメスか？ いやいや、そりゃねえよなあ」

言うなりオッサンは無造作にオレのパーカーの裾をぐいと掴んでめくり上げ、

「やっぱりオスだよなあ」

ぺちぺちと遠慮なくこっち肋骨を手でたたきやがりました。

……。

プチィ……ッ。

オレのゴルディアンノットが切れた音がした。

同時にオレは渾身の力を込めてリゼライ卿改めセクハラ魔族の腹をけつとばした。

「おおっ?!」

「てめえ……締めろっ!」

「ナカバ様!」

奴を締めるところか、逆に後ろからセシエン君にオレが羽交い締めにされました。

しかも、そのままぐいーっとセクハラおやじから引き離すように空中に持ちあげられる。

にぎやーす！ 離しやがれっ！ ぎやーすぎやーすっ！

じたじたと足を、手を振り回すけどびくともしねえでやんの。

セシエン君、君って実は「わたくし、脱いでもすごいんです」な人だろ？

「な、なんだあ？」

体力ゲージが常に真っ赤なオレの一撃など大したダメージじゃなかったらしく、セクハラおやじの方は蹴られた腹を掌で擦りながら「イミフ」とでも言いたげな様子だ。

おのれ！。

そこに直れ、成敗してくれろ！。

「ナカバ様、どうぞ落ちついて」

じったんばつたんと暴れてるオレを抑え込みながらセシエン君が言ってるが、これが落ちつけるかアホンだら！

「奴がつ、泣くまで、殴るのをやめないッ！」

「それもなりません！」

「何をそんなに騒ぐんだこの少年は」^{ボーイ}

「いえ、リゼライ卿、その、ナカバ様は淑女でいらっしやいます」^{レディ}

や、その表現もどうかと思うぞ。

疲れたし、届かねーし、しょうがないんでオレはだらーんと手足の力を抜いて取り合えず大人しくなる。

背中にセシエン君の体が当たってて微妙に居心地が悪いっす。
もうどうでも良いから下ろしちゃくれねえかな。
肩パーツが外れそうです。

「レディだあ？ その体型でかあ？」

うっさい。だまれ、潰れる。

「人間は我々とは成長速度が異なりますから」

セシエン君が苦笑した気配。

「ナカバ様は幼態期でいらっしやるのかと」

「あー、なるほどなあ」

何か納得してるっぽいけど……ヨータイキって何だ？

「ま、これからってことか。三百年後が楽しみだなあちびっ」

「いや、それ多分白骨だから」

超スリム型軽量ボディですよ。

「ところでセシエン君、ヨータイキって何？」

顔を上げて訊いてみた。

「そうですね……人間の場合は何と云うのでしたか。幼児……いえ、
違ったようないえ……」

正解だったら即、地獄に落としてたぞ。

「成体の前段階ですから……成長期というのは人間にも使える言葉でしたか？」

「あー、うん。オレもリムりん達も確かにその時期だわな」

諦めたらそこで成長終了ですよ。

オレの言葉にセシエン君はほっとしたように微笑み、

「ナカバ様もいずれ、百年ほど経てばあちらの人間のように成体に近付くのでしょうかね」

「えーっと……」

百年ならまだ生きてる可能性はあるが、むしろ縮んでる時期だぞ。

「ってゆうか、リムりん達もオレと同じ年齢だから」

「……」

「……」

何この沈黙。

「……種族が違うのですか？」

オレは人間じゃあボケエー！！

誰がベロですかっ！

ニンゲンニナリタヒ。

「いや、しかしあっちのお嬢ちゃんがたはもっとこう……プリンとした、好い胸してるだろ……さすがにあれと同じでコレってのはなあ」

べちべち。

……。

「一度ならず二度までもー！」

「おおっと」

またもや回避されて、オレはセシエン君に羽交い締めになれたままじじした動き

「……何だよ」

疲れたので動くのをやめた。

うん、本当に何か、凄く疲れた。

動く気無くした。

「うっさいな、あんたらに言われなくても分かってるんだよボケ」

オレはぶつきらぼうな声で呟く。

「残念な体で悪かったな。別にアンタ達には関係ねえだろ」

「……ナカバ？」

向こうの方に居たデュランが此方を見て眉をひそめる。

オレは視線を逸らす。

分かってるよ、それぐらい。言われなくたって。

だから暑い中服まで来て大人しくしてたのに、黙ってたのに、なのに。

「なのにどうしてこんな事するわけ？ 信じらんねえ……」

「ナカバ様……」

「ああ、はいはい、そーですよ。どーせひんぬーですよ、発育不良ですよ！ そう言やあ満足かよ！」

「ナカちゃん？」

驚いたみたいにリムりんがプールから顔を上げてこっちを見たけど、勢いがついたせいか止まらない。

引き際だって分かってるのに、口から勝手に言葉出る。

「残念な体で悪かったな、アンタら喜ばす為にどっこいしょつともおもわねえけどな。オレだって……っ！」

オレ、だって……。

……あー、ま、もう良いや。

すーっと、頭から血が引いてゆく感覚。もう、いいや。

怒りは長くは続かないもんだし、オレは別に……最初から怒っちゃない。ただ。

「ナカバ様……？」

急に静かになったオレにセシエン君が心配になったのか声をかける。

「どうかなさい……」

「……ていつ」

ガンツとセシエン君のアゴに頭突きをかまして、腕が緩んだ隙にオレはひょいっと抜け出す。

アイアムフリーダム。あいきゃんふらーい、いえーい。

「……じゃ、つて事で」

「ナカバ様、お待ちください！」

やなこった。

片っぽサンダルを適当に後ろに「取ってこい！」の要領で投げて、オレはそのまま振り返らずダッシュで更衣室へと駆け込んだ。

意地でもあんな奴らの前で泣きたくなかった。

仮談 夏と言えば海でしょう 前編（後書き）

【作者後記】

涙が出ちゃう。だってナカバだって女の子だもん。

IF話ですが、ベースはきちつとしてます。

さらっとも読めますし、深読みしようとするれば幾らでも深読み出来ます。いろんな問題が背後に絡んでますから。

さて、傷心のナカバがどうなるのか。

後編に続きます。

作者拝

仮談 夏と言えば海でしょう 後編(前書き)

PCが入院から返ってきました。

と言つ事でお待たせし……ているかどうかは分かりませんが、後編です。

注……ますますリク内容から離れていきます。

仮談 夏と言えば海でしょう 後編

更衣室を出てすぐの所はロビーになってて、観葉植物だとか、無音テレビだとかが置いてある。

その隅っこのベンチに座って、オレはぶちぶちと呪いを唱えていた。

ちなみに片足裸足なんで、ここまではケンケンで来た。片足だけムキムキマツチョになったらどうすっかね。

「へーへー、良いですねー、Cカップ以上の方は。どうせオレはAマイナスですよ。ブラジャー要らずですよ。背中と胸の見分けがつかみませんよ。ぺったんこですよー……どうせ」

ケツカンシャ、ですよ。

一向に伸びてくれない身長とかと、多分これも同じ事なんだろうけどな。

ジパング人の血だけが原因、なのか？ 本当に、それだけ、なんだろうか。

「あー、くそ。だっせー……」

「まっただ」

「お？ よおフェロモン魔王」

「よお、小型爆弾。泳がないのか」

背もたれに寄りかかって、頭をのけぞらせて挨拶したオレとは逆向き方向に、デュランの何かもう色々な問題がどうでも良くなるような綺麗な顔がこっちを覗き込んでた。

しかも、未だに「泳ぐかどうか」なんて事をほざきやがってるの

でオレはちよつと笑ってしまった。

「泳がねえ。見りゃ分かるだろ」

まあ見ての通り既にオレは水着も脱いでTシャツにハーパン姿だ。それに眼球にさかさまに映ったデュランは「つまらん」といつものように返したただけだった。

……何かこいつのマイペースっぷり見てたら、落ち込んでるの馬鹿馬鹿しくなってきた。

オレは顔を戻して、掌で目の周りをごしごしと擦る。

「ナカバ」

「何だよ」

「擦ると皮膚が荒れるぞ」

「平気平気。元からそんな感じの顔だし。オレ、ハートで勝負するタイプだから」

「ああ、なるほど……毛深いのだな」

「ほつとけ」

否定はしねえけど。

「小さいのだな」

「うっさい！」

否定できねえけど！

「つてもしもーし、何してんですかー？」

勝手に人の眼球付近触らないで欲しい。指刺さったら失明すつぞ。デュランは何か新種の玩具でも見つけた子供みたいに真剣に、オ

レの眼の下を触ってる。

「おい、何してんだー？」

「もしもーし、動けないんですけどー？」

デュランの冷たい指は相変わらずオレの顔に触ってる。

上目蓋を撫でて、下目蓋に指先を当てて、下へ向かってびろーん、
つてオイ。

「あつかんべえ……」

「アホか。てかオレの顔で遊ぶな」

真顔で呟いたヤツの顔をぐーで殴ろうとしたが、ひよいつと回避された。

「……」

「ていていていていていていつ！」

「ひよひよひよひよひよひよひよひよいつ。」

「くっそー……」

「おのれー、ちょこまかと避けやがってー！」

「大人げないぞデュラン。一発ぐらい殴られる」

「だが断る。お前の一撃は案外強力だからな」

「隙あり！」

「しかし当たらないな」

「にぎやー！ くそう、微妙に得意げな辺りが更にむかつくー！！
ていつ！ ていつ！ この野郎ー！！」

「隙だらけだな」
「みぎやつ?!」

おによれ、何時の間にオレの背後……っつーか襟首を。
これは間違いなく一本釣りコースだな。

と思つてたら予想通り、朝帰りのお父さんの手にぶら下がってる
スシみたいな感じでぶらーんっと。

そろそろこの状況に慣れてきてる自分がちょっとだけ悲しい。

「ふむ、惜しいな」

「何が?」

つてもしもし? オレをぶら下げたままどちらへ?

さつきまでいたプールとは方向が違うけど……階段登った先つて
何があつたっけか。

「ナカバ、先程は聞かなかつたがお前、泳ぎは得意か?」

「え、うん……まあ……でも泳がんぞ」

「ふむ、まあそれだけ確認できれば充分だ」

「……デュラン、嫌な予感しかしねえんだけど」

「良い勘をしているな、相変わらず。いや、頭が回るのか」

「……」

全力全開、逃走せよ!

フルパワーでじたじたするオレを悠々と掴まんで運んでくデュラ
ン。ちくしょう、チートめー!

「変態、痴漢、エロ魔王、誘拐犯、暴行魔、我がまま五歳児、無神
経、ノーデリカシー」

「おや、語彙が増えたようで結構だな」

「俺はノーサンキューです!!」

結構です、って事。あ、意外と余裕あるじゃんオレ。

「ああ、予定していた船がで無くなると言う……」

「それは欠航」

「血の流れ」

「それは血行」

「なさねばならぬ……」

「それは決行」

「違う、鷹山の教訓歌の一部だ」

「相変わらず無駄にこっちの文化に詳しいなあオイ」

オレてつきり、漫画のセリフかと思ってた。

何だっけ、確保のススめ？

って、ふわっと体が浮いた　へ？

どぼーん。

「ぶわっはあっ?!」

「ふむ、なかなか良いリアクシヨ」「でーい!」

ばっしやーと縁に立って何か喋ってたデュランに水しぶきをぶっかけ、オレはブルブルと頭を振る。

思い出した。

ここ、二階にある会員制室内プールだ。さっきのより狭いし、深いし、ついでに言うつと

「冷えたか？」

「冷えるに決まってんだろボケエ！ つーか冷たすぎ！ 冷水プールに投げ込みやがって！ 心臓マヒ起こしたらどうしてくれるんだ！」
「毛が生えているから無事なのでは？」

にこやかに笑うデュラン。お前が心臓マヒしろ。

「てかオレ水着とか着てねえ状態だったのに……」

「着衣泳と言うのだろう？」

「着衣泳と言うのですよ。勉強になりましたねー…… ってアホかあ
っ！」

ばっしやばっしやばっしやばっしや！

ススツと下がるデュラン。

しぶきがかからないギリギリラインで腕組みして、ちょいちょいと
とか指で挑発してきやがりました。

ふっふっふ、油断してるな。

「秘儀、水鉄砲！」

「何？」

びゅー、びしゃー。

「いえー、成功」

「何だ今のは？」

かかった水を軽く払いながらデュランが興味津々寄ってくる。

あー、何か奴の紫の目がキラッキラしてる。

すっげーワクワク、すっげードキドキ、すっげー嬉しそうだよこ

いつ。

ねえねえ、今の見た事無い。どうやったの？ って感じた。

「水鉄砲だけど」

「どうやった」

「えーっと……ちょっと来い来い」

なになにー？ ってな感じで寄ってくるデュラン。プールサイドにしゃがみこむ。

「水に手え浸けて」

「ふむ」

「こーやって、ていつ」

ばしゃーん、その二。

髪の毛掴んで水の中に引きずり落としてやった。

「……」

「うつしゃあ、成功！ ざつまあみるー！！」

「やれやれ……」

ふふん、やられっぱなしのオレと思うなよ。

水も滴るウホッ、いい男になってるデュランは呆れたような目でこちらを見てたが、やがて口に手を当ててクスクスと笑いだした。室内プールの壁に奴の笑い声がエコーしてちよっと面白い。

「何だよ」

「いや、まったく……お前は面白い」

……微妙に釈然としねえな、オイ。

って、え？

見てる間にデュランの体がすーっと浮いた。浮いただけじゃなくてそのまま水から浮かび上がって、水面に立ったポーズで止まった。おお、これが噂のあれか。

右足が沈む前に左足を沈めて……ん？ これじゃやっぱり沈んでるような？

「それどうやってんの？」

「座標軸と空間間物体干渉条件、それと……まあ良い、手っ取り早く体験する方が早い」

「のわっち！」

いきなり体が浮かび上がったんでちよつとだけビビった。ちよつとだけだけどな。

おー、水面立ってるよオレ。あめんぼみてえだ。

「なあなあ、歩いて良い？」

「構わんど。ああ、その前に……」

パチンという指を鳴らす音と一緒にオレの服がずぶぬれから元通りに戻る。

相変わらずご都合主義満載な奴だ。

「良いぞ」

「いよっしゃあー！」

おおおお、何か無駄な感じで楽しい！！ 特にものすごい無意味な辺りが楽しい！

「水上スケート」

「……若いな」

自称二十四歳の言葉じゃねえな、それ。
まあ仮に自称が正しくても、オレより一回り年上ですけどねー。

「あ、そついやデユラン」

「ん？」

「お前結局何したかったわけ？」

「ん？」

ん？ つてオイ。

「さて、何だったかな……まあ気は済んだか？」

「え？ 何でそこでオレの話？」

……ん？ もしかして柄にも無く心配してくれてるんだろうか？
余計な御世話だが。

「んー、済むも何も無いけどな。普通」

「そつか」

「あ、えーと……うん、勝手に抜けてごめん」
「ん？」

いつの間にかプールサイドに膝を着いて、水に手を浸していたデユランが顔を上げる。

「ああ、それならお前の友人二人に言っただけ」

ぴゅーと綺麗な放物線を描いて水を発射させ、デユランは苦笑する。

「今頃表のプールは冷凍庫と化しているぞ」

「え、マジで？」

「本当にお前の事となると見境がなくなるなようだな、あの二人は四大卿が正坐させられていた」

「うわ、見たかったかも」

惜しい事をした。

「まあ、そろそろ戻らねばな……」

言ってデュランが小さく咳き込む。

「あ……」

「ん？ 戻るのが気まずいか？」

「や、そう言う訳じゃねえけど……」

「ならば素直に戻っておけ。人間に許された時間は短い。失いたくないと分かっているものを取り戻すのに迷っている時間は無い」

「……アンタが言つと説得力あるなあ」

「皮肉か？」

当然。

じゃ、って事で。

「おい、デュラン」

手を出す。デュランがきょとんとした。

「ほれ、行くぞ」

「ん？ ああ……そうだな」

妙に神妙な様子でオレの手に指先だけ重ねたデュランの手をオレはムツとして引っ張り込む。

「あのなあ、オレは病原体ですか。握る時はこう!」

「あ、ああ……」

「おら、来い。ちゃきちゃき行くぞ」

「はいはい」

「ハイは三回」

「はいはいはいはい」

「今一個増やしたろ」

しかし、リムりん達にどうやって謝ってお詫びしよう?

くっだらなない掛け合いをデュランとしながら、オレはずっとそんな事で頭を悩ませ続けたのだった。

仮談 夏と言えば海でしょう 後編（後書き）

【作者後記】

お久しぶりです。残暑続く中皆様如何お過ごしでしょうか。どうも、尋です。

我が子（PC）が入院より無事に戻ってきました。

キーボードから外装から総取替という大手術だったようですが、お陰さまで極めて現在順調に動いております。

そんな中訪れて下さった皆様、迷い込んだ方、拍手ポチポチ下さった方、ありがとうございます。

伏して御礼申し上げます。

お待たせしてしまったリク主のS田様。

宜しければお詫びに、これの別バージョンを特別にお送りしたいのですがいかがでしょうか？

さらに内容がシリアス方向に傾く代物ですが……（目をそらし）

不慮の事故とは言え遅れた分と、リクからねじれた分含めちょっとした楽屋話をこの後掲載する予定です。

……が、試験勉強が待ってますのでそれはまた明日と言う事で。

それでは皆様、どうぞ良い週末を。

作者拝

雑談 魔王陛下の結婚活動(1) (前書き)

注意

この話には色々駄目な感じの妄想が入ります。以下の方にはお勧めできませんので、ご注意ください

・魔族の王め、滅びろ!と思ってる勇者の貴方
残念ながら主役は魔王様です……多分そのはずです

・男同士とか女同士とか年の差とかのカップルってあり得ない、という恋愛王道派の貴方
残念ながら皆様基本的に雑食です。性別の差だとか年齢だとか種族の垣根をあつさりなぎ倒してます

・てゆうか萌えて何。獣耳とかあり得ないし、というピュアな貴方
萌えの道は奥が深すぎて私も分かりませんが、とりあえず耳は生えてます。誰かに。

146

・期待してるぜ十八禁ばつちこーい、という大人な貴方
キスすらありませんが何か……十五禁のタブすらついてませんが……

・コメディだよな?というお笑い好きの貴方
観光旅行やヒマ潰しのノリはあまり期待できません。

・いや、何で自分ここに居るんだろう、という迷子の貴方
「お客様、お帰りはあちらの『戻る』をご利用下さいませ」(につきり)

……まあ、今回は序盤ですので大体大丈夫と思いますが。
心の準備の出来た方は下へお進みください。

(9/20 役目の辺りが分かり難いので表現変更しました)

雑談 魔王陛下の結婚活動(1)

0・本日はお日柄も宜しく

「何だこの扱いは」

「陛下の御身の安全と逃亡を防止する為の措置でございます」

澄ましかえって答えたセシエンを微かに眉を顰めて見上げ、それからデュランは自分の体をその紫の瞳で見下ろす。

この猫脚の一人掛け用ソファはデュランの為にとヴァンパイア当主ヴィスカスから贈られた物で、磨き上げられたウォルナテの茶褐色のフレームと、体を柔らかかに、しかし適度な硬さを持って受け止める純白のクッションとの対比が美しい逸品である。

魔族の中でも最も美に拘るヴァンパイアからの贈り物らしく、形状は凝り過ぎずにむしろシンプル。しかし純白の張地に控え目に施された銀系の繊細な刺繍や、優美な曲線を描くフレームの細部に彫り込まれた花草の文様はこの椅子が相当な手間と緻密な計算の上に成り立っている事を示していた。

その職人の技術と心意気をデュランは気に入り、偶に気の向いた時にセシエンにこの椅子を持って来させてゆっくりとした時を楽しむ事があった。

が、しかし。

デュランは肘かけにグルグル巻きにされた自分の腕を見下ろし、嘆息する。

ちなみに胴体は背もたれに、脚は猫脚に同じ要領で太いバンドで固定されていて、少し体を曲げる事も出来ない。動くのは首から上だけだ。

その様子をざっと確認し、デュランはもう一度傍に控えるセシエンを見上げる。

「……安全？」

「はい、左様でございます。逃げれば追いたくなるのが我ら魔族の性でございます故、陛下が逃亡なさると却って御身を危険に晒す事になるかと存じます」

「……セシエン、それは遠まわしにこれから俺が逃げなくなるような事が起こると言っているのだな？」

「さすが陛下、その深いご洞察にはただ感服するのみでございます」

につこりと上品に微笑んだセシエンに、デュランはもしかしたら彼は何か昨日やった事で拗ねているのではないかと思いついて唯一自由になる首を小さく傾げる。

しかし、そんなにセシエンがへそを曲げるような事が何かあっただろうか。

特別な事と言えば、セシエンをプールに投げ込んで丸ごと水洗いした事ぐらいだが。

「陛下も当然把握なさっておられる事ではございますが、聖王陛下は我ら魔族の調停者であり、界を安定させるために要石である他に、もう一つ、大事なお役目がございます」

笑顔で説明したセシエンにデュランは今度こそはつきりとその柳眉を顰める。

「より魔力の強い血を時代へ残す事……すなわち、四大卿の血筋との婚姻でございます」

デュランの眉の角度がさらに急になった。

聖王。

魔界で最も強い魔力を持つ者を意味するこの称号の保持者には三つの役目が与えられる。

一つ目は各族の抗争の際に間に立ち、争いを収める調停者。これは全ての魔族が「より高い魔力を持つ者に従いたい」という本能を備えている事によって自然と生まれた役割である。これがそもそもの聖王の始まりとされる。

二つ目は、界の安定 すなわち、その誰より強い魔力をもつて魔界の大気中の魔力含有量を調整するということである。これは王が根の座に居る事で自然と成される事だが、広大な界に如何に潤沢に、そして偏りなく魔力を供給できるかは各王の力量に左右される。

そして三つ目は四大卿の血筋との婚姻によって、より強い魔力を備えた次代を残す事。

考えてみればすぐわかる事だが、王はこの世界の安寧にとって重要な役割を果たす一つの機構である一方、生命体としては何時か死ぬ一つの個ではない。言い換えれば聖王とは役どころは重要であるにも関わらず、いつ潰れるか分からない非常にハイリスクな存在なのだ。

そのリスクを下げる為に、王が倒れた場合に備えて次の王候補を用意しておかなければならない。それも前の王に比べて遜色ない魔力を持つ魔族を、だ。何故なら、弱い王が現れる事はそのまま世界の不安定、ひいては魔族全体の弱体化に繋がりがねないからだ。そして、その為のもっとも合理的な方法が高位魔族たる四大卿の血筋と王自身の婚姻だと言う訳だ。

これだけ聞く分には王の婚姻とは聖王という機構を維持する為の単なるシステムのようにも思えるだろう。

しかし、これにはもう一つ別の問題 高い魔力を持つ者を有す

る事でその種が他の種に対して優位性を確保できるという事情が絡んでくる。

魔力の強さが支配関係に直結するこの世界において、確実に強い魔力を帯びている王の血は全ての魔族にとって喉から手が出る程欲しいものなのだ。

また聖王との婚姻は本来禁忌とされている異種との混血の数少ない機会だ。

ゆえに王の血を巡って争いが起きぬよう、四代目聖王リヴァイアサン・レクイエムより聖王は必ず四大卿の血筋からそれぞれに番を娶る事が義務付けられている。

無論、義務とされているのは婚姻までであって、そこから先は王の一存に任せられる。子供が出来るかどうかは王とその番次第という事だ。

もう少し砕けた話をするなら、四大卿の血統から一人ずつ娶ればとりあえずはOK、という事である。

が。

だが、しかし。

「嫌だ」

娶るところか、そもそも全ての種族を身の回りから追い出している独身貴族まっしぐらの今上聖王（自称二十四歳）はにべもなく言う。

「正確に言えば無理だ」

「ええ、存じ上げております。しかし、諸侯は納得しておりません」

「良い。理解など最初から求めていない。追い返せ」

「そうは参りません」

プイツと顔を背けた王に苦笑しつつ、セシエンはその足下に膝を

ついて頭を下げる。

「せめて体裁だけでも整えねば、四大卿の立場にも支障が出ましよう」

「……」

「四大卿の為に謁見だけでもご辛抱下さいませ」

セシエンの言葉にそっぽを向いた王は微かに紫の瞳を曇らせる。

その様子をセシエンは黙って跪いたまま見守る。

ややあつて、王はこれ見よがしな溜息をついて、ぱちりと一つ瞬いた。

「まあ、偶にあれらの顔を見るのも良い暇つぶしになるかもしれないな……セシエン」

「はっ」

「もう来ているのか」

「皆様お待ちでございます」

「……最初から選択肢を潰す気だったな？」

「いえ、陛下のご指示とあれば喜んで四大卿も帰途に着くかと存じ上げますが」

「……セシエン、怒ってるのか？」

「何の事でございますしょう？」

「……」

「……」

「……。まあ良い、一人ずつ通せ。他の者はお前が適当にもてなしておけ」

無言の見つめ合いから先に視線を逸らし、デュランは気だるげに呟く。

「こつ言つ事はさつさと終わらせるに限る」

「どなたからお呼びいたしましょう」

「ヴィスカスを呼べ」

かしこまりました、と恭しく応えてセシエンが退出した後、デュランは自分を縛るバンドに目を落とし、それから深い溜息をついた。そしてふと思いつく。

「これが、今話題の婚活と言つ奴なのか？」

多分違う。

そう指摘できる者は残念な事にこの場には存在しなかった。

雑談 魔王陛下の結婚活動(1) (後書き)

補足

・聖王って？

人間が呼ぶ所の魔王。詳しくはゼロ辞典参照。

今回はデュランって聖王様なんだな、取り敢えずチートなんだな、仕事があるんだな、で十分

・セシエンって誰？

デュランの子守役。詳しくはゼロ辞典かヒマ潰し参照。

本性はでっかいワンコ ではなく白銀色の狼。

・聖王って仕事あったんだ……

あります。他にも式典に出るだとか、定期的に謁見を開くだとか色々ありますが大事なのは上記三つ

・……え？つまり魔族の結婚ってどういう事？

基本同じ種族間での結婚だけが認められてます。例外が聖王

・デュランって本当に二十四歳なんでしょうか……
自称です。

雑談 魔王陛下の結婚活動(2) (前書き)

忘れてましたが、この話はリクエスト企画、「デュランを慕う面々の18禁まがいの妄想話」です。

今回からBLまがいたり、SMまがいたり、デュランが女？だったり、デュラン？がうさ耳だったり、ついでに花嫁？だったり、代理母の話が入ったり、拘束だったりコスプレだったり、何が何やらさっぱり分からなかったり夢オチだったりツンデレだったり

……

何やらタブに悩む事態が起こりますので、そんなものを生温く流せる方だけお進みください。

雑談 魔王陛下の結婚活動(2)

「ああ我が君、ついに貴方を我が番とする事が出来るとは感無量！
婚姻衣装はやはり純白か。いや、我が君のあの芳しくも輝かしき
雪白の肌には深紅のベルベットも捨てがたい。我が君の湯上りの肌
のような淡い桜色で上品と繊細さを演出するのも宜しい。ライラッ
クのシフォンで我が君の可憐さを愛らしさ表現するのも捨てがたい
ですが、ドレープやレースを多用しない方が我が君はお好みでいら
っしゃいましたね。ええ、シンプルなマーメイドラインというのも
我としては充分にアリなのですが、陛下のその悩ましき肢体を周囲
に見せつけるなどすれば私の心臓は嫉妬のあまり張り裂けてしまう
でしょうからそこはご容赦ください。我と二人きりの時の為にお召
しになるのはまったく問題ないというか歓迎いたしますがね。そう
そう、衣装と言えば通常でしたらシャンパンゴールドの薄絹を重ね
てというのも考えられるのですが……我が君の前では絹の輝きも色
あせてしまうでしょう。ああ、それともいつそ宵闇の黒さを閉じ込
めた星織などが良いでしょう。陛下の御髪の黒さには敵わないでし
ょうから若干の青を溶かし込んで、我らが眷族の夜をイメージする
のです。ああ、いつそ全て揃えて色直しとしてみるか……」

「……。お前の血染めが良いかもな」
「ああ、それは素敵だ！ 我が君の髪の先から体の奥まで愛し抜い
て我が色に染め上げてみせましょう」
果てしなく嫌だ。

というか、何か別の意味に聞こえてとても嫌だ。

俺は最初からクライマックスだぜ！ というようなテンションで
話を進めるヴィスカスを胡乱な眼で見やり、デュランは自由に動く
顔をそつと背けて呻く。

そのデュランの前に優雅にくるりと一回転してから恭しく一礼し、ヴァンパイア当主にして白種の頂点、四大卿ヴィスカスは紅唇に笑みを掃いた。

「最初は我が君に似た女の子が良いです」

「誰が生むんだ、誰が」

「それは、やはり……」

すーっと視線を椅子に縛り付けられたデュランの臍下付近に向けたヴィスカスにデュランは唇の端を引き攣らせる。

「我と貴方ならば、さぞかし美しい子が出来ましようぞ」

「……だから、誰が産むつもりだ？」

「出来れば我が君が、と申し上げたい所ですが無理でしょうから……代理出産と言う事で我が一族から適当な女を見繕っても構いません。生まれたら我らで育てましょう」

我が女となれるならこの胎で産みたいものですが、と真顔で告げるヴィスカスに頭痛を覚え、デュランは深い溜息をつく。

ヴィスカスは本気だ。

ヴィスカスは心底本気だ。

それが嫌でも分かるだけに、デュランは頭が痛い。

うんざりと顰める顔すら色気を帯びて、デュランはちらりとヴィスカスへ流し眼をくれる。

「言っている事が無茶だぞ、ヴィスカス。気付いているか？」

「我の愛の前で不可能はありません」

「……愛とは偉大だな」

「違います。我から貴方への愛が偉大なのです」

「……。で、その愛情深いお前は今の俺を見て何か思わないのか」

「やはりボディラインを引き立てる拘束というのなら女性姿の我が君でお願いしたいところですが、今のままの我が君もなかなか煽情的にして背德的。私の心も奪われるほど魅力的でいらっしやる。特にその引きしまったヒップラインから太腿への線が素晴らしいかと……」

「お前の着目点はそこか……というか舐めるように眺めるな、そして撫でるな、ついでにめくろうとするな」

「我が君、我は心配でならない」

椅子にバンドと言う名前のシートベルトで固定されているデュランの下腹部を撫でながら、ヴィスカスはふっとその顔に愁いの色を浮かべる。

ヴィスカスもデュランには劣るとは言え、普通に見ればかなり整った顔立ちをしている。

元より魔界に数多あまた存在する種族の中で最も高貴にして優雅と称されるヴァンパイアの血統、それも当主の家系の血筋だ。その顔立ちには連綿と続く貴族としての高貴さと、夜の貴きき者達と呼ばれるヴァンパイアらしい優美さを兼ね備えている。

その顔が愁いと、幾許いくほくかの暗い喜びをもってデュランを見上げる様は控え目に言っても妖しく美しかった。

しかし、その妖美さにまったく心を動かされる様子も見せず、王はただ冷えた紫眼で傳く相手を見下す。

「このように無粋な物で縛められ、傷つきやすい貴方の体がどれ程お辛い事か」

「ヴィスカス……」

「このように赤くしてしまわれて……何と痛ましい」

つつ、と捲られた袖から指先を差し込まれ、腕とバンドとの境目を撫でられてデュランが微かに呻く。

「止せ」

「我慢なさっているのでしょう、我が君」

「分かっているのならば触るな」

「心配なのです」

繰り返された言葉にデュランは眉を顰め、しかし何も言い返さずに口をつぐむ。

そのひじ掛けに固定された手の甲をなぞり上げ、ヴィスカスは左の薬指の付け根に口付ける。

「あの変態犬がどんな疾しい気持ちで貴方をこんな淫らな姿に仕立て上げたのかと思うと……」

「成程」

それにデュランはその白皙に凍りつくような微笑を浮かべる。

「お前はそういう目で俺を眺めていた訳か。そうかそうか、そんな目は要らないよな？ 挟られるのと焼かれるのと、どちらでも嫌な方をやってやろう。選べ」

「我が君の指で挟られるのを望みますが、その前にしっかりとその悩ましき御姿を心のアルバムに焼き付くふっ」

「そんなに焼きつきたいならこの靴底でもじっくり見るが良い」

ぐりぐりと顔を踏んづけるデュランにヴィスカスはそれでも両手を王の方へ差し伸べ「ああ我が君、そんな容赦の欠片もない所も素敵です。愛しております」とめげずに応える。

しかも、その体勢からじりじりと膝でいざって段々デュランを押しつけている。

恐るべし、ヴァンパイアの愛。

「ところで我が君」

「何だヴィスカス」

「動けたのですね」

「当たり前だろう」

いつの間にか拘束されていたはずの足でヴィスカスを踏みつけていたデュランはこともなげに肩を竦める。

「所詮は世界の干渉下にある物。私を縛っておけるはずが無いだろう……結び直すのが面倒だから放置していたというのに」

大人しくしてやっていたと言うのにお前が馬鹿な事ばかり言うからだぞ、と流し眼をくれたデュランにヴィスカスはしかし、

「我としては我が君があのような犬の首輪に縛られているのは我慢なりませんので」

「別に俺とて縛られて喜ぶ趣味もないがな……まったく、無駄に疲れた」

一通り踏みにじって気が済んだのか、足を退けたデュランの顔を見上げてヴィスカスは笑む。

「我が君を縛るのは我らの存在のみ。あのような品性下劣な犬が発情しながら着けた首輪など、そんな美しくない枷は認めません」

「お前のそれは一体どういう思考なのだろうな……」

「愛です」

「……そうか。まあ良い、付け直せ」

何か大切な物を色々と諦めて投げやりに指示したデュランにヴィ

スカスは嬉しそうに笑んで、デュランの傍らに立ち、ヴィスカスは外されたバンドを手に取る。

「ところで我が君。こんなものよりも御身には深紅のリボンでのラッピングの方がより背德的でより我好みになるのでは是非試したく思うのですがいかがでしょう」

「……お前は俺に何を期待しているのかな？」

「勿論素肌のリボンだけでも大歓迎です」

「本気で言っているようなら追い出さず」

「冗談ですよ、我が君……冗談です勿論。それはまた今度、我と我が君の二人きりの時にとっておきます」

「そんな今度は訪れない。ヴィスカス、お前はいつまで俺を待たせるつもりだ」

「我が君の望みとあればこのヴィスカス不惜身命、喜び憤み、迅速に承りましょう。ですが」

乱れた髪を整え、ヴィスカスは臆せずになこやかに笑む。

「まずは傷の治療を」

「……良い、放っておけば治る」

「いいえ、これだけは譲れません。ああ、陛下の肌に赤い痕を残して良いのは我だけだというのに」

「色々引っかかるが……まあ、蚊と同じか。やるならさっさと済ませろ。後がつかえている」

「はい。では、我が君」

「何だ」

デュランは目を上げ、ヴィスカスの顔を見る。

「脱いでいただきます」

捕食者の目をしていた。

雑談 魔王陛下の結婚活動(2) (後書き)

続きません。

ここでブチッと切ってヴィスカス退場です。

続いてベルセラ卿のターン。

雑談 魔王陛下の結婚活動(3) (前書き)

今回はベルセラ編です。

雑談 魔王陛下の結婚活動(3)

ぐったりと椅子に身を委ね、目を閉じていた王はふと何かの気配に目を開いた。

物憂げに投げかけた視線の先では半開きになった窓から微風が吹きこみ、日差しを遮るようにつけられた白のレースのカーテンがゆらゆらと揺れている。

(気のせい、か……?)

色々と気疲れする事が重なったせいで何処かぼんやりとかすむ思考。

再び目を閉じ、王は纏まらないまま千々に霧散してゆく意識を引き留めようとするかのように虚空へと指を伸ばす　と、その指は思いがけず空中で受け止められた。

驚いて王は目を開き、鼻先が触れ合いそんな距離に見慣れた顔を発見する。

「陛下、何処かお加減でも悪いのではございませんか？」

「お前……」

既にこの身に馴染んで久しい金の双眸。

中央に釘で穿ったかのような瞳孔があるのをぼんやりと眺めながら、王は忠実な執事の方へ特に意味も無くもう一方の手を伸ばしてみる。それはすぐに、思いがけないほど力強く握られた。

「こんなに冷えてしまわれて……」

「セシエン……」

「あの男に何かされたのですか？」

「……あの男などと呼ぶものではない。仮にも四大卿の一角を担う者だぞ」

「本当に誤魔化すのが下手でいらっしやる……」

金色の眼差しから目を逃がした主人に彼は小さく冷笑し、身を屈めて頑なに背けるその顔に手を伸ばす。

「それとも……私にあの方との間柄を妬け、とのご命令でございませるか？」

「何を馬鹿げた事を……っ」

カツと頬を染めて見上げ、ぴたりと重なった視線に王は刹那「しまった」という顔をする。

そんな王の表情に忠実な執事は愛しげに目を細め、顔に伸ばした手で王のほっそりとした顎を捉える。その指の意外な強さに王は微かに眉を顰めた。

「妬いたかどうか知りたくはございませんか？」

「そんなありもしない物に興味など無い」

「妬きましたよ」

目があつてしまった事が悔しいのか、眉を顰めたまま視線だけ逃す王の耳元に唇を寄せ、彼は耳朶へと低く声を吹き込む。

「今日ほど貴方が王である事を呪った日はございません。扉の向こうで控えるわたくしがどんな気持ちだったのか……陛下は御存じないのでしょうかね」

「……何を言っ、んっ」

重なった唇に言葉を奪われ、王は軽く眼を見開いて息を飲む。

口づけを交わすのはこれが初めてではない。
けれども普段よりも深いそれに王は微かに嘔せて、貪るように押し
しかかってくる相手を退けようとする。

しかし、片手は既に相手の手にきつくとらわれ、自由になるのは
片手のみ。

その手で抗議するように胸を押ししたり叩いたりしても拘束は緩ま
ない。それどころかなお一層強く腕を掴んだ手で引き寄せられ、貪
るように口を犯されて王は堪らず喉の奥で小さく呻いた。

入り込んでくる肉食獣のざらりとした舌が歯列をなぞり、隅々ま
で探るように舐められる。

「んう……ふっ、く、うん……っ」

息継ぎすらまともにできない。

苦しさに抵抗しようにも動きは封じられている。せめてもと、無
遠慮な侵入者を舌で押し返そうとするが、逆に絡め取られて交わり
が深くなっただけだった。

熱い。

苦しい。

けれど。

王は諦めて目を閉じ、年下の従者の熱い口づけを受ける事にした。
力を抜いた王にセシエンは少し驚いたように目を見開き、それか
ら笑んで一度唇を離す。

そして、角度を変えてまたもう一度重ね合わせた。

先程よりは優しく、何度も繰り返し深く、舌を吸われ、王の吐息
に甘い物が混ざる。

「陛下、大丈夫ですか？」

声を掛けられてようやく我に返り、王は唇を引き結んでいつの間にかすがるようにセシエンの胸元を掴んでいた手を外した。

「これが大丈夫に見えるか？ まったく……」

「陛下が意地の悪い事をなさるからですよ」

「意地が悪いのはお前だろう」

「……そのようなお顔をなさらないで下さい」

ムツとした表情で睨んだ王に、セシエンはクスリと笑って王の唇の端の濡れた部分を親指の腹でそっと拭う。

「そのように上気した御顔でおっしゃられても、可愛らしいだけでございますので」

「……適当に言っているだろう」

「とんでもございません」

小さく触れるだけのキスを滑らかな王の頬に贈って、セシエンは微かに苦い物を金色の目に浮かべる。

「陛下の事に関しては何時でも真剣で、必死でございますよ……」

「セシエン、待て。何を……」

「ご理解いただけておりませぬようですので」

片手で器用に王の胸元を緩めつつ、セシエンはあくまで表面上はにこやかに笑む。

「陛下の教育のお手伝いをするのもわたくしども執事の役目でございますので」

「いや、それはそうだが何故脱がす、待て、まだ後に待っている者が……」

「そのような者など待たせておかれればよろしいのですよ、陛下。貴方が聖王なのですから、偶にはそうして権力を演出するのも大事な陛下のお仕事でございます」

「しかし、あ……っ」

ぎゅ、と目をつむった王にセシエンは小さく笑い、セシエンは開いた襟元から指先を差し入れる。

「抵抗なさつても無駄ですよ、陛下。そのお召し物も、選んだのはわたくしなのですから……」

「……ちよつと待て」

片手を上げ、王 デュランは軽くこめかみを押さえた。

それに目の前に腰かけた相手 ベエマス当主ベルセラ卿は「何ですか?」と豊かな桃色の巻き毛をふわりと払って深紅の瞳を向ける。

それに椅子に座ったままのデュランは何か言いたげな様子でひじ掛けを指で数回叩き、ややあつてから肩を落として溜息を吐きだした。その様すらうつとりするほど美しい。

そのまま微かに眉根を寄せた表情で、デュランは数度躊躇ってからその桜色の唇を開いた。

「セシエンに着替えを手伝わせた覚えなど一度もないのだが……」

「そこはフィクションですわ、陛下。その方が萌えますでしょう?」

「まあ、確かにフィクションだな……」

「セシエン」に襲われている董色の髪の女性 聖王陛下の挿絵
を見下ろし、デュランは溜息をつく。

そう、挿絵。

デュランは軽いめまいを覚えつつ、その本の題名を見直す。

『恋する聖王陛下 第五巻』。

生まれ持った強大な魔力により、貴族で無いにもかかわらず聖王となった董色の髪と紫の瞳、楚々たる風情の中に匂い立つような色気のあるディアヴォロスの「女王」とその周囲によるめくるめく恋物語だそう。現在魔界で好評販売中、らしい。

ちなみにこの王、名前は勿論「デュラン」では無い。現王（つまり、今ここに居る聖王デュラン本人）に不敬にあたるからだ。

他に登場する四大卿やら、近衛やら、王になる前の幼馴染の兄弟やら、母方の従兄やら、王の命を狙ってきたのにすっかり骨抜きになつてる暗殺者やら、神出鬼没のハーフやら、教師やら、地の座の管理者やら、宮廷のコックやら、先代魔王やら、その息子やら、気難しい【門】の番人やら、ファープニルの青年学者やら、庭師やら、果てはメイド達やらまで、王の寵愛を求めて跳梁跋扈する（とこの前この表現を使ったらベルセラに嘆かれた）魔族諸侯には皆、偽名がついている。

唯一の例外が

「それで、何故名前がセシエンのままになっているのかな？ 前回の時に変えるよう指示したはずだが」

「それが、手違いがあったらしくてそのまま発行されましたの「ほう……」

「おまけにこの鬼畜眼鏡執事セシエンが初登場から大好評で、既にファンもついてしまいましたよ。今更名前の変更は無理ですわ」

わざとらしく「困りましたわねえ」と頬に手を当てて溜息をつい

たベルセラにデュランは黙ってこめかみを抑える。

確かにミドルネームセシエン（本物）とは違う。

眼鏡だって本物は着けていない。

それに、セシエン（本物）の職務は悪魔でも執事でも無く非公認だが近衛主任だ。そして鬼畜眼鏡でもない。どちらかと言えばあれは　そう、確か今時の言葉で「ヘタレ」と言う奴だ。

（それでも見せる訳にはいかんな……）

妙にそっくりな挿絵の「鬼畜眼鏡執事セシエン」を眺めてデュランはひっそり嘆息する。

こんなものを見てしまった日には、あの生真面目な青年は「陛下に何たる無礼を」と青ざめて卒倒しかねない。それどころか憤死するかもしれない。これ以上不祥事である堅苦しい白銀狼の若者を失うのは避けたいところだった。

いや、それよりも先に、

（そのうち適当な番でも見繕ってあてがってやらねばと思っていたのだが……こんなものが出回ってはセシエンの結婚に差し支えるのではないか）

デュランはここ数百年で一番真剣に悩んだ。

「まあ、何とかなるか……」

そして放棄した。

その王が一通り思考を整理し終えたのを見計らい、ベルセラは「では、出版許可を願いますわ陛下」とにこやかに誓約書と万年筆を差し出す。

それに苦い顔でサインしつつ、デュランはふと思いついて「ベル

セラ」と彼女の名を呼ぶ。

「何ですか？」

「一応お前にすべて任せると言っているのだが……何故毎回新作を持ちこんでは私の前で音読する？」

「あら、ご存じなかったんですの？」

出版許可証をひらりと取り上げ、ベルセラはにっこりと笑う。

「毎回お話し差し上げる陛下が見せるその微妙そうな、嫌そうな表情がとっても快感だからですわ」

「……そうか、お前が喜んでくれて私も嬉しいよベルセラ」

良い笑顔で「グッドですわ」と親指を立てたベルセラに、デュランはやや棒読みながらもひきつった笑みを返した。

雑談 魔王陛下の結婚活動(3) (後書き)

【作者後記】

前半この話のオチにして山場です。

いやもう、何か無理でした……頑張ったんですよ、これでも。

ええ、ちよつとでもドキツとして頂ければ幸いです。ああでもムリな気がする……。

ちなみに、お分かりとは思いますが恋する聖王陛下はいわゆるギャクハー物でございます。

現在第四巻まで全魔界の書店などにて好評発売中。

雑談 魔王陛下の結婚活動(4) (前書き)

「お、次は俺様の出番じゃねえのよ」

「あー、もしもしりぜさん」

「ああ？ 何だこの前のちっこい女もどきじゃねえかよ」

「もどきじゃねえよ死ね黙れ。えーとまあ良いや。取り敢えず伝言。お前の出番飛ばすってさ」

「何いつ?!」

「はい、例のヤツからの言い訳です。えーっと、『色々頑張ったけど明らかに十八禁オーバーな上にシリアスで不毛な感じになったんで、ムリデス。飛ばします。いやあごめんね。by作者』」

「ふっざけんな!」

「良いじゃん。誰もトカゲ男のえろ妄想なんざ見たくないって」

「トカゲじゃねえ! レビタヤンだ! 殺すぞ人間!」

「はい、ってことでいきなり結末っすよー」

「話聞け絶壁チビかs」(ナカバの飛び蹴りが決まった模様……)

雑談 魔王陛下の結婚活動(4)

「……さて、と」

四季の離宮の一つ、【秋】。

本来は王の番にあてがわれるはずの瀟洒な離宮の一室に並んだ四大卿の面々を見回し、王は小さく呟いた。

右から順にベルベットのドレスに褐色の豊満な体を包み、小脇に本を携えた獣種筆頭、ベエマス・ベルセラ卿。

中央に灰色のドレープのたっぷりしたローブに身を包み、その視線を王へと注ぐ羽種筆頭、ジズ・ジーニス卿。

左に先刻とは違い、若干の乱れは見られるものの上等なダークスーツに身を包んだ鱗種筆頭、レビタヤン・リゼライ卿。

そして、白い椅子に腰を下ろした王の斜め後方には若い白銀狼の青年が静かに影のように付き従い、王の膝の上に視線を投げかけたまま控えている。

若干一名場に足りないが、それはこの場に居る誰も突っ込みはしなかった。

ただ、王の椅子の下に抑え込まれ、嚴重に鎖を巻きつけられたむしろ、巻きつけられ過ぎて鎖の塊にしか見えない棺から黙って生温い視線を逸らしたただけだった。

また何かやったのか、あの小僧。

三人の卿の表情はそう語っていた。

「全員揃っているようだな」

王の言葉に応えるように椅子の下敷きになっている鎖の固まりがガシャガシャと揺れて音を立てる。

それを眩いばかりに美しい笑みを浮かべて一度足で踏みつけて沈黙させ、王、ディアヴォロス・デュランは「この度の招集に応じた諸卿へまずは礼を言おう」と涼やかな声で告げた。

それに四大卿（マイナス一名）は其々優美に一礼する。

その様、まさしく壯観。

王は彼らへ静かに微笑む。

「何分外聞を憚る話故、貴兄らに足を運ばせる事になった……許せ」
陛下に罪科はありませんわ。ねえ……リゼ？」

ちらりと流し眼をくれたベルセラに、リゼライがチツと舌打ちする。

それに仄かな苦笑を向け、王はシュルリと衣擦れの音を立てて長い足を組み直した。

「そう苛めてやるな、ベルセラ卿。魔族間の領地侵害は私の調停すべき問題ではなかったか？」

「あら、随分リゼライにお優しいですわね陛下」

「私は貴女にも同じだけ優しいつもりだが……不足か？」

艶然と笑んで見せた所へ、さらに甘く蕩かすような声と微笑を返されてベルセラは思わず頬を赤らめて豊かな胸元を手で押さえる。

それに何やら椅子の下にある一部が陥没した鎖の固まりがガタガタとまた騒ぎだしたのをまた踏みつけて沈黙させ、デュランは少女のように両手で頬を抑えたベルセラを微笑ましく見つめる。

その視線に気づき、ベルセラは肉感的なその唇を小さく尖らせた。

「意地悪ですわね……」

「ふふ、まあ許せ。軽い仕返しだ」

それに王はクス、と笑って長い爪の先に己の艶やかな黒髪を絡め取る。

「まあ、喧嘩ならば私を挟まずにする事だ……さて、リゼライ」

「……何だ、王さま」

「気分はどうだ」

「お気づかい頂き光栄の至りだが……今はほつといってくれた方が有難いんだがねえ、王さまよ」

「それは失礼。だが、お前は良くとも他の者はそうはゆくまい……後で不調を訴える者がいればこちらへ使いを寄せ。治療してやる」

「……それが余計な御世話だっつうんだよ」

チツと舌打ちしたりゼライにデュランは小さく苦笑し、今度はジーニスへ顔を向ける。

それにジーニスの無機質な若草色の瞳がカチリと光った。

「要求」「すまん」

声が重なった。

そのシンク口具合に何やら足元の一部が完全に圧縮されて融けた元鎖の固まりがガタガタとまた騒ぎだしたのを踏みつけて沈黙させ、デュランは小さく嘆息する。

この際、今の一撃で棺が真つ二つに割れているとか、何か紅いものが滲み出しているのはスルーすべきだろう。

「この度のお前の働きに応えてやりたいのは山々なのだが……どうにも相手が了承せんのだ」

原因を聞こうにも怯えて話さん、と愁いを帯びた瞳をする王に何

かいけない物を見てしまったかのような顔で視線をそらすベルセラとリゼライ。

ジーニスはと言うと王では無い別の場所をじっと無機質な瞳で凝視している。

四大卿最後の一人は安否不明なのでこの際どこを見ているかは気にしない。

元気で生きているなら真下からという王の貴重なアングルを堪能しているだろうから気にしない。

「まあ、当事者間での合意が取れば問題ない。よってジーニスには禁則の台地へ入る権利を三回分与える事によって、この度の働きの報酬としたい……どうだ？」

「異論皆無。承諾」

「そうか」

それは良かった、と少し安堵した様子で微笑んだ王に何かお子様の教育には拙い物を見てしまったかのような顔で体ごと視線を逸らすベルセラとリゼライ。

ジーニスはと言うと王では無い別の場所 恐らく禁則の台地に居るであろう自分の姿 をじっと無機質な瞳で凝視している。

四大卿最後の一人は行方不明なのでこの際どこを見ているかは気にしない。

あの彼であれば仮に既に消滅していたとしても、幽霊になって王の姿を様々なアングルから堪能しているだろうから気にしない。

「さて……リゼライの向かえも来たようだな。セシエン、迎えの用意を」

視線を窓の外へ向け、王はパチンと指を鳴らす。

それに忠実な白銀狼の、もちろん眼鏡などかけていない近衛主任

の青年は恭しく一礼し、音も立てずにするりと外へ出て行った。

それに特に感嘆する事も注意する事も無く、王は四大卿（マイナス一名）を見下ろし、艶やかに笑む。

「貴君らの働きに私は王として感謝しよう。貴君らの力に私は王として敬意を払おう。貴君らの誇りに私は王として応えよう。貴君らが膝を着くのは今後も数多^{あまた}存在する魔族の為だけであれ。そして私に過ちあれば正し、咎あれば裁き、何時^{いつ}如何なる時もその力を振るう事を躊躇わず、誇りの為に卿たらん事を……私は願う」

その王に一拍間を置いて、四大卿は再度敬礼する。

「……我らの誇りに栄光あれ」「」

それは、一糸乱れぬ見事な敬礼だった。

後日談。

どんな妄想よりも、実物^{リアル}の方がえるってどういう事だよと呟いたりゼライが、内心それに同意していたベルセラに全身の鱗をマーブル模様になるまでむしられていたのはまた別の話である。

ちなみに四大卿最後の一人が未だに行方不明なのは気にしない。

雑談 魔王陛下の結婚活動(4) (後書き)

【作者後記】

うわー、先の見ちゃった人います？ 書きかけの。

そして色々と申し訳ない感じですがブチツと切ります。

リゼライさんのファンの人も申し訳な……あ、居ないからまあ良いか。

取り敢えず妄想じゃなくて無駄にしろい感じのを後でこっそりUPしようとして今鋭意作成中。

リクエストは後1つですね。それが終わったら本編に行きます。

仮談 小さいお年玉 その1 (前書き)

ご無沙汰しております。

正月らしく、とりあえず何か送ってみました。
当戯れ話はあくまでイフ、です。
実際の世界設定からは出来ない話ですが、その辺は気にせずに行きましよう
お正月ですし。

仮談 小さいお年玉 その1

『謹賀新年。』

昨年度はお世話になりました。更新出来ず申し訳ございませんでした。

つきましては、皆さまへお年玉としてこちらをご提供いたします。初物でございますので、存分にご賞味くださいませ。

なお、当企画はイフ物でございます。なにとぞご了承くださいませ

『尋』

「なんじゃこりゃ」

そんなメッセージカード付きの箱を見上げ、ナカバは低いテンションで呟いた。

残念ながら「お年玉だ、わーい」みたいな純粹さも無邪気さもナカバには無い。

ただ、もともと凶悪な目つきを更に悪くして箱を睨むだけである。猫ならフーッと毛が逆立って居るところだろう。

(怪しい……怪しすぎる)

じつとりした視線で箱を見るナカバ。

大体差出人の名前からして覚えが無い。

送られてくる心当たりも無い。

しかも新年にこんな明らかに「クリスマス仕様」な包装紙で包んだ箱を送ってくるだろうか。

怪しい。

怪し過ぎる。

名前も状況もメッセージも怪しさ爆発さくや、だ。
しかし、何が一番怪しいかと言えば

「……何入ってんだコレ」

でーんと玄関のドアを完全にふさぐサイズのその巨大な箱を見上げてナカバはぽつりと呟いた。

「てかどうやってうちの玄関に入り込んだ……」

それは突っ込んではいけない。

「うーん、邪魔だな……どうすつかね」

箱の前で両足を肩幅に開いて、偉そうに腕組みをしてナカバはふんぞり返る。

実際にはふんぞり返っている訳ではないのだが、要は身長と箱の高さの問題である。

ただし傍から見ればただ一人で玄関で偉そうにふんぞり返っているイタイ人にしか見えなかった。

「うーん……」

暫く玄関で唸る怪しい感じのイタイ人。

その名をナカバと言う。

別に箱と怪しさを競っている訳ではないが、なかなか良い勝負になっっていた。

そして。

ややあつてナカバはポンと手を打った。

「よし、悩んでもしょうがねえし開けるか」

ナカバは思い切りが良かった。

諦めも良かった。

ただ単純に考えて悩むのが面倒だったとも言つ。

ビリビリと遠慮容赦なく包装紙を引きはがし、ついでにどう頑張っても箱の上には手が届きそうにないのでカッターを持ちだして箱に向けて構える。

「いざ尋常に勝負ー！」

それは違つ。

そう突っ込んでくれる者は残念ながらこの場には不在だった。その代わり、

『分かった』

「箱がしゃべつたー！！」

叫んで両手を上げるナカバ。

「つて中身が喋つたに決まつてんだろ！」

そして自分に自分で突っ込んでみるナカバ。
新年早々一人で楽しそうだった。

「つて、えーとつまり、要冷蔵？」

それはナマモノである。惜しい。

この場合正しくは、

「や、生物入り？ え？ 拉致監禁？！ クリスマスプレゼントに？！」

惜しい、

この場合正しくは、お年玉である。

「……って、コレやばいよな。えっと、もしもし？ 中の人？」
『はい』

(この声って、子供……？)

聞こえてきたソプラノボイスにナカバは首を捻る。

何処かで聞いたようで、聞いた事もないような声だった。

多分知り合いの声では無い。

少年少女合唱団の声が一番近いな、とナカバは思い、眉間にしわを寄せる。

子供が見たら泣き出しそうな目付の悪さに拍車がかかった。

(犯罪のにはひがするんですけど……)

警察呼ぶべきかなあと呟きつつ、ナカバは溜息を吐く。

自分が通報してもどうせ警察は悪戯だと思っただけだろう。

それよりもまず救出しないと。

「えーと、じゃあ今箱に穴開けますんで、後ろの方下がって下さい。あ、オレの声から遠い方をお願いします」

『分かった』

(何か口ぶりが微妙に偉そうなんだけど……タメ口だし)

まあいいやー、とまたしても思考を放棄してナカバはザキザキと箱の面をカッターで切り、なんとか中が覗けるほどの穴を空ける。そこから穴に手を突っ込んで力任せに引き裂く。幸い箱は大した強度は無かつたらしく、あっさりとナカバの力で崩壊した。

そのままビリビリと救出作業を続け、やがて箱は完全に原型を失うまでに引き裂かれた。

やりすぎとも言おう。

だが、その作業が終わったナカバを包んだのは達成感でも無く、疲労感でも無く某国の落盤事故の救出劇のような感動でも勿論なく

驚愕、だった。

唯一残った箱の底面にあたる部分にちょこん、という擬音語がつきそうな雰囲気ですり込み、ナカバを見上げるきらきら光る紫の双眸。

リンスのコマーシャルにひっぱりだこになりそうなキューティクルまみれの黒髪（注、キューティクルはまみれるものではない。悪しからず）。

つやつやで、若さピチピチの白い肌に、子供特有のふっくらしたほっぺ。小さな手。

白一色の振り袖袴。

推定年齢五歳程度。

ナカバとは当然初対面のはずだ。が、しかし。

『玄関から流れて来た箱を開くと、出て来たのは小さな魔王でした』

「っつていやいやいや！」

頭の中に流れたナレーションに全力で突っ込みつつ、ナカバは箱

から生まれた桃太郎、ならぬちび魔王（仮）を見下ろした。

目つきが凶悪さを増しているが、ただ物事が把握しきれずに凝視しているだけなので気にしなくて良い。

その邪悪な視線を受けても出て来たそれはまるで動じず、ただにここにナカバを見上げていた。

ただし、背景から後光が差しそうなほどの美貌と、無駄なぐらいに駄々漏れに漏れている色気をもったままで。

何処からどう見ても、デュラン当人である。
やたらちっさくなっているのを除けば。

「えーっと……え？ 何？ ドツキリ企画？」

ぼつりと呟いたナカバに、ちびデュラン（仮）はそのままにっこと天使のように微笑み、

「あけましておめでとうございます」

「はい、開きましたおめでとうございます。……っていやいやいや

！」

「いやいやいや？」

バタバタと手を振ったナカバの動作を同じように真似て見せ、にこつと笑って首を傾げるちびデュラン（仮）。

その手の趣味が無い人でも悩殺されそうな愛くるしさ加減だった。それを見てナカバは思った。

（危険だ……）

幸いロリコンに走る趣味はナカバにはなかったようだ。

ここで走ったら話が変わる。

走らなくて本当に良かった。

それはさておき、ハーと重い溜息を突いてナカバはしゃがみこむ。新年早々玄関先で美少年(?)に三つ指つかせた状態の前に座り込んで頂垂れる学生一名。

多分こんな光景世界でここだけ。
貴重な光景のはずなのに涙を誘われるのは何故なのだろう。

「なんつーか、なんつーか……え？　ほんとに何これ？」

はああ、と頭を抱えるナカバに、ちび魔王(仮)が「お姉さん、大丈夫？」と小さな手を伸ばして頭をなでる。

と、その拍子にカサリと音がして、ナカバはここでやっとちび魔王(仮)が手に何か持っている事に気付いた。

「んん？　何じゃこれ。ちょっと見せてもらって良いですか？」
「どうぞ」

「どーも。えーと何々。『正月なのに新作が出来てないので、代わりにサービスとして幼少期の元気なころのデュランを送ります。適当に可愛がつてね。作者』」

間。

「えーと、デュラン？」

「？」

「……」

思わずペしペしと自分よりだいぶ低い頭を掌で叩いてみる。
そしてナカバは叫んだ。

「うおわっ！ ちっさ！」

大分遅すぎる感想だった。

飯談 小さいお年玉 その2 (前書き)

ナカバのキモが座りまくってます。

相変わらずの男前っぷり。ナカバは度胸。

そしてワンコ再登場。

イメージ変わるんじゃないんだろうか……彼は魔王には弱いんです
けどね。

飯談 小さいお年玉 その2

「ぎゃははは、何これ！ ちっさ！ むっちゃっちっさー！」

ただいまナカバは大笑いの真っ最中だった。

ペーしペーしと未来の魔王様の頭を素手で叩くという暴挙に及びながら、目に涙を浮かべて笑う。

「身長勝った！ 脚の長さ勝った！ ざまあみるデュラン！」

何やら非常に嬉しそうだが忘れてはいけない、今のデュランは五歳児相当。勝って当たり前。

十四になつて五歳児より小さいとすればそれはまた別の問題だろう。

「やっべー。マジでやっべー、てか何コレ！ うわ、細っ！」

そのテンションのままひょいっとちびデュランを持ちあげてみて、ナカバは「軽っ?!」とまた目を見開く。

そんな何気に酷い扱いを受けながら、当のちびデュランはどうしていたかと言つと、

「軽いかな？」

高い高いをしてもらっているつもりなのか、怒りもせずになこにこしていた。

そんな邪気のない笑顔を見上げて、ナカバはようやく笑い止む。

「……………」

そしてそつと居たたまれないように目を逸らした。

「月日って残酷だ……」

「？」

「あー、まあいいや。腕上げてるのしんどくなっただし。下ろしますよー」

「はい」

「はいっ?! 今お前「はい」つつたか?!」

「はい」

こつくりと頷いたちびデュランにナカバはよろめく。そして玄関の壁にゴンと頭をぶつけ、蹲った。

「月日って……月日って……」

色んな意味で痛い思いをしつつ呻くナカバの背中をささすさと摩るちびデュラン。

それに「はあ……」と溜息を吐いてナカバは立ち上がる。

「ま、何か今ので落ちついた」

「それは良かったな」

「はあ、良かったですな、まったく……えーと、じゃあとりあえず玄関片付けっから手伝って下さい」

「はい」

二人でせつせと箱の残骸を片付け、ナカバは少し考えて一先ずちびデュランを自分の部屋に通す事にした。

他の家族は今の所気付いている様子は無いが、介入されると面倒だ。

自分の部屋が無難だろうとナカバはちびデュランを連れて戻る。
軽くこの時点で誘拐じみてきているが当事者二名にはその辺の自覚
は幸いにも無かった。

（てかちっさいけどこれデュランなんだよな。オレの部屋自分から
通しちゃって良いのかね）

よっこいせー、と抱えてたちびデュランをベッドの上に下ろして
ナカバは首を捻る。

「ま、いつか。正月だし。な？」

「？」

同じように小さく首を捻るちびデュラン。
可愛らしいが特に意味は無いようだ。

「……分かってねえなコイツ。えーと、誰か説明要員プリーズ。て
か普段これってデュランの役目じゃね？」

「？」

「あーはいはい、分かんのですな。誰かー、お客様の中に説明係
はいらっしやいませんかー」

「ナカバ様」

「あ、ホントに出た。言ってみるもんだなー」

「は？」

開いたクローゼットの中から出て来たのは猫型ロボットでもなく、
信長でも無く、ぴしりとした背広に身を包んだ銀髪金眼の美青年、
魔界において魔王の近衛を務めているセシエンだった。

床の上にしなやかな動作で着地し、しかし一向に動ぜずにしかも
意味不明な事を言うナカバにやや戸惑ったかのように一度怪訝そう

に眩き、しかしすぐに笑みを作って丁寧な動作で一礼する。

「お久しぶりでございます、ナカバ様」

「あ、はいどうも。で、どうしたんですか？」

「年始のご挨拶にお伺いいたしました」

「おー、律儀どすなあ」

「陛下ご自身がナカバ様に是非と仰っておられたのですが……本日は少々お伺い出来なくなってしまうので、わたくしが代理として参りました次第にございます」

「ん？ デュランならここに居るけど？ ほれ」

「は？」

ひよい、とちびデュランの脇下に手を入れて差し出したナカバにセシエンが一瞬眉を顰め、それから驚いたように目を見開く。

「これは……いえ、まさか……」

「縮んだっばいぞ」

「陛下だと仰るのですか？」

「え？ どう見てもデュランだろ」

差し出された状態のまま、大人しくここにこしているそれを見下ろし、セシエンは淡い顔で首を横に振る。

「確かに良く似てはおりますが……陛下とはまるで魔力の質が違っております。いえ、むしろ何も魔力が感じられません。これではまるで……」

「でもさあ、この目とか、無駄に溢れまくって大洪水起こしてる色気とか、デュランじゃん」

「しかし……失礼致します」

次第にぷるぷるしてきたナカバの腕からちびデュランを受け取り、セシエンはその口に指を入れて開く。

「どう言う趣味」

「違います。ほら、御覧なさい。ディアヴォロスであれば人化しても犬歯の数が変わらぬはずだというのに、四本しかない。やはりこれは陛下ではございません」

「ふーん。じゃあお前デュランじゃねえの？」
「？」

「人間、名を名乗りなさい」

「……セシエン君、子供子供」

「……これでも大分譲歩しておりますが」

「しょうがねえなあ。融通利かないわんこだもんね、セシエン君」

「それはナカバ様のご意見……いえ、陛下ですね」

「正解！。えーと、君、お名前は？」

訊ねたナカバにちびデュランはちょっと首を傾げ、それからふるふるすると首を横に振る。

「名前は無い」

「……。無いって」

「時間の無駄でしたな。用件が済みましたのでこれでわたくしは失礼致します」

「……、取り合えず「セシエン、おすわり」って言うってみて」

「せしえ、おすわり？」

ちびデュランが口にした瞬間、シュタとその場に座りこむセシエン。

部屋に生温い空気が流れた。

「骨身に染みついてんなあ。さすが苦勞執事」

「……いえ、コレは何かの間違いで」

「セシエン、お手」って言ってみて」

「せしえー、お手」

シユタ、とその手に手を重ねるセシエン。

再び流れる生温い空気。

じつとりしたナカバの視線に、セシエンはその姿勢のまま静かに視線を横に逸らした。

「やっぱこれデュランじゃね？」

「……しかし」

「セシエン君立場的にご主人様以外の命令聞いたって事になったらまずくね？」

「ええ、まあ」

「せしえー？」

「目え紫だし。これってデュランだけじゃなかったっけか？」

「せしえー」

「……懐かれたね」

「……そのようです」

首筋に抱きつかれ、セシエンはふうと溜息を吐いて諦めたように目を閉じる。

「まあ、この人間が陛下に似ている事は認めましょう」

「あ、微妙に悪足掻き」

「ほっといて下さい。ええ、しかしどうしましょうか……この子供、

どこで拾ったのですか？」

「いや、デュランじゃないから拾わないからね？ オレ。いや、玄関に配達されてたんだよ」

「人間の世ではそのような事が頻繁に起こるのですか？」

「いや、あんまり無いんじゃないかな……」

頻繁にあるようでは人間社会も終わりだろう。

セシエンはとりあえずギュツと抱きついて肩に顔を埋めているちびデュランを若干乱暴な手つきで引きはがし、ナカバのベッドの上へ戻す。

コホンと咳払いをしたのは誤魔化したのか、或いは気を取り直す為か。

「とにかく、わたくしは陛下の代理としてご挨拶に参っただけでございますのでこれで失礼致します」

「えー、つまんねー。なー、デュラン」

むにむにと頬を摘まんでみるナカバ。

ちびの方は抵抗もせず、にこにこしている。

それを良い事にナカバはぐにぐにと頬をつついたり、つまんで引っ張ってみたりする。

「おー、すげー。ほっぺ柔らかけー、ぷにっぷにだよ。えーくぼー」

「？」

「……ナカバ様。その物体を陛下と同じ名で呼ぶのはおやめ下さい」
「駄目？」

「いけません」

「でも魔界にもデュランって名前の奴多いんだろ？」

「……ええ、まあ最も多い名前ではございますね。我ら魔族の始祖の名でございますので」

「あ、そうなんだ。ゴンベーの名前なんだ。ディアヴォロス・ゴンベー」

「陛下の名前で遊ばないで下さいませ」

「すみません」

きゅ、と縦に細くなった金色の瞳の中の瞳孔にナカバは即座に謝った。

こえーよー、と本気でビビっているナカバを冷たい目で見下ろし、セシエンは頷く。

「お分かり頂ければ結構でございます。ともかく……それが居ては話が出来ませんので外に出して下さい」

「本当にデュランの関係者以外に冷たいんだな、セシエン君って……しょうがねえなあ。デュラン、セシエン君が落ちつかないらしいからちよーつと外で待っててね」

「分かった」

「聞きわけ良いなあ……あれが大きくなるとああなるのかあ」

「何を感慨深げに仰ってるのですか？」

「あー、気にしないで下さい」

じゃあ、とナカバは一つ息を吐いて、それから自分よりずっと高い位置にある魔族の青年の顔を見上げる。

「話し合いませんか」

飯談 小さいお年玉 その3 (前書き)

さらに一匹追加されました。

ますます人外魔境になってゆく狭い賃貸住宅の一室をお楽しみ頂ければこれ幸い。

飯談 小さいお年玉 その3

話し合おうというナカバの言葉にセシエンはしばらく沈黙し、それから金色の目を一度閉じた。

「話合うべき事など何もないかと思いますが」

「うわー、冷たい。そう言うのが離婚の原因になるんだぜ」

「俺はまだ独身ですが」

「うわ！ 今「俺」って言った？ なあ、俺って言ったよな！」

「ナカバ様の気のせいでございましょう」

にっこり笑ったセシエンにナカバはどんよりした半眼を向ける。
目つきの悪さ三割増し。

「ほんとにデュラン居ないと性格違うなあ……」

「わたくしが敬意を払うべきは唯一、陛下のみでございますので」

「……それは、デュランが居ないとナカバちゃん殺しちゃうぞー、フラグですか？」

「貴方の事は陛下より敕命を受けておりますので、そのような事は居たしません」

「デュラン！ オレ、お前に初めて感謝の気持ちを覚えた！」

「……人間の浅はかさですね」

今度コーヒーおごっちゃる、と何やら感謝の言葉を述べているナカバを見下ろし、セシエンは溜息を吐いて「とにかく」と話を立ち戻す。

「あの子供の扱いならばわたくし達には関係の無い事です。ナカバ様に届いたものならばナカバ様が好きに処分なさればよろしいので

す

「処分とか物騒な事言つなよ。てかさあ、ホントに良い訳？」

「構いませんよ」

「ふーん……デュランそっくりの外見の子に変態さんがあーんなこととか、こーんな事しても良いんだ」

「何を想像されているのですか！」

「怒るなよ。デュランじゃねえんだろ？」

まあ言ってみただけで具体的な想像が出来るナカバでは無いのだが、デュランならざるセッションにはそこまで読みとおす能力は無い。あつさりナカバの差し出したカードに反応し苦い顔をするだけである。

「目は紫だし、髪は黒いし、顔も割と似てるし？ ゴツキーとかだとさくつと食い付きそうじゃん」

「嫌な事を仰いますね」

「デュランと関係ないなら嫌でも何でもねえんじゃねえの？」

「そう言う話をして、卿ご自身が出てきていたらどうなさるのですか」

「まっさかー。ここガラガラーつとやったら居るとか」

引き戸では無いので普通に開いた扉の向こう。

小脇にちびデュランを抱えたヴィスカスと目が合った。

間。

「ぎゃああ！ 出たー！」

「だから申しあげたでしょう！ 言いましたよね！」

「ゴ ジェット！ キジェット！」

「貴様あの時の虫けらか……な、何だそのみつともない格好は！」

「え？ コレ？ ジャージっすよジャージ。運動着」

「ジャー……？ しかし、何と言う醜さだ、美しさの欠片も無い……

…不愉快だ、即刻着替えよ！」

「え？ この状況で第一声がそれ？」

「当然だ！ 耐えられん！ 即行それを捨てよ！ ああ、我が君。

こんな物を見てはなりませんよ」

「って何でそこでちびデュランの目を塞ぐんデスカ。てかナチュラ

ルにあっちはデュラン認定してるけど」

「ヴィスカス卿は疲れてらっしゃるのでしょうか」

「うわー、笑顔で否定した」

「何を言うか、この方を見間違えるとは笑止千万。所詮は駄犬か」

「ヴィスカス卿こそお戯れが過ぎるのではございませんか？」

「あ、お姉さんこんにちは」

「あ、どうもこんにちは……ってちびデュラン暢気だなあオイ！」

「我が君に向かって突っ込むとは何たる無礼か！」

「それを陛下と呼ばないで下さい！」

カオスすぎるので少々お待ち下さい。

「で」

再びナカバの部屋。

一応話が進まないの、ナカバはあれから部屋から全員を追い出して渋々着替えた。

その服にもいちゃもんをつけられ、三回着替えなおした辺りでナカバが切れ、取り合えずパーカーにジーンズ姿で今の所固定となっ

ている。

しかし狭い部屋は身長一・八メートル越えが二名、プラス子供サイズ二名。

相当きつきつだったが、意外にもヴィスカスが省スペースに協力していた。膝の上にデュランを乗せ、その両腕でしっかり抱きかかえるという方法で。

「ゴツキーの言い分を聞きましょうか」

「絶望した。人間の服の醜さに絶望した」

「首吊つて来る？ てか、アレ別に人間全体じゃなくてオレの趣味だからな」

「貴様には生存価値が無いな」

「さくつと存在否定しやがったなこのおしゃれ魔人。てか魔族のセクスって逆にどうなんよ？」

「魔族全体などどうでも良い」

「あ、良いんだ。じゃあデュランは？」

「我が君には私の選んだ服を着ていただいているのだ」

「あ、あの純白って実はゴツキーの趣味だったんだね。知らんでも良い知識が増えた。とーりーびーあー」

「沼に沈めてしましましょう」

笑顔でセシエンが付け加えた。

まあ、何を彼が鎮めようと思ったのかはさておいて、

「で、ゴツキーの言い分を聞きましょうか」

「廊下に落ちていたのを拾ったのだ」

「落ちてません落ちてません。大事な事なので二度言いました」

「見れば我が君の面影があったのでな。私の元で育てんと思ったのだ」

「さらつとスルーの上に光源氏計画発言！ え？ てことは、デュ

ランのポジション藤壺なのか？」

「何を言うか。我は陛下を花嫁に迎える事をまだ諦めてはおらぬ。我は陛下一筋だ」

「デュランが花嫁なんだ……確かに純白着せてるしね」

「花嫁衣装も既に用意してあるのだ」

「早い早っ！ てか採寸どこでやった！」

「それ以前にヴィスカス卿がどうしてここに居るのかには突っ込まないのでですね……」

「だってゴツキーだし。デュランの気配でも感じてやってきたんじゃないの？」

「そんな非常識がありえ……いえ、ヴィスカス卿の事でございますね」

やっぱりカオスになっているのは一先ず置いておくとして。

「陛下に何処が似ているというのですか……ただの人間でしょう。」

そんなものに執着されるとは美を愛でるヴァンパイアの名が廃すたりましよう」

「ふ、畜生風情にはこの美しさが分からぬか」

膝の上のちびデュランの髪を撫でたり弄んだりしながらヴィスカスは嫣然と笑む。

「我らヴァンパイアは下らぬプライドで美しいものを見過ごすような愚かな真似はせぬ。人であろうと動物であろうと美しいものは愛で、力ある魔族であろうと醜いものは捨てる」

「おお、何かカッコイイ……気がするけど実際そつでもないよな」

「黙れ醜い人間め。ともかく、これほどの美を見逃せようか……我が手塩にかけてより美しく、好ましく育ててやるうぞ。光栄に思え」

「えーと、意識するとデュランそっくりの子を自分好みに調教……」

育てようってことか」

「人間に我のこの崇高な志は分かるまい」

「ただの工口おやし発想じゃん。てかさあ、セシエン君」

「何でございましょう」

「良いの？ オレの予言着々と整ってますけど」

「何故わたくしにそのような事を仰るのか分かりかねます」

「ふーん、あつそ。了解。じゃ、ゴツキーの新しい着せ替え人形決定だな。次の衣装が裸エプロンとかだったら爆笑もんだけど。商品化されねえかなあ。ねんどろ どぶち魔王・裸エプロンばーじょん」
「……ああ、もう、ええ、ええ、分かりました。分かりましたよ、降参いたしましたしょう」

溜息を吐き、セシエンは「ヴィスカス卿」と話しかける。

「人間とは言え、その眼の色は珍しい事は認めましょう」

その言葉に、ちびデュランの髪を二つ結いにするか、一本にしてサイドテールにするか、はたまた三つ編みにするかで悩んでいたヴィスカスが邪魔そうに視線を上げる。

「犬に認められずとも結構。我が君の美しさは我だけが愛でれば良いのだ」

「果たしてそうでしょうか」

「我に意見するか下郎」

「いえ、そのような珍種、陛下に一度お見せした方が良いかと存じます。何分、陛下は珍しいもの好きですからあらせられますので……」

「あ、オレ、自分以外の奴が珍獣扱いされるの初めて見た。珍獣仲間か……ちっさいし」

「なかま？」

「んー、あんまり嬉しくないけど仲間だなー」

「けど仲間だな」

雑な手つきでヴィスカスが整えた髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜたナカバの指先をぎゅっと握手するように握り、にっこり笑むちびデユラン。

つられて笑むナカバ。

大人二名（両方とも年齢三桁）が険悪な表情で睨みあっている中、年少組（？）は平和だった。

ついでにそのノリでせつせーの、よいよいよい、と手遊びを始める年少組。

片や魔族に取り囲まれ、片や貞操（？）の危機だというのに肝が据わっているのか、或いは単純に暢気なのか。正月恒例の風景、親戚の子の相手をするお兄さん、といった感じだった。解説としては色々間違っているが雰囲気としては正解だろう。

その様子を見下ろし、魔族二名は溜息を吐く。

「ふん、貴様と口論するも馬鹿馬鹿しい。しかし、確かに一度我が君に献上奉るべきかもしれんな」

「では」

「ならばお目に掛ける前により美しく整えねば……もしやこれはボブカットにせよとの我が君の御心か！ ああ、しかしどうして我が君が君の美しい御髪を傷つける事ができましよう、ああ、我が君……」

「何か変な電波受信し出したなアイツ」

「ヴィスカス卿は陛下に関する事以外に置かれましては大変有能な方ではございますが……陛下に関しましてだけは常にあのようない様子ですの」

「もしかして、セシエン君ゴツキー嫌い？」

「わたくしが嫌うのは陛下にとって敵となるものだけでございます」

何やらサラサラの黒髪を前に苦悩するヴィスカスに揃って生温い視線の洗礼を浴びせた所で、奥の方から『ナカバ』と声がした。それにナカバは顔をあげ、「あ、母親だ」と呟く。

「ごめ、ちよつとオレ席外すわ」

「おや、どちらか行かれるのですか？」

「うん、あの人達が呼んでるみたいだからさ。正月初日から蹴っ倒されてもやだし、ちよつくら行ってくる。あ、その辺のモンいじらんといてね」

「畏まりました」

いつものように滑らかな動作で一礼したセシェンへ「じゃよろしくー」と緩く返事をして、ナカバは未だ手を握っているちびデユランを見下ろす。

きよとん、と零れ落ちそうに大きな、深い紫色の目がナカバを見上げる。

「お前も無理すんなよ。じゃな」

言って繋いだ指を離す

その手で携帯をひつつかんで、ナカバは自分の部屋を出た。

その後、この行動が何を引き起こすのかなど、ただ人たるナカバは当然のまるで気付きもしていなかった。

飯談 小さいお年玉 その4 (前書き)

ナカバのテンションの変化にご注目ください。

しかし、やっぱり「あの方」は出るタイミングを見計らってる気がします。

仮談 小さいお年玉 その4

呼びだされたものの大した用件ではなく、適当に親の言う「面白い番組」を眺めてCMが入った所でナカバは居間から退いた。

正直まったく興味は無かったが、あれは親なりの気遣いだろうと分かってている。

正月ぐらい顔を出せという事だろう。

ナカバも別に、理由も無くなるべく自分の部屋で大人しくしている訳ではないのだが。

「あの人も無駄なところに気い使わんでも良いのに……」

ナカバは小さく呟いて、そつと溜息を吐く。

その顔はさつきまで番組を眺めていた時の愛想笑いすら浮いていない。

口の端がへの字になるのはデフォルトだ。

ナカバはふと何かを気にするように、手首の内側でこし、と唇の横をぬぐう。

ギョツと掴みっぱなしの携帯に力を込める。

瞬間。

突然何か悪い病でも発症したかのように激しく携帯が震えだし、ナカバはビクツとしてそれを睨みつける。

まあ、単純にバイブ機能がONになっただけだが。

「うお、びびったー。心臓に悪すぎ。死んだらどうしてくれる」

そんな一般普及している機能に文句をつけても、とか。そもそもマナー設定したのはお前だろうとか。そもそもそんな事で死にそんな性格してないだろうとか。

色々突っ込みを受けそうな独り言をぼやきつつ、ナカバは発信者を確認する。

自分の番号が出ていた。

「……ええっと」

未だに鳴り止む気配の無い携帯を眺めつつ、ナカバは呟く。

「コレ取っちゃったりするとジョーカー様出現フラグ？ え？ 願い事考えてないんですけど」

影人間になっちゃう、などとだいぶ古いゲームネタを引つ張りだしているが、現在ナカバの部屋には悪魔どころかリアル魔族が出現している。

しかも高位の。しかも美形の。そして微妙に残念な感じの。リアルデビルサマナー悪魔召喚士。

呼ぶものを間違えたのかもしれない。

「ま、呼んでないけどさー」

むしろ呼ばれている。携帯の向こう側の誰かに。

「これってこのまま切ったらどうなるんだろ。えいつ」

言うだけでは無い。言った事は実行する「漢」ナカバ。

平然と、思い切り良くブチッと通話拒否のボタンを押して切った。危ない電話には出ないのが身を守る基本である。と、

切った瞬間、またしても携帯がガタガタと震えた。

ノット、ブルブル。

バット、ガタガタ。
ちよつと震えすぎじゃないだろうか。

「えー、しつこい。これであのウザストーカーだったら嫌だなー…
…携帯汚染される」

鳴り続ける携帯を胡乱な目つきで眺め、ナカバは大きく溜息を吐いた。

「よし分かった。喧嘩売ってんだなコイツ。おーけい。男は度胸
よし、喧嘩なら買っぞー買っぞー買っぞー…出来れば売らんで
欲しかったけど」

悪足掻きに一言付け加え、ナカバはギョツと目をつむって一度深呼吸して、コードを引っ張り出して指に繋いだ。
それから通話をオンにする。
繋がった証拠にピツと固い電子音がした。そして。

『あけ』

「どっせーい!!!」

全力でコードを指から引き抜き、ナカバは廊下に向かって携帯をぶん投げた。

良い音を立ててワンバウンドした携帯が、そのまま明後日の方向へ向かってスライディングを決める。

そのまま滑らかな動作で廊下を滑り、気の毒な携帯は壁にゴンとぶつかってようやく止まった。

『いきなり何をする』

「そりゃこっちのセリフじゃー!」

投げられた瞬間、外部音声に切り替わったのか淡々と喋る「携帯」
に向かってナカバは拳を振り上げて叫ぶ。

「耳元でいきなり卑猥な声だすんじゃないねー！ この十八禁！ 正月
早々殺す気か！」

『……普通に喋っただけだが』

「にーぎゃー！ あー耳が！ 耳が、耳がぞわぞわする！ ぎゃー
す、エロスに鼓膜が穢されたー！！」

『骨伝導だから正確には耳ではないがな』

「そうだ！ 耳洗う！ エロボイスを洗い流さねば！」

『誰がエロボイスだ、誰が……本当に洗いに行っただな、いい度胸だ
……』

若干傷ついたような、しかしそれでも相変わらず美しく、深く涼
やかに響く腰砕けエロヴォイス（ボイスでは無い。ヴォイスだ。こ
こ重要） もとい美声の持ち主などナカバは一人しか知らない。
と言うか一人居るだけで十分すぎる程おつりがくる。

取り合えず耳を冷水でざぶざぶと洗って心機一転。

ナカバはさつき全力で携帯を叩きつけたせいでちよつと凹んだ傷
が出来た廊下の隅っこに落ちている携帯の前に座りこみ、改めてそ
れへ向かって声をかける。

「お前何やってんのデユラン」

『まだ何もしてないのだがな』

「そう言えばそうかも。で、何さ。人の携帯にイタイ電話、略して
イタ電かけてくんじゃねえよ」

『……年明けの挨拶をと思っただけなのだが、そんなに迷惑か』

「迷惑。携帯壊れたらどうしてくれる」

『投げたのはお前だろう』

「…………。それはまあ、置いていて」
『相変わらずだな、ナカバ』

艶麗な声に素直に懐かしさを乗せられ、ナカバは少し戸惑ってから溜息を吐く。

「お前ってホント、マトモとかフツってのに欠けてるよなあ」
『まあ魔王だからな。物事は演出が大事だ』
「知らん。死ね」

無碍に言い放った言葉に、携帯の向こう側から微かな笑い声が聞こえる。

それにナカバも強張っていた顔から力を抜いて、ようやく表情を緩めた。

「あー、もう、何か色々どうでもよくなった。悩んでも意味ねー、
って感じ」

『そうか』

「てかさあ、お前今日は動けないんじゃない？ 何かさつきセシ
エン君が代わりに挨拶しに来てたし」

『ああ、それで居ないのかあの馬鹿が…………』

「あれ？ デュランの依頼じゃないんだ」

『まあ、な』

「ふうん…………声聞いた感じ疲れてるっぽいけど、風邪？ あ、馬鹿
だからひかないか」

『まあ風邪では無いな。そう言うお前は少し元気が出たようだな』

「何で？」

『声を聞けばわかる』

「…………うわ、サブイボが」

『お前も似たような事を云ったくせに良く言う』

くつくつと笑われ、ナカバは「エロボイスで言うという意味が変わるんです」と下唇をつき出す。

何が可笑しいのか、携帯向こうの魔王が小さく噴き出した。

それに不機嫌な顔を精一杯作っていたナカバもつられて笑いだす。

「はー、笑った。涙が出た」

『それは良かったな』

「良かったんかねえ？ ま、どっちでも良いけどさ。えーと……で、何でオレ、正月早々廊下に座って魔王と雑談してる訳？」

『お前が変人だからだろうな』

「……成程。凄い納得した」

何やら感慨を受けたように頷くナカバ。

「お前珍品好きだもんなあ」

『誰がそんな事を……』

「え？ えーと……どっちだっけ。セシエン君の方かな。ゴツキーならもつと別の言い方するだろうし」

『待て、それは何時の話だ』

「さつき。てか、今オレの部屋に上がり込んでるから。邪魔だから撤去して貰えるとありがたし」

『……………』

沈黙するデュラン。

珍しく何か気に障ったのだろうか。

色々と言う割に、内実怒ったり拗ねたりすることが意外と少ない相手だと気付いているナカバはちよつと意外に思いつつ次の言葉を待ってみる。

『まったく』

ややあつて聞こえてきた声からナカバは正確にその心中を察する。呆れと、羨望。それから。ちらりとぞいた本音の色にナカバは見なかつた事にしようと思つた。

その気持ちを察したのか、デュランもまた声音を元の調子に戻して何気ない風で言う。

『まあ良い。このままこれを持って行け。俺が一言言えば退くだろ』

『う』
「おっけー。ワンコとゴツキーの世話任せた」

『とんだ動物王国だな……』

「ムチゴローさんが」

『ああ、お前が無知なのか』

「うっさい」

ストラップを摘まんて本体に触れないように摘まみ上げ、ナカバはちらつと自分の携帯に目を向ける。

「ところで何でオレの番号ばれてんの？」

『ああ、携帯に繋がったのか……いや、別段番号を把握している訳ではない。ただ、お前に最も近い座標で適当な場所に回路を繋いだだけだ』

「じゃあ、うっかりしてたらテレビとかからお前の音声の流れてきてた訳か……携帯持ってた良かつた」

『まったくだな』

「てかお前の我がままのせいじゃん！ 五歳児！」

『二十四だ』

「うっさい年齢詐称」

『何を笑っている』

「笑ってねーよ」

『嘘を吐け。声が笑っている』

「笑ってねーって。お前美形の癖にしつこい」

『美形になった覚えは無いのだが……別段普通だぞ俺は』

「今すぐ全世界の普通に謝れ。詫びて死ね」

言いながら自然と緩んで上がって来る唇の端に気付いて、ナカバは「はごしごしとまた手首の内側で顔をこすった。」

携帯の向こう側で魔王が小さく笑った気配がした。

飯談 小さいお年玉 その5 (前書き)

もうお年玉ってじぎじゃねえ！ と自分に突っ込みを入れつつ。

仮談 小さいお年玉 その5

「自室に戻ってみると一八 越えの魔族が睨みあってます。しかも理由が痴話喧嘩です。デュランは僕のものだ手を出すな、的な。お前にはデュランは渡さん、的な。ゴツキーがワندوقを苛めてます、的な。自称本妻とその愛人の昼のメロドラマ的な泥沼対面、的な。こんな正月迎えてる人は世界にオレだけだと思います。何か特別待遇って感じ？ 世界に一つだけの花？ きゃー、すごーい。ナカバ嬉しいっ！ ……とかオレが言おうと思う人は拳手をお願いします」

「……………」
「……………何か言うなら今の内だぞ、責任者」
「……………まあ、何だ。すまん」

はー、と携帯向こうとこちら側で溜息がシンクロした。
現在ナカバ宅廊下。

冷え冷えとした廊下でナカバはゴシゴシと腕を擦って身震いする。

「で、どうしてくれんだこの状況」

「……………」
「おい」
「……………ああ……………失礼」

「……………ま、良いけどさ。廊下寒いんだっつーの。床暖房とかあるよ
うなぜいたくな家じゃなくなっちゃって悪かったな！ 文句あつか！」

「……………文句があるのはお前だろう」
「いや、うん、まあそうなんだけどさ。寒いー寒い寒い寒い。部屋
入りたい……………」

「……………分かった。分かったから悲しげに扉を引っ掻くな」

猫かお前は、と溜息交じりに呟いて携帯の向こう側の声はまたし

ばらく沈黙する。

『まあ、俺が止めるしかないだろうな』

『だろうな。じゃ、チャキチャキ行きますか』

『ふふ……』

「ふふ、じゃねえだろ。くそう、携帯が人質になってないなら蹴るのに……はいはい、ナカバさんいつきまーす」

言つて、ナカバは一つ深呼吸してドアを思い切り引き開け、ぐいと握った携帯を突き出す。

「この携帯が目に入らぬかー！」

それに中で睨みあっていた魔族二名は一瞬虚をつかれたような顔をし、それから。

「そんなものが入る訳が無かろう愚か者が」

「目に入れるものなのですか？」

「駄目だ、異文化の壁に阻まれて突っ込みすら入れてもらえない…

……」

『お前もボケよのう、ナカバ屋』

『魔王様おだいかんこそー……ってこれじゃオレら成敗される側じゃね？ て

か、そもそもこの場合ナカバ屋じゃなくてマサキ屋だろ」

『ふむ、そうかもな。まあ俺は成敗される側だが』

「あ、そっか」

その声にさつと魔族二名の表情が変わる。

「陛下……いえ、まさか……」

「……なあ、デュラン。このまま此方におわす御方をーってやって

通じると思っ？」

『俺にはな』

「じゃ、やらない。良いさ、諸国放浪のロマンが魔族には通じなくたってオレはお銀さん好きさ」

「あ、あの……陛下」

『おや、昨日散々俺を弄んだ拳句、朝には一人置き去りにしたセシエンではないか』

携帯向こうからの艶やかな、にこやかな声に部屋の体感気温が一気に下がった。

今すぐこの携帯、壊れても良いから投げ捨ててしまいたい。

ナカバは切実にそう思った。

しかし、さっき投げたばかりのこの携帯。次に投げたら無事で済む保証はない。

ナカバは黙ってそれをそっと机の上に置いて、距離を取った。

そんな不審者な動きをしているナカバには目もくれず、名指しされたセシエンの方と言えば「う、え、いえ、あの……陛下、下」と顔を赤くしたり青くしたりしている。その前で厳しい表情をしていたヴィスカスの顔にも驚きの色が浮かんでいる。

『何処に行ったかと思えば俺を差し置いて一人で物質界……と言う訳か。成程』

「い、いえ……あの、陛下。お体の方はもう……」

『良いと思うか？』

あくまでにこやかなデュランの声にビュオー、とナカバの部屋の中に幻視の吹雪が吹き荒れた。

「うう、寒っ……」

思わず身震いしたナカバに、ヴィスカスが嫌そうな顔をしてバツと頭からベッドの上から引きはがした布団をかける。

その衝撃にナカバが布団の中で「にぎゃ！」と潰れた悲鳴を上げた。が、暫くしてからもぞもぞと動いて、取り合えず顔だけ外へガバツと出す。

「ぶはっ……はー、生き返った」

「反応にまで品が無いな、屑虫が……」

「うっさいゴキブリの癖に」

「ゴキブリ……。我が君の付けて下さった名だが、貴様はゴキブリを知っているのか」

「え、知らねえの？ てか、ゴキブリって魔界にいねえのかよ！」

何やらシヨックを受けている一人と不審そうな顔をしている一人はさておき、デュランとセシエンの間では別の話進行していた。

「その、陛下……」

『お前のせいで疲れて休んでいる俺を置いて遊びに行くとはなかなかいい度胸だな、セシエン。見直したぞ』

「も、申し訳ございません。わたくしは、ただ……」

『セシエン』

何か申し開きをしようとしたセシエンの言葉をやんわりと遮るデュランの声。

ナカバには何となくわかった。

絶対、あの魔王様は例によってあの無駄に長い足を組んで、頼杖をついて微笑んでいるに違いない。

目が笑っているかどうかは微妙だが。

その声にごくり、とセシエンが喉を鳴らし、悲壮な顔で「はい、陛下」と応える。

『お仕置きしてやるから帰って来い』

その言葉にセシエンがよろめき、ヴィスカスとナカバが同時に吹いた。

『……何か妙な反応をしなかったか？』

「お仕置きとか……っ！ え、エロ、エロい……無駄にエロい……っ！ やべえ、笑える……っ！」

「我が君直々とは……犬の分際で何と羨ましい……っ！」
『……』

布団芋虫の状態でごろごろと笑い転げているナカバと、何か悔しげに壁を叩いているヴィスカスの反応に携帯向こうの声は暫く反応に悩んでいる様子だったが諦めたらしい。

溜息を吐いて声は再びセシエンへ向かう。

『さて、セシエン。言った事は聞こえたな？』

「はい、陛下」

『良い返事だ。……』

一人硬い表情で頷いたセシエンの声を携帯越しに捉えて、何を思ったのかデュランは少し沈黙する。

その次の声はそれまでと違って随分と優しげだった。

『ところで、俺は誰かのお陰で非常に、非常に、非常に疲れているのだが』

「はっ……申し訳ございません」

恐縮した様子で赤面したセシエンに、携帯向こうの声は少し苦笑

する。

『疲れたから珈琲が飲みたい』

「はっ。……は？」

「疲れて無くてもいつもじゃん」

「疲れた時にはどうぞ我をお召しください我が君」

ぼそつとナカバが突っ込んだり、ヴィスカスが何かほざいたりしているが「声」は今回は迷わず無視する事を選んだようだ。

『マンダリンが良いな。最近口にしていないからな。ああ、インスタントでも一向に構わんぞ。そう言うものがあれば、下らん事は忘れるかも知れんと思うのだが？』

「うわあ、堂々とした脅迫おねだりだ」

「しかし、陛下。わたくしは……」

『まさか、俺に合わせる顔が無い……などと下らない事を考えているのではないだろうな？』

良いか、と携帯の向こうの尊大な声は優雅に告げる。

『お前の意志など問題では無い。お前は誰のものだ。お前の主人の名は何だ？』

「……ディアヴォロス・デュラン聖王陛下、でございます」

『そうだ。お前をどうするかは主人である俺が決める。そつだな』

「陛下……」

『大体、お前以外の誰が俺の為に珈琲を作るといふのだ。お前は主人である俺に向かって自分で作れと言つつもりか？』

「滅相もございません！」

『ならさつさと戻って来い。今日は飛びきり濃いのが良い』

「……はい。はい、陛下」

「え？ コレ何処の青春学園ドラマ？ てか、今の何処に感動の要素が……」

どこか感激した様子のセシエンに床に簀巻き状態で転がっているナカバが生温い目で呟く。

が、もう一人の魔族はまた別の感想を抱いたらしく、ギリギリと歯を食いしばって赤い目でセシエンを睨んで、

「我が君……あんな駄犬に優しいお言葉を……何と羨まし、いやお優しい。さすが我が君」

「セシエン君良いのかあれで？ 結局ただの飯使いじゃん」

「我も珈琲になりたい。ああ、我が君」

「インスタントで瓶詰なのに？ 脱臭剤にもなるのに？」

「我が君の香りを吸い込めるなら本望……ああ、我が君、芳しき御方……」

「真性だなー、ゴツキー……」

『……。聞こえているぞ』

「駄目だなー、デュラン。そこはスル スキルだろ。スルー」

『まったく……セシエン、まだそこに居るな』

「はい、陛下」

『やることが分かったならさっさと動け。俺は疲れているのだぞ』

「畏まりました、主」

恭しく一礼し、何やらふっきれた表情で顔を上げたセシエンはナカバの方によくやく向き直る。

「主より命を授かりましたので、これにて失礼致します」

「そうですかー、って詫びの一つもねえのか。はいはい、いいですけどね。ワンコはご主人様大好きだもんな」

「……いい、いえ。ええ、まあ」

「肯定しやがったっ?!」

くそう、照れても美形は美形か。ムカツク。
などとブツブツ言うナカバにセシエンは微妙に目をさまよわせ、
小さく咳払いをする。

「では、ナカバ様、どうぞご健在に」

「セシエン君もほどほどにな」

「……。ええ、そうですね」

『ナカバ。その辺にしておけ』

「え? 何? 何この微妙な反応? 何か悪い事言ったか?」

曖昧な顔で笑んだセシエンに、ナカバはきよとんと首を捻ったの
だった。

飯談 小さいお年玉 その6 (前書き)

さくつとフ話目とくつつけるはずが……二人が暴走しました
お陰で若干短いですが、当人たちが楽しそうなのでこのまま突っ走
ります。

というところで、ゴッキーのターン。

仮談 小さいお年玉 その6

『さて、セシエンは片付いたようだな』

「ん？ 一瞬黒発言が聞こえたような……」

携帯向こうの発言にナカバが床に転がったままアレと首を捻る。

しかし、それに構う事無く携帯の向こう側から涼しげな声が『ヴィスカス』と、もう一人の魔族の名を艶めかしく呼ぶ。

それにしかし、意外にも受けたヴィスカスの顔に喜色の色は見られなかった。むしろ豪奢なと言ふ形容詞が良く似合う顔を苦く顰めている。

その顔を床におでんのウィンナー巻きよろしく転がっていたナカバは下から見上げて反対側に首を捻る。

(何たる。不機嫌……怒ってる、もあるっばいけど何たる?)

そのまましばらく黙って携帯を睨んでいたヴィスカスは、やにわ手を伸ばし携帯をがしりと机の上から掴み上げ、

「我が」

ピッ、ブシッ。

ッー、ッー、ッー。

「あ、切れた」

「我が君ー！！！」

「お、お、落ちつけー！」

「我が君！ 何事ですか我が君！ 我が君？ どうして応えて下さらないのです我が君ー！」

「う、うるたえるんじゃあないっ！ 魔界貴族はうるたえないっ！」

「何があつたのですか我が君ーっ！！！」

「お前が通話切つたんじゃー！」

話が進まない事に業を煮やしたナカバが毛布ごとタツクルをかけ、
ヴィスカスが携帯を手から取り落として振り返る。

「何をする。我が君が、我が君が……っ！」

「だあっ！ だ、か、ら！ お前が通話切つただけだっの！」

「……ツワとは何だ」

「え？ そこから？」

苦々しげな顔で問いかけたヴィスカスに悩む事二秒。

「ま、とにかくデュランに何かあつた訳じゃないから」

「本当だな」

「本当だつてば」

「本当に本当か」

「本当に本当だつてば」

「本当の本当に本当な本当が……」

「いや、落ちつけて。どこまで続ける気だよ。とにかく今切れたのはあんたのせいだから、それは確かだから」

「つまり……これは我が原因か」

愕然とした表情で携帯を見下ろしたヴィスカスにウィンナー巻きなナカバはうむうむと頷く。

それにヴィスカスは形の良い唇を噛み締め、

「くっ。我とした事が、愛しき我が君の話を遮ってしまうとは……我が君の声を堂々と聞くチャンスを自ら逸するとは」

「いや、そんな血涙流す勢いで悔しがられても……てか堂々として何。普段盗聴でもしてるのかよ」

「愛する者の欠片一つこぼさぬようにするのは、未来の夫として当然の責務であり職務！ 無論、我が君の声も常に万全の態勢で記録しているのだ」

「デュランの許可は？」

「我が君ならきつと、お許し下さるだろう！ 愛ゆえに！」

「て事は無許可か。犯罪じゃん」

「愛の前では我らは皆罪人だ」

「いや、愛関係無いし。世界中の愛に謝れ」

話が世界規模に広がった所で一息入れて、ナカバは「とにかく繋ぎ直すから携帯返せ」と、ズボリと毛布の中から片手を出す。

「……良かろう」

それに不承不承頷いて携帯を「拾え」と顎で指したヴィスカスに、ナカバが目つきの悪さを悪化させる。

「おいコラ。拾え、じゃねえだろ」

「何が不満だクズが」

「じゃ、やらない。おやすみなさい」

「……」
「……」
「何故我が人間ごときに物を頼まねばならん」

不満を隠そうともせずにはそりと呟いたヴィスカスにナカバは「何だ、分かかってんじゃない」と返す。

「我はヴァンパイアの当主で、我が君の未来の夫だぞ」

「いや、その夫婦論どうでも良いから」

「何だと？」

「ちなみに、デュランはちゃんとオレに頼む時は頼むつってましたけど。礼儀知らずって美しいと思う？」

二大ポイント、つまり魔王デュランと美しさを衝かれてヴィスカスがぐつと眉を寄せる。

そして、ややあつて如何にも渋々と言った様子で落ちた携帯を自ら拾い、突き出されたナカバの掌にポトリと落とした。

「調整して我に差し出すが良い」

「……結局ソレか。ま、良いけどさ」

言つてナカバはもぞもぞと毛布の山から抜け出て、携帯のボタンを操作する。

「ええと……しかしこれってオレから自分の携帯に掛けても繋がるのか？ とりあえずロックつと」

「何をした」

「通話以外の機能のロック。また途中で話切れたら困るだろ」

後はデュランがどうにかするだろ、と渡されてヴィスカスは少々

複雑な顔をしてナカバを見下ろす。
そして残念そうに溜息を吐いた。

「貴様も今少し、まともな見栄えであれば……」

「おい、しめるぞこら」

「まあいい。上出来だ。御苦労」

「うわーい偉そうだ！。で、念の為だし、やりかた覚えとくか？」

「良かるう。教える事を許してつかわす」

「ただだけオレサマですか。そうですね……ま、いつか。えーっと、ここをこうして、こうすると出るだろ？ でもって、こいつを指に繋いで、このボタンを押すとこのようにオンになる」

「ふむ」

「でもって、こっちが音量で、こっちがカメラの切り替えで、こっちがログ出す画面で、それからここを押すとサブメニューが開くから……あ、調整はこっちとこっちと両方で出来て。えーと、あとはコレと、コレがこーなるからこうだろ？ 大体こんなもんかな」

「なんだ、簡単ではないか」

「なら自分で気付けよ」

「黙れ。さもなければ美しく語れ」

「何か究極の二択だ！ てかゴツキ おぼえるの早いな」

「……当たり前だ。我を誰だと思っている」

「魔王のストーリーカー」

「我が君の夫だ」

『結婚した覚えは無いぞ』

よつやく再度繋がった携帯から最初に入ったのは訂正だった。

仮談 小さいお年玉 その6（後書き）

ということ、魔王様はおやすみしてゴツキーとナカバのターンでした。

そう言えばこの二人、実質年齢は似通っているのだったなと、改めて思い出しました。

ええ、ゴツキーの実質年齢はあれでも十五前後なんで。

デュランは自称二十四歳（で、外見もその程度）なので、人間換算でほぼ十歳上。

かなりの「姉さん女房」になりかねないのですが彼はいつだって本気で。

愛に生きてます。

さて、次は漸く魔王様復帰です。

飯談 小さいお年玉 その7 (前書き)

もうすぐ4月ですが…まだこのネタひっばってあります。

飯談 小さいお年玉 その7

再開第一声はきっぱりはつきりした否定だったが、ヴィスカスにはその事よりもデュランの声が聞こえた事に対する安堵が勝つたのか「我が君、ご無事で」と顔をほころばせた。

なかなか強いぞヴィスカス。主に無駄な方向に。

「新婚早々貴方を失うかと、我は心配いたしました」

そしてなかなかしつこいぞヴィスカス。主に夫婦めおとな方向に。

「……今のは新年早々、と言ったのだな。そうだな。私の聞き違いだな」

ついでになかなか往生際が悪いぞデュラン。主に逃げる方向に。

「ところで、愛しの我が妻よ」

「わたくし、君の瞳にズヴォリンスキー」

「何馬鹿な事を仰っているのやら」

「体調の方は如何ですか？」

「残念ながら順調快調絶好調……とは言えんな。今は丁度休憩していた所ではあるが」

通じる人だけに通じる一連の流れが出来ていた。

若干二名は意図的だが一名は天然だ。

ハラシヨ。ハラシヨ。

その流れに組み込まれていた事などつゆとも知らぬヴィスカスは休憩の言葉にやや浮かれがちだった表情を真剣なそれに切り替える。

「我が君、本当にもう話せる状態になったのですか？」

『現に話しているではないか』

「しかし、まだ何処か痛む所があるのではありませんか？ 少しでも疲れがあるならやすんでいただかねば。我が君は普段から無理をなさりすぎているのです。我が君の玉の肌的一点の曇りでも出来たら我はどうすればいいのですか。はっ！ まさかあの犬めに傷をつけられてなど……」

『落ちつけヴィスカス』

息継ぎする間も惜しんで問いかけたヴィスカスの勢いに苦笑の気配を漂わせつつ、デュランの声が心地よいアルトの音で返す。

『それは今、ここで話す話か？』

「……ですが。ですが、我が君。我は心配なのです」

ふっと心細げな顔になって呟いたヴィスカスの手が小さく震えているのを見て、ナカバは見なかった事にしようと決めて、ごろんと壁の方を向いてベッドへ寝転がった。

美形の憂い顔なんてただのテトロドキシンだ。

主に精神系に。

「滅びる美形」

「何か言ったか？ いや、今は貴様などどうでも良い。我が君、とにかく」

『だから落ちつけと言っただろう。私ならばここに居る』

ふう、と溜息交じりに告げて、デュランの声は小さく笑みを帯びる。

『先程も言っただろう？ 今ここで話す話か？』

「我が君の無事が我にとつては最優先なのです」

『やれやれ強情な……まったく、そこまで言い募るのは無粋というものだぞ、ヴィスカス』

「！」

無粋、の言葉にガンツ、とショックを受けるヴィスカス。

その変化にナカバが「おお、何かマンガみてえ」とこっそり拍手している事すら気付いていないだろう、そんな激しい衝撃の受け方だった。

しかし、そのヴィスカスの変化に構わず携帯向こうの声は不意に極上の甘さを伴って囁きかける。

『私は、今ここで、お前の顔も見れないまま声だけで話を続ける気か？ と尋ねたのだが』

「……え？」

『まだ年が明けてから一度もお前の顔を見ていない』

その言葉にしょげていたヴィスカスがパツと顔を上げる。

『お前ときたら、普段は呼びもしないのに顔を出すと言うのに……居て欲しい時には来ると言ってはくれないのだな』

「わ、わ……」

「和？ 和食ばんざい」

「我が君。それは、もしや……」

『ここまで言ってもまだ通じないのか？ やれやれ……無粋もそこまでとなるといっそ痛快だな』

クス、と小さな息をこぼし、携帯向こうの声は『ヴィスカス』と呼びかける。

『会いに来てはくれないのか?』

直截的な言葉にヴィスカスが普段の伶俐な表情を忘れて耳まで赤くなって絶句する。

そして、それから暫くじっと携帯を凝視し、ややあつて恥じらうように頬を染めつつ顔を背けて、

「我が君、自宅でえとをご希望だったとは……我も夫としてまだまだ未熟でした」

『いや、そういうつもりではないのだが……それと、くどいようだがお前も未婚者だからな?』

「デュラン、聞いて無い聞いて無い。別世界に旅立ってる」
『……困った子だ』

背景にバラの花を飛ばして幸せの青い鳥の後をスキップしながら追いかけていそうな美青年の後ろで、心底嫌そうな、うつつしそうな顔をしているナカバとデュランの溜息が重なる。

ちなみにヴィスカス、魔力を使って器用に本物の花を飛ばしてみせていた。

チヨイスは当然のように情熱的な深紅のバラっぽいもの。

邪魔だ。

部屋が散らかる。

誰が片付けると思ってたんだこの野郎。

そんな思いの丈を込めてナカバは凶悪な視線で床に次々と舞い落ちてゆくバラっぽいものを睨む。

「オーケイ。分かってる。花は悪くない」

悪いのはその美形だ。

深い溜息を吐いて黙々とバラを指先で摘み上げては、なるべく体から遠ざけつつゴミ箱に放り込んでゆくナカバの後ろでは、相変わらず頭の中身が桃源郷に旅立って居るヴィスカスがせつせとバラを量産していた。

それをギツと睨み、ナカバは「うおい」と低くドスの利いた声を携帯に向ける。

「これ、即刻どうにかしやがれ。お前魔王だろ」

「分かっている」

「ならさつさとやれ。今すぐに。ハリーハリーハリー」

「分かった分かった……」

溜息交じりに呟き、デュランは『パルヴス』と声をかける。

『私を何時まで待たせる気だ？ お前が年初めの衣を用意すると言っていたのを忘れた訳ではないだろうな』

その言葉にシュピンとあっさり夢の国 鼠は居ない から帰還し、ヴィスカスはくるりと携帯の方へ向き直り恭しく頭を下げる。

「勿論、我が君に関わることであれば何一つ、このヴィスカスが忘れる訳がありません」

『ならさつさと来い。寒い』

「我が君……そんな、大胆な」

『……何の話だ』

「私の肌で温めて欲しいなど……」

『一言も言っていないが』

「勿論、今すぐ私の抱擁で温めて差し上げますとも」

『要らん』

「そんな冷たい所も素敵です我が君」

『それならば北にでも行つてしまえ』

「ご安心ください。新婚旅行の暁には北と言わず東西南北全てをめぐるつもりです」

『だから、お前もいつまでも私に拘らずに適当な相手を見繕えと…』

「我が君」

溜息交じりのデュランの声に、ヴィスカスは有無を言わせぬ笑顔を作る。

ただし目が猛獣の目だった。

「妥協などという選択肢は我にはありません。妻か、死か、です」

『どここの宗教改革…』

「無論、私の目の赤い内は、我が君を余所の者に渡す気はありませんが」

「あ、確かに赤いもんな」

「我にとって我が君を愛さないというのは、生きてないも同然なのです。我が君が死ねと命じられるのならば甘んじて受けましょうが…生きていろと仰るのならば、諦める事など出来ません」

『…』

「……愛されてんなあ」

最終的に沈黙した携帯の向こう側へ、ナカバがぼそつと呟くように声をかけた。

それに疲労の滲む美声が応える。

『代わるか？』

「絶対ヤダ」

「我也嫌です」

この議案は多数決で否決されました。

そう付け加えたナカバに、携帯の向こう側の魔王は深い深い溜息を吐いたのだった。

仮談 小さいお年玉 その7（後書き）

テトロドキシンはフグ毒です。

ズヴォリンスキーと謎の言葉を発しているナカバのネタが知りた
い方はサンホラとでもググってみて下さい。

パルヴスとゴツキーが呼ばれているのは誤字脱字の類ではありません
ん。

デュランは昔ゴツキーを【parvus】と呼んでた時があったの
で……駄々を捏ねる彼を、名前ではなくこつちで呼んだのでした。
こんな解説が必要な話ってどうなんだろうと我ながら思います。え
え。

という事で、どうもこんにちは、尋です。

被災地ではありませんが、余震が何度も来るせいで若干寝不足です。
寝不足の妙なテンションを感じ取って頂ければ幸いです。

ゴツキーのしつこ……もとい純情も感じ取って頂ければ幸いです。

もうちょっ……まだまだ続きます。

仮談 小さいお年玉 その8 (前書き)

小さい頃の事を覚えているだろうか。

初めて立ちあがった時に見えた景色。

自転車に乗れるようになったあの日。

曖昧な悲しみを言葉にする事も出来ず、じっと握りしめて立っていたあの頃。

自分が子供だという事すら知らず。

それがどれほど希有かも分からず。

変わってゆく自覚すらないまま、

その先こんな風になってゆくなんて思いもせず、ただ過ごしていた頃のことを。

もう戻れない。

起こったことは起こらなかつたことには出来ない。

過ぎたことは過ぎなかつたことにはならない。

大切だつた物をいつの間にか無くして。

大事だつたはずのことをいつの間にか忘れて。

そんなことすら思い出せなくなつて。

それでも、変わらないでいることなんてできない。

なあ、昔の自分は好きになれる？

今の自分は好きでいられる？

これから先の自分に、希望が持てる？

きつとあの頃よりも振り返る事が多くなつた今の自分は、一体何者なんだろう。

仮談 小さいお年玉 その8

その後も色々と言ひ募るヴィスカスがやっと退室し、集合住宅の中の狭い一室はようやく静けさを取り戻した。

それにナカバは妙に疲れた気分で「ふいー」と呟く。

「いや、マジで何でこんな事になったんか訳分からねえ……」
『すまん』

「まったくですよ」

言つてナカバはふと、静かすぎる事に気付いて周囲を見回す。

「あれ？」

『どうした』

「いや、何か……」

首を捻つてナカバは自分の違和感の元を探す。
クローゼットの扉が開けっ放しになっている。
変なバラっぽい物がまだ散らばっている。

そんな事だけでは無い、もっと決定的な何かが欠けているかのよう
うな。

「うーん……何だっけな。何かこー言う感じだったよっな」

『ラジオ体操第三か？』

「ねえよ」

手を広げたり狭めたりしながら冷たく応え、ナカバは「何だったっけかなあ」と首を捻る。

「何か足りないような……」

『あの二人が何か持ち出すと言う事は考えにくいが……』

「ま、だよなあ……お前じゃないし」

『人聞きの悪い事を……俺はきちんと精巧なコピーを置いていって
るぞ』

「犯罪じゃん！」

びしい、と携帯向こうにエアつつこみを入れて、ナカバは「まあ
良いか」と諦めてベッドに座りこむ。

何か大事な事ならそのうち思い出すだろう。
ついでにベッドの上にあったバラもどきを、何かの包装紙でぎゅ
うぎゅうになっっている屑かごめがけて放る。
届かなかった。

「……ま、いつか」

『良いのか？』

「良いんです」

『そう、か……』

「良いんです」

『……』

「……もしもーし？」

『……』

「……おーい？」

『……』

「やっほー」

『……』

「よーろれいひー」

『……』

「海賊王に俺はなる」

『……』

「さよなライオン」

『…………』

「西ライオン、一文字変えて 武ライオン」

『…………』

「一文字違っただけで全然違う。L KONDOです」

『…………』

「…………あれ、死んだかな」

『…………いや、死んでないぞ』

「なーんだ」

ややあつて返つて来た掠れた声にナカバは肩を竦めつつ、ひっそりと目つきを険しくする。

「なー、お前そつち誰か居ないのかよ。オレ放置プレイしやがって」

『特に居ないな…………何だ、寂しかったのか？』

「絞めて良い？」

『出来れば遠慮したいところだな』

しらつと応えてきた向こう側の声にナカバはしかし、少しの間何か考えるように眉間にしわを寄せていた。

そして、「デュランってさあ」と脈絡も無く言葉を投げかける。

『何だ』

「えーと…………子供の頃ってどんな子だった？」

『…………また妙な事を聞いてきたな』

「うーん、確かに微妙かも」

何で自分でもそんな事を思いついたのか分からず首を捻り、ナカバは「多分正月だからじゃね？」と適当な理由をつけてみる。

「ほら、昔は正月ごとに一歳年とつたんだろ？」

『ああ、懐かしいな……』

「懐かしいのか。さすが若づくり大王……」

実年齢不明、自称二十四歳魔王の感想にナカバは唸り、「お前のちっさい頃って想像つかねえわ」とぼたーんと仰向けにベッドに倒れる。

「お手上げだー！」

『楽しそうだな』

「うん、まあまあ。で、どんなだった？」

『別段、普通……』

「お前の普通は当てになりません。背高かった？」

『どちらかと言えば小さかったな。あと……紐が着いていた』

「ヒモお?! お前、ヒモだったのか! その年で!」

『……違つぞ』

もちろん冗談である。

『まあ、アリアドネの糸だ』

「……お前」

『いや、俺自身は迷った事は無かったのだがな……他が探すのに不便だったらしい。まあ、方々に連れて行って貰っていたからな』

「連れて行って?」

『ああ』

「ふうん」

物見遊山か、と聊か古い言葉を思い浮かべるナカバの隣で、携帯は淡々と話を続ける。

『その辺りを歩いていると、見知らぬ者に声を掛けられてな』
「ナンパ？」

『一人なら、一緒に遊ばないか……というような内容が多かったかな』

「ナンパか」

『それから誰かの家やら、車やら、市場に連れて行って貰っていたな』

「結局ナンパだな」

『まあ、移動中目隠しをされたり、袋につめられたり、肩に担ぎあげられる点を除けばおおむね快適だったな』

「ナンパじゃないっ？！」

人はそれを誘拐と言う。

『確かに……後から同僚達にそのような事を言われたな』

「言われる前に気付け」

『いや、大して何もされなかったし……箱詰めに使われたり、食事を貰ったり、珍しい場所に連れてゆかれたり、札を付けられたり』

「それを誘拐と言っんです。ってか札ってなんだ」

『……さあ。ただ、今思うとあれは恐らく値札だったから……売られかかっていたような気もするな……』

「気付くの遅っ！」

やべえ。ちび魔王やべえ。

迷子紐が着く訳だ、とナカバは頭を抱える。色々な意味で危なすぎる。

「周りの奴ら苦労したろうなあ……」

『……。そうだな』

「思い当たる節があるんだな。そうなんだな」

はー、と溜息を吐いてナカバは「オレの若い頃と比較にならねえな」と呟く。

それに携帯向こうが『今でも若いだろう』と苦笑した。

「そうかなあ……………」

『人間の寿命から言ってもまだ四分の一にも達していないだろう。平均寿命も幼児死亡率が含まれているから、実際にはもう少し長いと思って良いしな』

「うーん……………」

仰向けに伸びたまま唸るナカバに、向こう側は少し沈黙し、小さく笑った。

『まだ、思い返すにはお前は若すぎるかもしれんな』

「そうかなあ」

『生きるのが辛いかな』

「……………」

少し間をおいて応えたナカバの言葉を否定する事も肯定する事も無く、魔王の声はただ『そうか』と呟いた。

それに勢いをもらったように口を開いて、ナカバは天井を見上げたまま独り言のように言う。

「たださあ、もっと昔の方がオレ、人間が出来たような気がするんだよな。もっと素直だったし、頭も良かった気がする。やる気もあつたし、チャレンジ精神もあつた気がする」

『ああ』

「何か、段々ダメな奴になってる気がする」

とか言ってもしょうがねえんだけどさ、とナカバは天井を見上げたまま独りごちる。

「生きてるだけで劣化しそうな気がするんだよなあ……デュランはさ、劣化してるって思う事ある？」

『現在進行形で劣化中だな』

「そっか」

案外あっさりとして、苦笑交じりに肯定した声にナカバはごろりと反転し、顎を組んだ腕の中に埋める。

「それって辛くないか？」

『まあ、辛くないと言えば嘘になるだろうがな……仕方ない事だ』

「や、それはそうですね」

『お前は辛いと言うより、恐ろしいのだろう』

言われてナカバは瞬き、「うーん」と悩んでから「でも誰でもそうじゃね？」と返してみる。

「そのうちさー、傷の治りが遅くなって、手とか足とかも動かなくなつて、自分で食事も出来なくなつてさ。おまけに治療も出来ないっつーか、そりゃ金持ちならどうとでもなるだろうけどさ。オレ、そんな金無いし稼げる当てもねえもん」

『ふむ……そう言う時は表に出て、適当な相手に笑いかけると後の事はやってくれるぞ』

「死ね」

それはお前だけだ。

このヒモ男め。

届かない魔王の幻影に向かってゲシゲシと蹴りを繰り返すナカバ

に、その様子がまるで見えているかのように携帯向こうで愉快そうな笑い声上がる。

その語尾に小さく咳き込む声が重なったのに気付き、ナカバはむくりと体を起こす。

「…………お前さ」

『何だ』

「その、やっぱり何かあった？」

『いや、通常とさして変わらんが』

「…………ふうん、ま、良いけどさ。うん」

『…………』

「何だよ」

『いや、お前は相変わらず優しいな』

慈しむような声で言われて、ナカバは「ごふ」と噎せる。

「コロスキデスカ」

『童心に戻って素直な気持ちで言ってみただが』

「やめい。キモイ」

言われてナカバは眉間に深い皺を刻んで、口をへの字に結ぶ。

「…………それに、オレ優しくなんかねえよ」

昔、そんな風に自分の事を優しいなんて勘違いしていた時期もあったけど。

言葉にせずにも胸の中で呟いて、ナカバは視線を携帯から背ける。

それに、見えない相手は小さく微笑したようだった。

『あと五十年』

「は？」

『それぐらいすれば、きつとお前は今のお前を少しは理解できるだろう』

「何その五十年計画……大体、そんなぐらいたったらポケが始まって覚えて無いかもしんねえじゃん」

『ふふ、そうかもな。だが、安心しろ』

「安心しろって何をだよ」

「はああ？」と背景にト書きで出て来そうなのは見事な嫌そうプラス疑問の表情を浮かべたナカバへ、携帯の向こう側から艶やかなアルトの声が余裕を帯びて響く。

『俺は覚えているからな』

「……えーつと」

『お前が忘れても俺は覚えている。忘れたならば俺を呼べ。教えてやる』

「はあ……っーか、その場合お前の事も忘れてねえ？」

『ふふ、まあそうだろうな』

「いーみなーいじゃーん！」

思わず往年のつつこみをいれるナカバにクスクスと向こう側は笑って、また小さく咳き込んだ。

それにナカバは「逆だったかな」と小さく呟く。

正直ナカバも今のこの状態が良いのか自信は無い。

デュランがあの時、ナカバの問いに「NO」と一言答えていたらまた別の選択肢を選んだだろう。

けれど、魔王は多分、うっかり、本当の事を答えてしまった。

だから現在進行形でこうしているのだけだ。

(やっぱり喋らせない方が良かったかなー)

今の魔王はおそらく、確実に喋らせてはダメな相手だ。それはナカバにも分かっている。

分かっているからこそ確認し、結果として「喋らなくなっただろうセダメダメなダメ魔王だから、ま、いっかー」で喋らせていたのだが。

「えーと、デュラン、やっぱりそろそろ」

『ナカバ』

微笑交じりの声に、ナカバは悟って口をつぐむ。

そして、口を開いて代わりにこう告げる。

「五十年後だっけか」

『ん？』

「きつちり覚えて、ボケたオレんとこにベータ版のようにきつちり再生しに来やがれ。口がひしゃげる程甘い大福と、顎が外れる程苦い茶ぐらいなら出してやる」

『茶でなくて珈琲なら行ってやるっ』

「この珈琲中毒者め」

『誉めるな』

「誉めてねえよ。でもさあ、後正月五十回分かあ……長いなー」

『そうでもないさ。五十年などほんの一瞬……瞬きする間に過ぎてしまっ』

「お前の基準で測られてもなー」

『そうでもないさ。人間は魔族に比べて寿命が短い分……過ぎる時は早い。一秒一秒、変化して二度と元には戻らない』

「……うん」

いつの間にか意識せず、ベッドの上に正座していたナカバは携帯から聞こえる言葉に頷く。

「ま、確かにそうなんだよな……お前が言つと変な説得力があるけどさ」

『そうか？ ……まあ、次の再会までは今の健康状態を維持するよ
うに心がけて貰いたいものだな』

「お前もちゃんと体調管理しろよ。またワンコとかの駆け込み寺されるの嫌だからな。下の階から苦情とか来そうだし」

『あの二人の事は許してやってくれ。どうにも二人とも俺に甘くな……』

「見れば分かります」

お前がしつかり押さえるよ、との真面目くさった人間の子の言葉に魔族の王は『分かった分かった』と苦笑交じりに返答する。

それに「ホントかよ」と疑わしげな眼を向けて、ナカバは足を崩す。

「で？ ゴツキーそっちにもう行ったか？」

『……いや。だが、そろそろ制御圏内に入るようだ』

デュランの答えにナカバは「ふうん」と頷いて、

「うん……じゃ、潮時か」

『……そのようだな』

ナカバはベッドから降りて、携帯を手取る。

もう何年も機種を変えていないせいで、手にしっくりなじむ気がする。

ちかちかと明滅する画面。

表示されているのが相変わらずナカバ自身の番号だという点を除けばごく普通の光景だ。

携帯越し。

酷く日常的な距離に見えるそれは、実際にはあちらの世界とこちらの世界ははるか遠く隔たっている。

それが、ナカバ達の距離。

「うん、じゃ「戻る」。で、親んどこ顔出して来るわ」

『そうか。では』

いってらっしゃい。

当たり前のように告げられた言葉にナカバは少し目を見開いて、ちよっと視線をさまよわせた後「うん」とそっけなく頷いた。

「お前も達者でな」

言って、ナカバは指先に力を込める。

ピツと音がして携帯の表示が暗転する。

多分、この携帯にまた自分の番号から通話がかかってくる事は二度と無いだろう。

(ま、それでも良いんだけどさ)

むしろ耳元であの声を囁かれるほうがぞっとする、とナカバは小さく身震いして「さてと」と誰へともなく呟いて、携帯を机の上に置く。

「行きますか」

人間側の世界に。
ナカバ

一呼吸置いてドアを開けたナカバの後ろの方で、小さく無邪気な子供の笑い声が聞こえた気がした。

飯談 小さいお年玉 その8（後書き）

まえがきを少し変えてみました。

私には慣れたやり方なのですが、余所様に受け入れやすいかどうかは割合微妙だと思っていたのですが……まあ、本文こんな感じですね。

どうでしょう？ 読み難いですかね。

ちらつと裏話を書いて、そろそろ観光旅行の裏側に戻ろうと思います。
それでは、また。

飯談 小さいお年玉 おまけ(前書き)

おまけです。

ギャグ要素ほぼ無しです。

仮談 小さいお年玉 おまけ

「我は貴方が死んでしまうのではないかと心配しました」

嘆きながらも手元では甲斐甲斐しく己の腿に乗せた王の足に靴を履かせるヴィスカスに、王は色褪せた唇の端をごく僅かに吊り上げた。

先程衣服の方は着せつけが終わわり、王の見た目は大分まともになっていた。

とは言え、まだ腰や腕、足首などに残された指型の痣は消えたわけではなく、僅かでも身動きすれば骨まで焼け切るような激痛が走る。他にもまだ肩や背には噛みつかれた時に刻まれた深紅の牙の痕や鬱血の痕が残っており、解れた構成式の修復と魔力汚染の浄化に演算能力の大半を割いている現状、体の損傷の修復は暫く後回しになりそうだった。

（まあ、肌や内に残った血や汚れをヴィスカスに清めてもらったお陰で大分快適になったな）

まだ汚れを落とす時に使った真水の為にしつとりと濡れている髪を数本青白い頬に張りつけたまま、王は薄青い目蓋を落とす。

（流石に一昼夜ともなるときついか……もうだいぶ年季が入った体だからな……）

それにしてもヴィスカスには悪い事をした、と王は独りごちる。

先程まで「あの犬畜生め、引き裂いて晒してくれろ」と憤っていたヴァンパイアの青年は今大人しく王の衣装を整えているが、その内心は未だ穏やかならざる状態だろう。

普段は聊か姦しい程に雄弁なその口は今きつく引き結ばれ、ともすれば溢れ出そうな苦言を噛みしめているように見える。指先が微かに震えているのは緊張の為か、それとも怒りか悲しみか。時折ちらりとこちらの様子を見上げる目には王を責めているかのような表情と、心配しているのだと訴える色が交互に現れていて、流石の

デュランも少々反省しなければなるまいと思わされた。

自分を昔から一途に慕ってくれている彼に己の血で朱に染まって倒れている姿を見せてしまったのだ。それも仕方のない反応だろうと王は心の中で呟く。

それでも、血の匂いが濃厚に立ちこめる室内に呼び入れても、王へと襲いかからずに正気を保って居られる可能性があるのは己の血を分け与えたヴィスカスしか居なかったのだ。

セシエンを呼びもどせばまた昨日と同じように、或いはそれ以上に手酷く噛みつかれ、貪られかねない。

かと言って、自分自身で事を收拾する為には続けざまに責められた体の疲労が酷過ぎた。

(まったく……)

王は声に出さずに呟く。

誰に呆れているのか、自分でもよく分からなかった。

「我が君」

呼ばれ、王はふっと物思いから覚めて目の前の青年貴族へ意識を向ける。

それを感じ取ったのか、彼は跪いて膝の上に王の足を乗せた姿勢のまま少しだけ安堵したように微笑んだ。

「意識ははつきりしてらっしゃるようですね……安心いたしました」
まあ、ナカバが氣遣ってくれたからな。

そう応えた王の言葉に、ヴィスカスは怪訝そうに「あの貧相な人間ですか？」と片方の眉を上げる。

「我が君はアレを気に入っているようですが……何か出来る能力があるようには見えませんな」

お前が戻るまで絶えずこちらに呼びか続けていた。

端的に告げた王の言葉にヴィスカスは「む」と小さく唸り、少し悔しそうな顔をする。

そう、あの状況で。

ヴィスカスやセシエンの様子から異常を悟り、デュランの周囲に万一の時に対処する要員がいるのかを訊ね、最終的に「喋らない方が良い」とヴィスカスに止められていたデュランを喋らせてでも、まずは意識を保つ事を優先して呼びかけを行った。

それがナカバの判断だった。

そしてそのお陰で、デュランはヴィスカスが到着するまで消えそうになる意識を繋ぎとめ、術式の維持を続ける事が出来たのだ。

彼女はこれから先もその判断が為した事の大きさを知る事は無いのだろうか。

「まあ、あの人間が我が君のお役に立った事は認めましょう」

濡れた王の髪を丁寧に拭きつつ、ヴィスカスは「ですが」と一段声のトーンを落とす。

「我が君、やはり此度の事、このまま看過することは出来ません」

ヴィスカス……。

「ご安心を。ただの私情ではなく、これは四大卿ヴァンパイア・ヴィスカスとしての判断です」

静かにそう告げ、ヴィスカスは目を閉じている王のこめかみをそっと拭う。

「王は世界の要石。その王が倒れればどうなるか、あの犬……失礼、白銀狼も如何に愚かとは言え心得ているはず。にも拘らずこのような事を行うとなれば、もはや魔族全てへの大逆と呼んで差し支えない暴挙です。我は白種の筆頭としてやはり見過ごす事は出来ません」
ついでに小さくこめかみに口付けを落とし、ヴィスカスは苦笑む。

「……ですが、我が君はそれを望まない。このような目にあわれても」

頭を支えていた指先をすりと襟と項の間に滑り込ませたヴィスカスに、デュランはピクリと体を震わせる。

ヴィスカスのその指の先にはまだ、昨夜押し倒されて噛みつかれ

た時の傷が赤く残っているはずだ。

触れられた所がじわりと熱を持つような錯覚。

小さく苦痛を堪えるように閉じた目蓋に力を込めて息を堪えた王に、ヴィスカスは黙って指を引いた。

「白種の統治者たる四大卿としての我も、貴方を恋い慕う一人の魔族としての我も、あの白銀狼を許すべきでないと思っております。二度目があった時に貴方が無事であると、誰がどうして言いきれましょう……貴方を失えば我らは……」

ヴィスカス……。

大気を戸惑いで震わせた王に、ヴィスカスは苦笑して濡れた黒髪を手ですくい上げ、無防備に晒された喉に口付けをまた一つ落とした。

それに王の喉が小さく震え、微かに開いた唇から小さく息が零れる。

しかし、声はやはり出なかった。

「喉が潰れるまで叫ばされ……」

その喉を舌先で一度舐め上げ、ヴィスカスは横目で王の表情を窺う。

「それでも、あれを許すと言うのですか……？」

それでも……そこまでセシエンを追いこんだのは私の咎だ。

嘎れた喉の代わりに大気を魔力で震わせてそう告げた王にヴィスカスは何かを堪えるように一度強く眼を閉じ、それからゆっくりと身を引いた。そして取りだした櫛で王の髪を整える作業を再開する。

「我は」

滑らかな、氷に濡れた絹のような黒髪を梳かしつつ、ヴィスカスは冗談めかした口調で言う。

「あの犬めの四肢を穿ち、腹を割き、腸はらわたを引きずりだして四十と四日引き摺り回して晒しても飽き足らぬ程に思っております」

ヴィスカス……。

「おりますが、我は貴方を傷つける事を望みません。あの犬が誅さ

ればそれが当然の報いであつたとしても貴方は悲しみ傷つく……
ならば、我は我慢しましょう」

私はお前に我慢させてばかりだな……。

「我への気遣いなど無用です、我が君。それよりも御身をもっと大切にして下さいませ」

模範解答のようなその答えに王は溜息を吐き、あの小さなパルヴスが随分立派な事を言うようになったものだと思つた。

それに「笑い事ではありません」とヴィスカスはむつと眉を顰め、「我が君、次にあの犬めの歯形をこの肌につけるようなことがあつたら我とて考えがあります。ああ、我が君の咲き初そめの白百合のような肌が……水鳥の胸の柔らかな羽毛のような白い肌が……ほの青く透き通る氷の上に降る淡雪の白さすら、貴方の前ではくすむと言ふのに」

……またこれが。

合間合間にしつかりと賛美を挟むヴィスカスの嘆きを聞かされながら、デュランは唇から小さな溜息を吐きだした。

この調子で延々、肌の白さを表現するだけで半日以上誉めたたえ続けられるのがヴィスカスだ。

これがヴァンパイア流の礼儀と知つていても己の容姿をさほどとも思つていないデュランは正直うんざりする。苦手なのだ。昔から勿論ヴィスカスのあのきらきら光る深紅の目を見れば、言つている言葉がお世辞ではなく本気だと言つのは充分、嫌と言つほど良く分かる。だが、良く分かるが故にヴィスカスの感性が心配だ、と王は痛むこめかみを抑えようとし、手がまだ動かない事を思い出して溜息を吐く。

だが、今回の事はデュランの判断ミスなのだ。それでヴィスカスに苦労と心配をかけた以上、どれだけこの状態が苦手で嫌で早く終わつて欲しいと思つていても甘んじて受けるべきだろう。

あまり甘やかしすぎると教育にも宜しくないかもしれないが。

いつまでも「パルヴス」のイメージ小たい子が抜けきらないでいる王がそ

んな事を考えているとも知らず、ヴィスカスは王の髪を梳かしながら如何に王が素晴らしいかについて日が傾くまで語り続けたのだ。た。

飯談 小さいお年玉 おまけ（後書き）

四月になっても正月の話題なんて、どんだけ過去を引きずりまくってるんだ自分。

どうも、尋でございます。

軽い気持ちで始めたはずが何故がこんな事に……。

そろそろGWも近い事ですし、観光旅行の方へ関連した話に戻ろうかと思えます。

骨子が出来あがっているのに肉のつき方がなんというか……ぶつ切りなんですけどね。

それでは、いずれまたお会いしましょう。

余談 買物難民の別視点(1) (前書き)

非常に非常に今更ですが……リクエスト企画多分最後の1つ
「デュランの地味スキル」の話です。

スキルは地味ですが周囲は大惨事。
そんな話ですがどうぞよろしければお進みくださいませ。

余談 買物難民の別視点(1)

セントラル
中央。

世界の中心であるというその本質を示すシンブルな名を冠するこの都市は、合計十三の区画に区切られている。

中央の【天壇】を擁する零地区に始まり、そこから北方向に一、そして時計回りに二、三と十二分割。零地区から同心円を描くように配備された環状道路と、同じく零地区から等間隔に伸びる放射状道路で分割構成される計画都市。それがセントラルだ。

その中で第三地区と呼ばれる区画はいわゆる商業地であった。

セントラルの全体の僅か四パーセントに満たぬその区域には、世界各地から厳選された一流の商店が集められている。

彼らの主な顧客はまず第一にこのセントラルに本社を置き、事実上「双神子」の私兵団となっているDDDの、その中でも特に実戦部隊の所属員だった。文字通り心身を賭けて戦いに身を投じる彼女等は通常のサラリーマンなど比較にならない程の高給取りでありながら、同時にその職務の性質上非常に短命である。その為、その短い人生を楽しむ為にと非常に金場なれば良いという傾向がある。そんな彼らは各企業にとって上顧客であり、同時に厳しい眼をもつ審判者でもあった。

当初はその彼らDDD所属員をターゲットに、そして徐々にこの世界で一番美しい都市を訪れるごく一部の選ばれし人々《ゲスト》をターゲットに、各企業は戦略を練り研鑽を積み、第三区という僅かな土地を巡ってしのぎを削り、競い合うようになった。そしていつしか第三区は世界でも有数のブランド企業の林立する一大商業区画へと成長したのだった。そのシェアの奪い合いは未だに静かに、そしてあくまで華やかに繰り広げられている。それはここ、第三区画五番通りに面したこの店も同じだった。

清潔感のある店内に満ちる白色の光。

磨き上げられたいくつもの鏡。

清潔で広い試着室。

広く通路を取った店内には思い思いのポーズを取った無色透明のマネキン。そしてそのマネキンには色とりどりの商品が飾られ、それぞれの華やかさを競い合うようだった。

その店内の一角で商品を選び出しつつ、リミュリシエルは溜息にその金の髪を軽く揺らした。

広げて商品を確かめ、また棚に戻す。

そうして溜息また一つ。

(幸せが逃げるわね……)

そんな事を思っ、リミュリシエルは気付かずまた一つ溜息を重ねる。

普段リミュリシエルは溜息を吐くような事は滅多にない。

大陸でも屈指の財閥であるミルフィリアの末席に名を連ねる者としての矜持が常に彼女にそうする事を許さないからだ。

それは夢から覚めて、家を出て、学校へ通い、また家に戻り、褥に着き、夢の中まで一貫して変わらない。唯一僅気が休まる時があるとするれば、それはナカバと、ヴィクトリアの三人だけで過ごす僅かな時間だけ。それ以外の時は常に気を張っている。緩みなく、弛みなく、淀みなく。ピンと張った「リミュリシエル・ミルフィリア」という完璧な淑女の形を保ち続ける為に。

それがここ二日は乱れっぱなしだ。

(それもこれも、『アレ』のせいよ)

また深い溜息を重ねて、リミュリシエルは持って居た商品をやや乱暴に棚に戻す。

カチンと響く音。

そして再びの気まずい沈黙。

物質的な重さすら具えているかのような静寂が、先刻からずっと

この店内を満たしていた。

否、その沈黙だけならまだリミュリエルでも耐えられる。だが、ただ無音に満たされているだけではなくひしひしと背後に明確な指向性を伴った意識　具体的には人の視線を感じるのだ。

ただ黙って、じつと観察されている。

それはけっして愉快な事ではないし、かと言ってはつきりと確認したいものでも無い。

出来れば、気が付かないままにいた方が幸せだろうもので、気が付かないふりを続けていたいものだ。

だがその沈黙と視線の元凶、もとい原因から目を逸らし続けるのもそろそろ限界のようだった。

(仕方ないわね)

リミュリエルはもやもやと言葉にならない感情が渦巻く胸の内を鎮めようと一度目を閉じ、覚悟を決めてゆっくりと目を逸らし続けていたソレへ向かって振り返った。

視線の先。そこはまるで別の空間のようだった。

煌々と天井から降り注ぐ白い光。

それはまるで天から降りてきた光の純粋な部分だけを集めたかのよう。

その天の祝福を一身に受けているかのように光の中心に佇んだその人の肌はあくまで曇りなく滑らかに白く、その頬は内の血の色を淡く透かす桜色に仄かに染まる。

肩に触れる程度に延ばされたぬばたまの髪は研ぎ澄まされた刃を思わせるように真っ直ぐで癖が無く、毛先まで傷一つなく艶やかだ。芸術家が丹精をこめて作り上げた美の精霊像のような類稀なる容貌。

目元は色の濃いサングラスで隠されているが、その艶麗さは隠しようが無い。

すらりと通った鼻梁に一切の無駄をそぎ落としたような顔の輪郭。

厚すぎず薄すぎず、絶妙な柔らかさを予感させるその桜唇の端を僅かに吊り上げた表情は、微笑んでいるようでありながら、同時に憂いているようでもあり、何か物思いに耽っているようでもある。

その、純白の色を纏った人　今回の旅行の主催者である奇妙な同行者、デュラン・ケヒトこそが重い沈黙の元だった。

ドアを潜って店内に入ったその瞬間から店員は店の隅の壁に押し付けられたかのように固まったまま、ただひたすら神々しいまでに美しいその人物へと崇拜の視線を注ぐだけで何も出来なくなり、店内に居た客も己の姿を恥じるかのようにそそくさと扉をくぐって外へと姿を消した。

そして代わりにショーウィンドの外には黒山の人だかりが出来上がり、只管硝子越しにこの「奇跡」に向かって熱い視線を注いでいる。

だがあまりに整い過ぎているその美貌は常人には眩すぎるのか、誰も近づいてその相手に話しかける勇氣は持って居ないようで、ただ遠巻きに取り囲み見つめ続けるだけで、店内には白を中心とした真空地帯が出来あがっていた。

しかし、その頂点に君臨するその人物はあくまで静謐に、清浄に、端麗に、俗世の騒ぎなど気にかける様子もなくただ美しくそこに佇む。

(……って、これ明らかな営業妨害じゃないかしら)

長く見続ければ目が潰れる白光のようなその姿から視線を逸らして精神の平穩を守ろうとしつつ、リミユリシエルは別の商品を手にとる。

店内はガラガラ、店員は行動不能。

どう頑張ってもまともな商売が成り立つとは思えない。

そんな有様をただ、ぼんやりと店内に佇むだけで成し遂げてしま

った悪魔のように神々しい美貌の持ち主は、今もただ黙ってサンダラスの奥の目を閉じている。

『神聖にして冒されざるべき存在』。

本来その呼称は双神子に向けられるべきだが、あの正体不明の自称研究員にもまたそう呼びたくなるような、何か言葉に出来ない空気が備わっていた。

ところで、あの顔、あの姿、あの存在に向かって思い切りよく飛び蹴りをかますナカバの精神はどうなっているのか。

(そんな心の強い所も素敵よ、ナカちゃん……)

はふ、と改めて自分の親友の素晴らしさにうっとりとし息を吐いたところで不意に周囲の空気がざわりと蠢いた。

アレが、動いた。

「悩んでいるようだな」

色にすれば細やかな光の粒子を纏った柔らかな若草色。

穏やかさと芽生えの力強さ、陽光の温かさを湛えた美声にリミユリシエルは顔が赤らむのを堪えようとす。

特別な感情が無くとも聞く者を魅了する声に、壁際に張り付いていた店員の一人が至福の表情で気を失った。残りの二人はそれに目もくれず、ますますその表情をとろんとろけさせる。

おまいら仕事しろよ。

ナカバの突っ込みの幻聴が聞こえた気がした。

その店員たちの二の舞にならないように努めて相手の姿から視線を外しつつ、リミユリシエルは「お待たせしてしまってごめんなさいね」と心のこもらない謝罪の言葉を向ける。

しかし相手もさるもの、明らかに投げやりな彼女の態度に嫌な顔一つせず周囲の色彩が色褪せるかのような鮮やかで艶やかな微笑を浮かべて「構わない」と返してきた。

その威力満点の微笑にリミュリシエルはくらりと頭が揺れるのを感じる。

まるで精神攻撃だ。

（そうよ、精神攻撃よ。こんな呪いに負けては駄目よりミュリシエル・ミルフィリア）

ぐっと下の方で拳を握りしめ、リミュリシエルはこれまでの人生で培ってきたミルフィリアの令嬢としての笑顔を引つ張り出し、装着する。

「優しいのね。そう言ってもらえると助かるわ……もう少しかかりそうだから」

「気に入る物が無いのか？」

完璧な笑顔を浮かべつつさりげなく視線を逸らしたりミュリシエルを、やはり大して気にする様子も無くデュランは優雅な野生の豹を思わせる足取りで近寄ってきて、隣に並ぶ。

ふわり、と動きにつれて仄かに涼やかな香りがした。

それに一瞬動揺してしまったのを抑えつつ、リミュリシエルは別の感情にそつと眉を寄せる。しかし、その感情を一先ず脇に置いて彼女は目の前に並んだそれらを見る。

その視線を追って、相手は「成程、サイズと形状、及び材質か」と彼女の悩みを正確に把握した。

「……そうね、品揃えが豊富なのは良いのだけれど」

「検索システムは使わないのか」

「使いたいんだけど、ね」

言葉を濁した彼女に「ああ、成程……」と何故か妙に納得したような顔をして、相手はするりと優雅にターンして別の商品の並ぶ棚の方へ足を向けた。そして、無造作に一つの商品を引き抜く。そして今度はまた別の棚に行き、同じように迷うことなく一つ選び出す。

それを五回程繰り返し、戻ってきた相手はそれをさらっとリミュリエルの前に並べた。

「候補としてはこの程度だろう」

「え？」

「ここらから見える範囲ではそれ以外に適当な物は見当たらなかったのな……まあ、気に入らないのならば店員に見せて、同じサイズのを奥から出させれば良いだろう」

「ちよつと待って」

「……何だ？」

思わず呻いたリミュリエルに、他のは用無し、と広げられていた商品を意外にも丁寧な手つきでハンガーに戻している相手が不思議そうに振り返る。その麗容を見ないように顔を背けつつ、リミュリエルは今起きた出来事ももう一度頭の中で整理する。

会話をして、それから店内を回って的確に候補を集めてきた。

そのの意味する所はつまり、

「私の探している物が分かったの？」

「違ったか？」

「いいえ、合っているわ……でも、どうやって」

「ああ、何処に何があるのかはもう把握したからな」

この広い店内にある商品全てを把握したと言うのか。それも、あの場から一歩も動かず眺めただけで。

短い言葉の裏の事実にリミュリエルは慄然とする。

しかも、彼女の記憶が間違いでなければこの相手は先程佇んでいた位置に収まってからは目を閉じていたはずだ。つまり、入口から真っ直ぐあの場所に行くその短時間で店内の配置全てを記憶したと言ふ事になる。

先程の発言が本当ならば、だが。

しかしきつと本当の事を語っていると云う奇妙な確信がリミュリエルの中にあつた。

この何処か人間離れした容貌の持ち主はきつと、本当にあの短時

間で周囲の配置全ての情報を把握してしまったのだろう、と。

彼女は黙って目の前に並べられたそれらを手取る。

その情報処理能力の素晴らしさは認めよう、と彼女は思う。

あのアサギの中で見せた魔法の複雑さと言い、今回の商品選びと言い、相手が非凡である事は間違いない。

が、

「ねえ？ もう一つ教えて？」

くしゃり、と掌の中のそれを握りしめ、リミュリシエルはにっこりと笑う。

「どつやって下着のサイズなんて把握したのかしら？」

余談 買物難民の別視点(1) (後書き)

デュラン地味スキルその1。

「一度見たら、何処に何があるかを完璧に把握できます」

……いや、いるだけで営業妨害するとかじゃないですよ？

声だけで腰砕けにするのは別にスキルでも何でもないですから。ということ、リムリンとデュランの買い物風景暫く続きます。

余談 買物難民の別視点(2) (前書き)

実はデュランと視線を合わせて会話をしているのはナカバだけ、と
いっお話。

余談 買物難民の別視点(2)

第三区五番通りに面した女性用ランジェリー専門ショップの中で
は天使のように愛らしい容姿の金髪の少女と、精霊ですら跪いて愛
を乞うだろう美貌の青年が向かい合っていた。

とは言え、二人の間に甘い空気など微塵も存在しない。

少女の方は剣呑な目つきを青年の目も眩むくらような美貌 は直視
できないので胸元のボタンに向け、一方の青年はサングラスの奥の
紫色の目を不思議そうに瞬かせている。

片や極度の緊張、片や緊張とは無縁という奇妙な組み合わせは、
ややあつて口を開いた青年の一言であつさりと崩れた。

「見たからな」

あつさりとした回答にリミュリシエルの背後がどす黒く染まる。

「へえ……見たんだ、見たのね、今見たって言ったわよね？」

「ん？ ああ……一応視覚は機能しているからな」

「……速攻で目を潰さなくっちゃ。いいえ、その穢れた指を切り落
とす方が先かしら……」

「？」

ますます膨れ上がるどす黒い殺気にしかし、相手は相変わらず不
思議そうに小さく首を傾げるだけで一向に危機感を覚えた様子は無
い。

その胸元をガシッと伸ばした手で掴み、リミュリシエルはニタ
アと笑う。

「で？ 黄泉に旅立つ前に教えなさい。一体どこでいたいけな女の
子の裸を見るような不埒な真似に及んだのかしら？」

「……及んでいないが？」

「……」

「……」

「……」

しん、と静まり返る店内。

奥の方で壁に張り付いている店員の一人が「触るなんて羨ましい……」とブツブツ唱えている声が微かに聞こえる。

その状況の中、片手で相手の胸倉を掴んだままりミュリシエルはもう一度情報を整理し直す。

「見たのよね？」

「見たな」

「だから分かっているのよね？」

「ああ、そうだな」

「やっぱり見たんじゃない！」

「見たが……ああ、そうか、失礼、説明が足りなかったな」

己のより背の低い相手に掴まれても何の痛痒つうようも感じないのか、相手は「さて、どう説明しようか」とこの期に及んでも悠然と唇に指先を添えて首を傾げる。

「まず、人間の骨格および体型には個体差はあれども、ある程度の共通した要素が含まれている」

「……は？」

いきなり始まった講義調の説明にリミュリシエルは掴み上げた姿勢のままポカンとする。

それに構わず相手は悠然とした態度を崩さないまま淡々と「講義」を続ける。

「それは年齢、性別等条件を絞る事で更にその各数値については正確な数値に近い予想値を出す事が可能になる。無論、実際に被服を取り払って計測してしまうのが一番早い方法ではあるが、そうでなくとも通常の行動を見て居れば関節の稼働域、及び骨格、運動した際の外形の形状差などのデータが積み重なればある程度どういった形状かは見当がつくと言うものだ。まして比較的装飾が少ない、ズボンやTシャツと言った体型からの変差の少ない衣装を好んで着る上に活発に行動する者の体型となれば半時もあれば充分すぎるほど把握は可能だな」

「……つまり、裸は見て無いのね」

「見ていないな」

服を着ていても、動いているのを見ていただけでほぼ完璧に正確に体型数値を把握したらしい。

（でも、それってつまり……他の人にも同じ事が言えるって事よね？）

リミュリシエルにせよ、ヴィクトリアにせよ、この相手と知り合ってから少なくとも二日が経過している。完璧にアウトだろう。いや、もしかするとそこでまた失神した二人目の店員のサイズもお見通しかもしれない。

最後に残った店員超がんばれ。

ナカバの幻聴がまた聞こえた気がした。

それに溜息をつきつつ、リミュリシエルは色々と諦めて目の前に並んだショーツに目を戻す。

「本当に……貴方っていやな人ね」

「それは失礼」

「またそう言う事をさらっと言うんだから……むかつくわ」

溜息を吐いてすっかり緩んだ手を相手から外し、リミュリシエルは「すっかり計画が狂っちゃった」と呟く。

「ナカちゃんから引き剥がそうと思っただらあっさり離れるし、態度は卒が無いし……ねえ、そもそもどうしてここでこんなに落ちつき払ってるのよ貴方」

「……何か早急に対処すべき事があつたか？」

「そうじゃなくて……良い？　ここが何処か分かつてるの？」

「第三区五番通り南、店内入口より南南東方向へ二十五度、水平方向誤差はプラスへコンマ三二八六一センチ、距離にして……」

「そこじゃないわ……っていつか貴方の距離感が段々怖くなってきたわ」

そこじゃないってなあに？　と言わんばかりのいつそ無垢な疑問を浮かべる見た目ばかりは玲瓏たる相手にリミュリシエルは段々疲労を覚えつつ、「ねえ、ここが何を扱う店か分かっているのよね？」と念のため確認を取る。

それに青年はやはり不思議そうな表情のまま「女性の下着ではないのか？」と至極あっさりとした正解を口にした。そこに恥じらいや銜てらい、或いは何らかの意識しているという様子は見られない。

「もしかしてご家族の方が皆さん女性とか？」

「いや、家族は居ない」

「……そう」

やはりあっさりとした口調で帰ってきた言葉にリミュリシエルは己の思慮のなさを詫びるべきか、それともさらりと流すべきか、咄と嗟さに迷って口ごもる。

しかしそのようすも卒の無い相手は直ぐに気付いて、蕩かすような微笑みを浮かべて緩く首を振った。

「家族は居ないが……良き同僚には恵まれた」

「……そう、良かったわね」

「ああ。……ナカバのような動作をするのだな」

嬉しそうに微笑んだ青年の顔から光速で顔を逸らしたりリミュリシエルに相手が「友人同士というのは似通うものなのだな」と何やら感心した風に呟く。

が、リミュリシエルの方はそんな呟きを暢気に聞いているどころの状態では無かった。

主に、心臓と呼吸機能の問題で。

「本当に分からない人……」

やっとで心臓が落ちついて、リミュリシエルはやや力無く呟く。

最初はこの相手を自分の大事な大事なあの子にまわりついている害虫以下の屑野郎か、もしくは脅迫なり恐喝なりの下劣な手段で

ナカバを強制的に連れ回しているゴミ野郎かと思っていた。

だが、見ていればいる程ただの変態の鬼畜では説明しきれない部分が多くなり、何よりナカバがこの相手と居るとのびのびと（手とか足とか突っ込みとかをお見舞いすると言う意味で）振舞っているのを見て、もっと分からなくなった。

だからこそ、こうして他の二人から引き離して様子を見ようとしたのだが。

（本当に、変な人……）

淡々とハンガーにかけたブラジャーを元あった場所に正確に片付けている相手を横目で確認し、リミュリシエルは「なんだかなあ」と小さく呟く。

本当にこの相手に会ってから今までしつかりと嵌めて保ち続けてきたはずのミルフィリアの令嬢としての自分の姿が崩れっぱなしだ。それは非常に屈辱だ。屈辱だが、物珍しそくに、邪気も曇りも一点も無い目で「おや、新式の繊維だな」と店頭に展示されているガーターを調べているあの姿を見てしまうと悔しがっているのが馬鹿らしくなる。

「分かったわ」

「ん？」

深い嘆息と共に吐き出された言葉に相手が不思議そうに振り返る。その夢のような麗容に向けて、リミュリシエル・ミルフィリアはピシリと指を向けた。

「貴方、ナカちゃんと同じくらい変わっているのよ」

勿論、顔は逸らしたままで。

余談 買物難民の別視点(2) (後書き)

デュランの地味スキルその2。

「見ていればどんなもののサイズでも分かります(服を着ても無駄無駄ッ!)」

ちなみに胸の詰め物だろうが、カツラだろう、特殊メイクだろうが見抜きます。

流石、人類の「敵」……。

余談 買物難民の別視点(3) (前書き)

やっと書きたい場面までもってこられました。

買物難民別視点のラストです。

ギャグ要素は無し、シリアス割合がさらに多めです。

余談 買物難民の別視点(3)

「意外だな」

「何のことかしら」

「ナカバのことは変と思っていたのか」

「変なんて言わないで頂戴。あの子は変わってるだけよ」

そこから靴屋、化粧品店と回って今はブティックに居る。

便利な、動いて喋ってそして少々で無い程に目立つ検索ソフトと
思えばリミュリエルにもこの相手がある程度許容することが出来
た。

その検索ソフトは遺憾なくその機能を発揮し、的確なサイズと形
状の靴を候補としてリストアップし、肌の質や色に合う化粧品を選
び出し、そして今は丁度良いサイズと形状のワンピースを選出する
のに役だっていた。

「変わっているのと変というのは違うものなのか？」

「違うのよ」

オリーブ色のワンピースを棚の上に置いて首を傾げた相手にリミ
ユリエルは「この顔でこの中身でこのセンスなんて、これはもう
世界の敵ね」と意外と本質に近い事を呟きつつ首を振る。

「良いこと？ ナカちゃんはず素敵なの。そして凜々しい上にか
っこよくて、勇ましくて、男前で、気風が良くて、可愛くて……変
わっているのよ」

「成程」

拳を握りしめて力説したりリミュリエルに相手は穏やかな微笑を
持ってさらりと頷く。

「それで、貴方としては自分の恋慕する相手に妙な相手が絡んでき
たのではないかと私の事を敵視し、事ここに至る……ということか」

「身も蓋も無い表現をするのね……」

「らしいな……何故か良く言われる」

相変わらず遠巻きに取り囲まれるのはもう諦めるとして 第一
誰も隣に居る存在などまるで見ていないのだから この相手の天
然ボケっぷりにはやはりまだ慣れないわね、とリミュリシエルは嘆
息する。一つボケられることに本当に全身の気力を持って行かれる
気がする。

『意外と天然入ってるな。見た目はデカイけど、中身はガキなん
だよ。五歳児五歳児』

(何て的確な表現力なの、素敵よナカちゃん……)

親友の月旦を思い出してリミュリシエルはほうと溜息を吐く。

素敵な親友。大事な親友。思いだすだけで癒される。

そんな彼女を思い浮かべつつ明るいオレンジ色の花描かれたワン
ピースを広げて、リミュリシエルは小さく首を傾げる。

「いまいちね……」

「そうか」

そう言うのが分かっていたと言わんばかりの態度にリミュリシエ
ルは少々ムツとする。

もしかしたら相手はただ肯定しただけなのかもしれない。

だが、その柔らかな響きの一言一言の裏に何か隠された意味があ
るのでは、と勘繰りたくなる気持ちが先立って、リミュリシエルを
微かに苛立たせるのだ。それは大人相手だろうと対等以上に渡り合
う自信がある彼女が、珍しくペースを乱されて掌の上で転がすよう
に良いようにされているように感じる相手からの言葉だからなのだ
が、彼女はまだそれを自覚して制御するには若すぎた。

故に、聞き返した声が多少とげとげしかったのも彼女の十四とい
う年齢からすればある意味無理も無い話だった。

「じゃあ、貴方はどれが良いと思っっているのかしら？」

「さて……そうだな、これが、これだな」

藍色の物とオリーブグリーンの物をそれぞれ指したデュランにリミュリシエルは眉を顰める。

「地味ね」

「そうか？」

「地味よ」

「ふむ……肌の色には良く映えるだろうと思ったのだがな。まあ、どうしてもというのならば修正すれば良い話だ」

「修正？」

「ああ補正、というのだったか？ まあ、量産品は体型に合わない場合が多いから……購入後に着崩れを起こさないように絞りを入れるなり、丈を詰めるなり、或いは好みの場所にポケットを移動させても良い。ボタンを変えれば印象は変わるし、まあお前がどうしてもレースの飾りが欲しいと言うのなら縫いつければ良い。それだけのことだ」

「……ねえ、まさかそれ、貴方がするの？」

「まあ店に依頼をしても良いが時間が無いだろうから……構わんぞ」

どうやらこの青年、裁縫や刺繍の心得まであるらしい。

見た目はどこぞの神話に出て来る太陽をつかさどる美神のようなのに、妙に家庭的だった。

この分ではどこぞでひよこのアップリケでもついたエプロンで夕食の用意を始めたたり、皿洗いをしたり、風呂掃除をしていたりするのかもしれない。リミュリシエルは荒れた様子の無い白く美しい相手の指を見ながら、労働には無縁の人だと思っていたけれど、と咳く。それに青年は黙って艶麗に微笑みただけで肯定も否定もしなかった。

結局その後もリミュリシエルは一時間ほど悩んで、最終的にはオリーブグリーンのシンプルなワンピースに決めた。

彼女の趣味からすれば大分外れた場所にある地味なデザインだった。

だが、購入した他の下着類や靴、アクセサリーに化粧品などから考えると結局そのオリーブ色のワンピースが一番びったりとくる物だったのだ。

「別に貴方が勧めたから選んだ訳じゃないから」

購入する際にリミュリエルは念入りにその辺りを強調したが、相手はクスクスと笑うだけで取り合う様子は見せなかった。

勿論それにリミュリエルが更にムツとしたのは言うまでも無い。

そんなやりとりがあつて、リミュリエルは外のベンチでデュランと並んで腰を下ろしていた。

とは言え、リミュリエルは携帯を使ってメールのやりとりをナカバ達としているだけで、もう一方のデュランと言えば某滅却師も真つ青の手つきで針と糸を操り先程購入したワンピースを「補正」しているところだった。

普通公共の場で白昼堂々、ワンピースを縫っている者が居れば通行人にぎよつとされるか、どん退かれるか、危ない人を見る目で遠巻きに眺められるか、もしくは通報されかねないだろう。

が、そこは美形補正なのか通行人はその鮮やか過ぎる手腕にうつとりとした眼差しを注ぐだけで、通報を受けた警備員が飛んできたりDDDDの職務質問を受けたりする事も無く、静かに作業にいそしんでいた。

そのまるで機械仕掛けのように正確かつ淀みない手つきにリミュリエルはちらりと目を向け、黙って溜息を吐く。通算二百回目の記念すべき溜息だった。

（本当に出来たのね……）

最初に言いだした時は冗談か、それとも大袈裟に言っているのかと疑いもしたが、目の前でこうもはつきりと実演されてしまったのは溜息しか出ない。しかも普通は失笑物の光景も、この相手にかかると優雅なる午後、とでも題されそうな絵になる光景になってしまうのだから笑いさえ出てこない。

この分では他の無理難題を持ち出した所で悠々と、あくまで典雅に片付けてしまいそうだ。

あながち想像とばかり言い切れない所が心底憎らしい。

(でも何が嫌って、この見た目に私まで騙されそうな所なのよね……)

「こういう男なんか趣味じゃないのに……」

「ん？」

こっそり呟いたはずがしかし、隣の相手は耳聴く気がついてちらりと艶めかしい視線を投げかける。

どうして一々この相手の仕草は妙な色気を伴うのだろう。

香気のように淡く立ち上るそれに、気付かない間に脳の芯まで蕩かされて麻痺させられてしまう。掴んでいたはずの敵意や目的、その意志までほろほろと崩れて零れて行ってしまう。

「……大丈夫だ、分かっている」

ぼんやり針を持つ白い指先を眺めていたリミュリシエルの頭上から、柔らかな声が囁きかける。

「私はお前の思う相手を、心の先を奪ったりなどしない」

ぼんやりと顔を上げたりミュリシエルに相手の紫の目がサンゲラス越しに微笑む。

「何も、私は受け取らない」

「……私」

その目をぼんやりと見上げ、リミュリシエルは小さく呟く。

「私ね、あの子の事昔大嫌いだったのよ」

馬鹿でしょう、と自嘲気味に呟いた彼女に相手は黙って微笑む。

「ほら、あの子ってマナレスでしょう。どうしてだか分からないけれど……入学した当初から話には聞いていたのよね。障害者特待で試験無しで入って来た子がいるって話。ウチって結構な難関校なのよ、自慢じゃないけど本当にね。入学費用も馬鹿にならないし、皆それなりに努力して入ってきてるから、そこを障害者特待でスルーしたって話聞いた時はやっぱり私も良い気はしなかったわね。」

それも例えば首から下が動かないとか、五感機能の障害とかそう言うのじゃなくてただ魔法が使えないだけでしょう？ 本来はそう言う、勉強で頑張りたくても頑張る事がどうしても難しい人の為にある制度のはずなのに、困窮者でもない、ただマネレスだってだけの子が自分たちみたいなのを苦労をしないでこの学校に来ている……って、やっぱり良い気はしなかったわ。学費の面じゃ苦労しない私だってそう思ったんだもの。他の子はもっと不愉快だったでしょうね。他にもいろんな噂があったのよ。普段のテストも割増されてるか……これはすぐにデマって分かったけれど、本気で信じている子もまだ多いと思うわ。少し考えれば分かる話なのにね。後は前の学校でも問題起こして、それでセントラに来たんだって話もあったわね。運動とか、仕事とかもあの子は免除される事が多くて、それも色々言われていたみたい。……って言っても、これは同じクラスになっってから知ったことなんだけど。大して成績も良くなかったし、目立つ子でも無かったから……クラスが一緒になるまで気にかけても無かったのよ」

興味無かったのよねえ。

頬に手を当てて溜息を吐いて、リミュリシエルは「一緒にクラスになっってから正直、あまり興味無かったんだけどね」と呟く。

「あの子って、クラスじゃ全然雰囲気違うのよ。何か暗いつていうか……話かけてもあんまり応えないし、何かいつも一人でずっと険しい顔してて一点を睨んで、誰も近寄らせないって言うか……クラスから浮いてたのよね。」

あの表情はあの子の地だったんだけど。

リミュリシエルはちよつと苦笑する。

「そんなだから、グループ行動の時は最後まで一人で残っちゃって、大抵私が引き取っていたのよね。この程度のハンデぐらい受けたくらいがフェアだと思って」

「成程」

「……今思うと、思い上がりどころの話じゃないわよねえ。でも、

その時はそう思っていたのよ。あの子、運動神経無いし、体力が無いからすぐに遅れし、はつきり言っただけあ言う団体行動とか競技だと邪魔なのよね」

それでも、問題ないと思っていた。

ミルフィリアの末席に名を連ねる者として、それぐらいのハンデは上手に処理出来ると思っていたし、実際にそれなりにうまくトラブルは捌いていたと思う。

ナカバを引きいれることを快く思わないグループのメンバーの不満も収めてきたし、ナカバの為に遅れた作業もきちんと期限内に仕上げるようにフォローしてきた。それが自分の優越性の証拠だと思っていた。当たり前のように、無意識に、優れている自分は劣っている者を導き、フォローするのだと思っていた。

それがミルフィリアに生まれた、人の上に立つものの責任だと教えられていたから。

「あの子はあの子で、やる気がある様子も無かったし、何聞いても当たり障りない事だけ言っただけで、馬鹿にされても平気な顔して。私、それが物凄く嫌だったの。へりくだって、なあなあで過ごして、少しも努力しようとか良くしようとか考えてないみたいで、苛々したわ」

同じグループに引きとっていたけれど、心の底では軽蔑して、嫌悪していた。

誰よりも今の自分を作り上げる為に血のにじむような努力をしてきた彼女だからこそ、いい加減に、己の体質を理由に楽をして逃げているように見えたナカバの姿が許せなかった。

「なんにも知らないで」

知ろうともしないで。

理解しているつもりで。

したり顔で、切り捨てた。

無知ゆえに何の罪悪感も感じることもなく。

「随分とナカバを買っているのだな」

「貴方に言われたくないわ」

「おや、そうか？」

補正を終えた服を優雅で無駄のない手つきで畳んで袋に戻し、針をサイフの中へ納めて相手は微笑む。

その様子に「あまつた糸はどうしたのだろう」とリミュリシエルはふと思うが、この相手が長さ指定で糸を購入していた事を思い出して一人納得する。どうせ少しの余分も無く使いきったのだろう。視覚情報から正確な数値をはじき出すこの相手なら、おかしくはない。

そんな相手の指の長い大きな手をしばらく眺め、リミュリシエルはずっと溜め込んできた疑問を吐き出す。

「貴方、ナカちゃんをどうして選んだの？」

「ん？」

「あの子に何をさせるつもり？」

「……。何も」

「嘘よ」

即座に否定した彼女に、しかし相手は少しおかしそうに苦笑しただけだった。

その笑顔だけでもう何もかも許せる訳が無い。

危うく引き摺られかけた精神を相手の顔を見ない事で立て直し、リミュリシエルは「だって」と呟く。

（そうじゃないと困る）

この疑問も何もかも遠い彼方へ霞ませてしまう美貌の持ち主が、得体のしれない異邦人が、ただの善良な隣人であっては困るのだ。とても。

そうなれば、認めなければならぬ。

本来ナカバにこのような知人が出来る事は祝福すべきことなのだ。あの子の立場は弱いから、しかるべき地位にあり、実力と知識のあ

る知人が出来るのは歓迎するべきなのだ。その点で、今の所この相手は若干空気が読めないのと、容姿が飛び抜けすぎている点を補って余りあるだけのメリットを備えている。少なくとも、リミュリエルでは到底太刀打ちできないほどの。

だから、困る。

(勝手すぎる……)

何て無様。

そんな自分の奥底の本音に気付き、リミュリエルは今すぐこの場から逃げ出したくなった。

けれども肝心の物は全てデュランに預けてある。

腰を浮かせた状態でリミュリエルはその荷物をひたたくってここを離れられないかと考え、すぐさまそれが無謀だと分かってぺたりと再びベンチに座りこむ。

「貴方、嫌な人」

完全な八つ当たりの言葉にしかし、相手は穏やかに微笑んで「すまん」と返した。

「私は……私は、ナカバに何をするつもりもないし、貴方達から何かを受ける気も無い。此処へ来たのは純粹に仕事があったのだが……そこにナカバを巻き込んだのはすまないと思っている」

「……」

「嘆く事は無い。全てが終われば在るべき場所に在るべき物が戻り、お前の欲する世界に正しく形を取り戻すだろう」

「……詩人なのね」

「研究者だからな」

にこりと微笑んだことを気配で感じつつ、リミュリエルはもう何度目になるか分からない溜息を吐いて、目を閉じる。

きっと、このまま問い詰めたところで何もこの相手は話そうとはしないだろう。

そういうところも、ナカバに似ている。

まるで正反対のベクトルなのに、似ているのだ。

ただ、ナカバと決定的に違うのはこの相手の才が、何気ない仕草、行動の一つ一つが彼女を打ちのめし、どれほど彼女が無力で、浅はかな子供なのか思い知らせる点だった。そして、その屈辱と敗北感すらこの人間離れた美貌の前では恍惚と夢の色に蕩けてかき消されてしまう。対抗意識を持つことすら出来ない、叶わない。

（本当に嫌な……とつても嫌な奴……）

じわり、と目の縁が滲んで歪む。

それを唇を噛みしめて堪え、彼女はふいっと道の中央に設けられた時計へと顔を逃す。

「……、行きましよう。そろそろ時間だわ」

「まだ行かなくても良いだろう」

「……そうかしら」

「私の時計ではまだ問題ない」

言われてリミュリシエルは微かに眉を寄せ、自分の時計を確認する。

公道の時計と変わりはない。

ちらりと横目でうかがえば、相手は相変わらずぼんやりと空を見上げたまま淡く笑んでいた。

「……そう」

（本当に、嫌な人）

相手から視線を外し、リミュリシエルは膝の上で握りしめた手に視線を落とした。

ぼたり、と手の甲に悔し涙が滲んだ。

余談 買物難民の別視点(3) (後書き)

デュランの地味スキルその3

「料理だけじゃなくて被服も出来るよ(滅却師十字はつけないけれど)」

ところで、リミユリシエルを泣かせたことがばれたら、後でデュランはもれなくナカバに蹴られると思われれます。

どうもご無沙汰しております、尋でございます。

これでリクエスト企画は全部消化されたことになるかと思えます…

…ええ、一年ほど前の話ですね。(目逸らし)

一部出来栄えが納得出来ない物もあるので、リベンジしようと思っているものもありますが、一先ずはこれで完了です。

張るべき伏線も張り終えたので、そろそろ観光旅行に戻ろうかと思えます。

それではいずれまた、お会いできることを祈って。

作者拝

拍手 魔王とナカバの四方山話 1〜7（前書き）

リクエストいただきありがとうございます。

なお、おまけとして掲載されているものはポチポチして下さった方へのお礼なので、こちらへは再掲いたしません。
ご了承ください。

拍手 魔王とナカバの四方山話 1〜7

1〜7 「魔力とお食事の話」

魔王とナカバの四方山話 その1

「ちなみに、当然の話だが魔力は肉体部位の全てに含まれている」「ほほー。まんべんなく、って感じか？」

「いや、部位によつて差があるな。基本的に髪や爪、毛、鱗、羽毛など生え変わるものには少なく、逆に体液には特に濃く入っている」「体液つて血と涙の結晶、とか？」

「まあ、結晶化するほど濃いのはまれだが、そうだな」「ほむ」

「吸血類はその意味では効率よく魔力を摂取しているわけだ。大気に触れた血液では若干魔力が損なわれているからな」

「ほほー、じゃあ吸血類が一番凄いな」

「そうとも言えんな……大気中から直に魔力を摂取できるドラゴンの例もあるし、吸血以外にも方法は色々あるからな……」

「色々つて何？」

「まあ、思い当たらないお前に俺が教える筋は無い」

「えー……」

色々です。ええ、色々。

魔王とナカバの四方山話 その2

「魔族にとって魔力を取り入れる事は最も手っ取り早いレベルアップの方法だ」

「ほむほむ」

「よって、高位魔族の体は死後嚴重に火葬されることが多い」

「え？ よって、って意味分かん」

「放っておくと、その体を食いつくされてしまうのでな」

「げっ……ソレってありなのか？」

「ちなみに、高魔力の物はとても美味しい、と魔族には感じられる。お前達にとって高カロリーの食物が美味に感じられるようなものだな」

「うーん、何かちょっと想像つかないなあ」

実は高位魔族は火葬文化でした。

魔王とナカバの四方山話 その3

「今の話で行くと、魔族の中で一番魔力があるデュランはむっちゃ美味しい御馳走ってことになるのか？」

「まあ、な……何度か食われかけたしな」

「ええっ?! お前が?!」

「まあ魔王になる前の話だ。今でも偶にあるがな」

「意外と命がけなんだな魔王……」

デュランは美味しいよ。

魔王とナカバの四方山話 その4

「やっぱり決め台詞は僕の顔をお食べ？」

「流石に顔を食わせた事は無いぞ……」

「デュランはおいしいよ、とか。猫は美味しいよ、とか」

「また古いアプリゲームを持ってきたな」

「オレサマ、オマエ、マルカジリ」

「確かに仲魔だな」

元ネタはアンパンマ と、歪みの国の リス、女神 生シリーズ。

魔王とナカバの四方山話 その5

「ちなみにどんな味？」

「さあ……陛下はどこもかしこも甘いですね、と色々肌などを舐められながら言われたが」

「肌も甘いんだ」

「自分では良く分からんが、まあ魔力が滲み出ているからな」

「半熟カステラ、みたいな。表面に蜜出てるぜー、的な」

「そんな良い物ではないと思うのだが……」

陛下の肌は極上の甘さ、らしい。

魔王とナカバの四方山話 その6

「他に何かそう言う意見無いのかよ」

「意見と言われてもな……原則、魔王である俺にそう言った行為に及ぶことはあまり魔族内で歓迎される事ではないからな」

「そうなの？」

「ああ。まあ、匿名にしておくか……例えば」

「例えば？」

「『一度その味を知れば、我が君以外の血は口に出来ませぬ』とか」

「いや。もろバレですから」

発言者は当然あの人です。

魔王とナカバの四方山話 その7

「ちなみに食われた時の感想は？」

「痛いな」

「……意外と普通だな」

「とても痛いな」

「いや、別に普通度変化してないし」

「この前も痛みが過ぎて、若干意識が遠のきかけてな」

「ちよつと普通レベルが上がったな」

「お陰で少しばかり魔界が崩壊しかけたが」

「魔王食っちゃだめー！ 絶対ダメー！」

かなり痛いらしいです。

(記念すべき切り替え後初の拍手は「魔力と食事について」でした。
ちなみに、デュランが具合が悪そうにしていたのも実は本体が「
食われてた」せいという裏話があったり……)

拍手 魔王とナカバの四方山話 8〜14

8〜14 「料理と歌当てと魔王の養女の話」

魔王とナカバの四方山話 その8

「食う話してたら腹減って来たなー」

「リンゴでも食べるか？」

「いや、オレ別にどっかの死神じゃねえからリンゴばっか食うとかねえよ？」

「ふむ……では、すりおろしたリンゴを」

「だから」

「薔薇色のリンゴのジャムと、ホットケーキミックスを使ったリンゴのケーキなど、どうだ？」

「食べます」

作る時はまず、リンゴをウサギ型に剥きます

魔王とナカバの四方山話 その9

「そついやさあ、お前誰から料理習ったんだ？」

「ん？ まあ色々だな……文献を紐解いたり、誰かが作っているのを見たり、食事をしたり……」

「え？ 最後の意味分からん」

「食べれば材料から調理方法が大体予測がつくだろっ？」

「いやいやいやいや、無理無理無理無理」

「簡単だぞ？」

「お前の簡単はアテになりませんから」

料理の出来る人って実際こう言う事が出来るんですよねえ……。

魔王とナカバの四方山話 その10

「お前は料理はしないようだな」

「うーん、てかそもそも台所にあんまり近づかねえんだよな」

「ほう？」

「前にさ、カボチャを切ろうとして、包丁がぶっ刺さって抜けなくなつてさ。しょうがないからぐぬーって振ったら」

「振ったら？」

「カボチャは窓の外にダイブして、包丁は戸棚のガラスぶち割つてさ……すっげえ怒られた」

「その後、台所付近でナカバの姿を見た者はいない……か」

卵かけご飯すら危ういレベル

魔王とナカバの四方山話 その11

「ちやららっらっちやちやちや ちやらららっらっちやちやちや

ちやららちやっちやっちやっちやっちやっちやっちやっちやっ、ちやっ、

ちやっ、ちやーん！」

「……呪っているのか？」
「違えよ」

さて、何でしょう？（笑）

魔王とナカバの四方山話 その12

「ふっふっふ。何の事だか分かるまい」
「三分間クツキングだろう……」
「お、当たった！ すげー、何で分かったんだ？」
「まあ、お前の顔を見て居れば分かる」
「顔に書いてあるとか？」
「幸せそうだったからな」
「……何か微妙な判定だな」

幸せそうだったらしいです。

魔王とナカバの四方山話 その13

「じゃあじゃあ、これは？ ちゃーんちゃーんちゃーん、ちゃーん、ちゃーん、ちゃーん、ちゃーん、ちゃーん、ちゃーん」

「ダースベ ダーのテーマ」

「正解」

「の、ウクレレバージョン」

「何でそのチヨイス……いや、アレ好きだけどさ」
「娘が好きでな。良くこれを歌いながら周囲をなぎ倒している」
「プ子ちゃん……」

プ子というのは魔王の義理の娘の名前です

魔王とナカバの四方山話 その14

「そう言えば、プ子ちゃん元気？」

「多分な」

「多分って……相変わらず放任か……」

「まあ、大人しく構われているような娘でもないしな」

「あ、うん……それはすっごく良く分かる……」

魔王の娘は一言で言うと、アラちゃんタイプです。

拍手 魔王とナカバの四方山話 15〜21

15〜21 「夢十夜? な話」

魔王とナカバの四方山話 その15

「オレのターン。ドロ」淹れたてコーヒー！」
この『淹れたてコーヒー』三枚を使って『魔王デュラン』を召喚
！」

「何いつ?!」

「くられ、『無駄美貌の輝き』！」

「そんな、声まで変わって?!」

「……って夢を見たんだけど」
「興味深いな」

多分ナカバはアンコモン扱い
そして珈琲三杯で召喚されちゃうレアカード

魔王とナカバの四方山話 その16

「ナイトをに置いてこれで詰み」

「陛下、^{キング}御覚悟を」

「おや、ナイトであるお前が私に剣を向けるのかセシエン」

「これもゲームの理でございます」

「成程……では、その心意気に免じて遊んでやろう」(と、衣の裾

からちらりと足を見せ)

「へ、陛下?」

「さて……(と、腿のホルターからハリセンを引き抜き) 空の果
てまで飛んで来い」(スイング)

「は? うわあああああっ!」

「まだまだ甘いな……」

「……って夢を見たんだけど」

「俺が言うのも何だが、そのゲームは勝てるのか?」

王が最強のチェス

魔王とナカバの四方山話 その17

305

「そうするとここに黒を置いて、そうするとここにここにここが黒
……っ」と(ひっくり返し)

(パタン、と勝手に白に戻り)

「あれ? よいせつと」(ひっくり返し)

(パタン、とまた勝手に白に戻り)

「……何これ」

「(俺は白以外になる気は無い)」

「……って夢を見たんだけど」

「……言っておくが俺は白以外も身につけるぞ」

「え? 嘘っ?!」

こんなオセロは嫌だ。

魔王とナカバの四方山話 その18

「ほっ」(台の上にベーゴマ投げ)

「……やっぱり魔王のコマは安定感違うな」

(急に向きを変える)

「ん？」

(自ら勝手に台を降りる)

「をい」

(そして何処かへ行くこうとする)

「待てやコラ、あ、ちょっと、待てよ！」(何故か微妙にキタク

風に)

「(何やら向こうに興味深いことが……)」(フラフラと勝手に移動)

「……って夢を見たんだけど」

「非常に共感を覚える話だな」

興味を覚えたら仕事もそっちのけ。

魔王とナカバの四方山話 その19

「あいたっ！」

「……大丈夫か？」

「あ、うん。平気平気」

「それにしても異様な速度で縮んだように見えたのだが」

「あ、これか。問題ないって。ほら、このキノコを取ればあっという間に元通りー」

「1UPか……」

「……という夢を見なかったのだが」

「……いやみかこの野郎。俺は類似ですか」

毬男ではなく類似のほうらしい。

魔王とナカバの四方山話 その20

「だんだんだだーん 減ってゆくー」

「だんだんだだーん 縮んでくー」

「……医者に相談、か？」

「……という夢を見なかったのだが」

「いやみか！ いやみだろこの野郎！」（胸倉掴んで揺さぶり）

間違っても年頃の男性の前で歌ってはいけません。

お医者さんに、相談だ！

魔王とナカバの四方山話 その21

「ところで、デュランって九頭身だよな」

「ん？ まあ……大まかに言えばそうだな」

「良いなー、オレも九頭身なってみたい」

「その身長でなくても不気味なだけだと思うが」

「……」

「分かった。今のは俺が悪かった。だから蹴っても良いから涙目になるな」

「……」（げしげし）

でも140cmの九頭身はやっぱり変だと思えます。

拍手 魔王とナカバの四方山話 227-28 (前書き)

魔王様、劇場版T RIK (再放送) を見る、の回

拍手 魔王とナカバの四方山話 227-28

魔王とナカバの四方山話 その22

「ナカバ、退屈だ」

「へー、興味なし」

「よって合言葉を決めよう」

「何の為の合言葉だよ……意味分からねえし」

「俺が「ひん」で、お前が「にゆう」だ」

「……再放送でも見たのか？」

きつと見たのだと思います。

魔王とナカバの四方山話 その23

「それより他の言葉にしようぜ」

「ほう？ 何か案があるようだな」

「オレが「ゆう」で、お前が「かい」とか」

「……」

「良いよな？ お前誘拐犯だし」

「……」

根に持つてるようです。（「ヒマ潰し」参照）

魔王とナカバの四方山話 その24

「じゃあ、」「ゆう」

「じん」
「いや」じん「、じゃなくて」「かい」な。はい、「ゆづ」
「こづ」
「ゆづ」
「りょう」
「ゆづ」
「どづ」
「どづあっても言わない気がこの野郎……」

魔王様悪足掻き。

魔王とナカバの四方山話 その25

「てか、合言葉要らなくねえ？」
「……それもそうだな」
「じゃあ、代わりに何かやってよ」
「ん？ 構わないが……どれが良い？」
「白馬に乗って登場シーン！」
「……そう来たか」

第二十四代目、暴れん坊魔王様、登場。

魔王とナカバの四方山話 その26

「ナカバ、白馬の件だが」
「え？ ああ、はいはい。暴れん坊魔王様の話ね」
「六本足と首なしとどちらが良い」

「……はい？」

「六本足と八本脚と首なしと翼付と下半身が魚と掌サイズとどれが良い？」

「……とりあえず掌サイズにお前はとうやって跨る気だ」

勿論、縮みます。

魔王とナカバの四方山話 その27

「なんでそんなチヨイスばっかになるかなあ」

「魔王らしさを演出もあるのだが……普通の馬に俺が跨ってみろ」

「王子にしか見えない？」

「馬が死ぬ」

「……あー」

「もしくは馬に俺が襲われる」

「何でっ?!」

魔王陛下の魅了は種族を問わず有効です。

魔王とナカバの四方山話 その28

「何か馬はもう良いやー……こんどマツケンサ バ踊るってことで
チャラで」

「そうか」

「他に何かできねえの？ 密室脱出とかさ」

「まあ、座標変更は魔術の初歩のようなものだから簡単に出来るぞ」

「えー、それじゃつまらんなあ。じゃあ、生米がご飯になるとか」

「それも初歩の……」

「（きゅぐー）」

「……どうぞ」（生米をカレーライスに変え）

「いっただっきまーす！」（もっしゃもっしゃ）

魔王様、空気を読む。

拍手 伝統謝罪の裏側（前書き）

以前、拍手に乗せていた小話

アドルフが例の謝罪をする原因になった舞台裏です

今回は作中単語の補足も載せてます…… 雰囲気伝われば十分なので、読み飛ばしていただいても全然構いませんが。

拍手 伝統謝罪の裏側

「あ、ルフ兄だ。さっきフェンリルの調整終わったからテストよろしく！」

「お帰りチーフ、で、陛下どうだった？」

「アドルフ、それ終わったらこっちのスケジュール確認頼むわー」

「おっす、リーダー。帰って来たんならサクサクこっちの書類のチエックしてくれ」

「こっちの調整もヨロ」

戻るなり立て続けに注文を受け、アドルフは「お前らなあ」と流石に苦い顔をする。

三つのチームのリーダーを掛け持ちするアドルフには仕事が多い。客の前でこそ忙しいところを見せることは無いよう気を付けているが、それもDDDという身内に戻れば話は別。

「もう少し遠慮して自分たちで片付けようとか言う殊勝な心がけはねえの？」とぶつぶつ文句だつて口から出て来る。

それでもしつかり頼まれたことをこなすアドルフへの評価は、実は本人が思っているよりもメンバー内では高い。

使い勝手が良い、とも言つう。

「シエンチ、もっとグリップ締めるようにしないと刃が抜ける。やりなおし。陛下はとりあえず相変わらずだ」

「えー、それだけ？ ケチー」

「アホぬかせ。仕事終わってからにしろ。あー、おい、ビスコ。これは何だ。緊急以外の書類は全部マードに回せって言ったろ」

「全部緊急です」

「んなわけあつてたまるか。もっと選別しろ。三分待つてやる」

「えー！」

「でー……ん、このスケジュールで問題無い。ただし人数は五人で良い。ピットをつけて、もう一回練りなおしてくれ」

「ピット出すの?」

「一応な。おい、リーシェン、レーレン、ピット出せるか?」

「すぐ出せませう」

「良い返事だ。さっすが俺の妹」

声をそろえて答えた情報科の少女たちの頭をくしゃくしゃと撫でて、アドルフは相好を崩す。

それを見た他のメンバーは顔を見合わせ、

「あーあ……本当に親馬鹿」

と声をそろえて呟いた。

・フェンリル：

アドルフの使うアイスソードのうちの二振り。もう一つが雪姫という名で、二振りともアドルフ専用の武器。

ただしアドルフ自身は双刀使いと言う訳ではなく、むしろ片方が故障した時用に二本専用武器を持っている。

・三つのチームのかけもち :

最も平均余命の短い営業部（つまりは傭兵部隊）においては、年齢人口は完全なピラミッド型（つまり幼少が最も多く、年長になるにつれて少ない）形をとる。

よって、実戦経験豊富で指導力のある年長者は希少かつ常に不足している存在なので、必然的に複数のチームを掛け持つことになる。

十六歳まで生存し、かつ4thにまで昇格しているアドルフはナカバにボロクソに言われているが、実際はかなり優秀だという、そんな裏話。

・ピット：

小型の偵察機。監視や追跡、隠密や戦場偵察などに使用されるDDの戦術機械の一つ。

今回は護衛のための監視、追跡用に使用中。

「今日の行程に変更が入ったから良く聞け」

その後は自分も構え、撫でれと飛びついて来た弟妹たちをひとしきりじゃれあつて、ついでに生温い目でそれを見守っていた兄姉とメイトたちにも「撫で魔」の名にふさわしい洗礼を授け終え、落ちついた所でアドルフはそう話を切り出した。

それに先程まで「三時間かけた髪型が！」と詰め寄っていたギースや、「さすがお兄様、撫でスキルが日々進化してますわあ」と良く分からない感動をしていたシュシュもスツと表情を切り替える。

非政府系独立派兵企業DDD。

各自専科は違えども皆同じ企業に所属するプロフェッショナルである。

その彼らをまとめるリーダーの指示は当然ながら最重要事項の一つだった。

「依頼内容に変更は無い。が、想定外の自体が二つ生じた。ギース、画面に出せ」

「アイアイサー」

ピットという電子音の後に、各人に配布されている『コメント』という携帯型通信機器の画面に映像が映る。

「……これは？」

「対象Cのデータだ。さっきギースに総合データバンクから取り寄

せさせた」

「うわ、本当に居るんだ『マナレス』」

氏名や住所などは削除されているが、身長、髪や目、肌の色、性別などの外観データ、および正面と側面の胸像及び全身図が記載されたデータを見ながらビスコが呟く。

本来こうした個人情報にあたるデータは国から外部機関へ公開されることはあまりない。

少なくとも本人かその代理人の許可を通る事になっている。

それがアドルフがナカバがマナレスだと知った時点から僅か一時間立たないうちに届いていることが、DDDと国の力関係を如実に示していた。だが、そんなことに感慨や疑問を覚えるような者は当然この中には居ない。

ただ任務の難易度が上がった事を認識しただけである。

「ちなみに、さっき試してきたが回復魔法はこいつには効果が見られなかった」

「マジっすか？」

「うわー、悲惨だなこの子」

「ものすごい目付悪いけど、それもマナレスだからなのかな」

「はいはい、私語は慎め。勝手な推測で情報を混乱させない」

ひそひそと囁き交わす年少組の会話を手を打って止めさせ、アドルフは「こりゃ仮説だが」と一つ付け加える。

「"リザレクト"なら有効な回復する可能性があると思ってる」

「うわ、そんな上級魔法が必要ってどういう体質？」

「凄いやばい」

「仮定だっけって言うてるだろ。とにかく、有効な手が一つでもあれば条件は変わる……ってことでフィンレイ、お前後でちょっと俺に付き合え」

「今度何か奢ってくれるなら良いっすよ」

「陛下に会うチャンスだぞ」

「うーん。じゃ、行くっす」

「よし、良い子だ。……で、だ。このマナレスのちびたんと陛下はゼロ地区に行くらしいからその間は俺達は干渉できない」

「時間は？」

「未定だ。ので、外で待機して見張るしか無いな」

えーと不満の声が一部から上がるが、アドルフはそれを視線で黙らせる。

「文句がある奴は帰れ」

「……」

「じゃあ、話を続けるぞ。これによって隊を二つに分ける必要がある。まず俺と来る奴の名前を呼ぶから返事しろよ。ギース」

・撫で魔：

偶にリアルでもいるが、今回の場合はアドルフのこと。

スキンシップとセクハラの境界線は微妙なので良い子のみんなは安易に真似しない方が安全な人生を送れる。

・非政府系独立派兵企業DDD：

本編では主人公サイドの所属となるDDD。読み方はそのまま「デイー・デイー・デイー」。

アドルフは営業部（つまり傭兵部隊）に所属しているが他にも研究開発部、情報管理部から総務部、法務部など多岐にわたる部に分かれていて、ある意味一つの国とも呼べる存在になっている。

ちなみにアドルフは遺伝子交配の後、EGGで培養され、DDDで教育された生粋のDDD内部生。

・コメント：

携帯型通信機器。大きさは八ガキ大くらいと意外と小さくないが、その方が扱いやすいから敢えてこのサイズ。

DDDの技術開発部謹製。一般には出回っていないものである。

・ヒール（回復魔法）とリザレクト（蘇生魔法）：
一般的に使用されているのが回復魔法。当人の生命力と自然治癒力を活性化させるのがヒール。
一方でリザレクトは重症患者など、活性化させる生命力が低かったり、活性化に耐える体力のない人間に施す上位治癒魔法。
一般的ではなく、より高度な詠唱と集中力が必要なので通常の医療機関でもリザレクトが使える人は少ない。
ここで呼ばれてるフィンレイは支援系の営業部員の為、リザレクトが使えるようだ。

「以上、分かったな」

「了解」

「よし、各自仕事にかかれ。解散」

パンパンと二度手を打ったアドルフの言葉に集まっていたメイド達はそれぞれに仕事を果たすべく散ってゆく。

それを確認して、アドルフは取り合えず次の行動時間までの間に溜まった決済を済ませようと画面に目を落とす。

正直目が回る程忙しい。

回復特化体質でなかったらとうの昔にはばてている。

（つつーか、むしろ俺の体質利用されてる気が……ま、今更か）
きつい仕事であるのは確かだが、自分が「使える」と思われていることはアドルフにとって損では無い。

「さつと。お仕事お仕事、つと……ん？ どうしたキリエル」

「お兄ちゃん、あの、ね……」

くいくいと袖を引く感触にアドルフは一度画面から視線を足元に

向ける。

視線を向けた先にいたのは営業課の研修生として今回連れてきたキリエルだった。

アドルフとは別のファミリーの所属だが、アドルフとはこの仕事以前からの顔見知りだ。

何やらもじもじと言いたげな様子に微笑ましいと思いつつ、同時にこの調子では実戦投入はまだ無理だなという冷静な判断も下しつつ、アドルフは「ん？」と首を傾げて口下手な後輩の先を促す。

それにキリエルは何度かうるうると目をさまよわせ、ぐいぐいとアドルフの袖を引っ張ってしゃがませたところへ、耳元へそつと囁きかける。

「あのね、お兄ちゃんって『ろりこん』なの？」

「……。誰からそう言えって言われた？」

「サク兄ちゃん」

「……あの野郎」

ひきつりそうになる口の端を笑顔でねじ伏せて、アドルフは「違うぞー」とキリエルの頭を撫でつつ、視線で元凶を捉える。

そして視線で語る。

『おい、ちよつとこつち来い』

笑顔のせいで妙な迫力が増しているその視線に、見つけられたサクことサクリファイスは「てへっ」と舌を出して「だってさー、ルド兄」と反省の色も見せずにはふらふらと彼の方へやって来た。

「さっきのマナレスって、ルド兄がツバ付けてた奴だろ？」

「アホぬかせ！ んな覚えは無い！」

ジューズをかけられた覚えならある。

さすがにそうは言わずに取り合えず否定だけはしっかりして、アドルフは唸る。

「だってさあ、マナレスだって分かる前から注目してたのってルド兄だけじゃん」

「そりゃ、こつちがダメージ受けたからだ。まあ、大体何で不意打

ちを俺が受けたのかは分かったけどさ……」

「えー？ やっぱリルド兄のロリコンリーダーが反応したんじゃないの？」

「んなリーダーは無い！」

「ほら、キリりん。ルド兄に近づいたら悪戯されちゃうから下がるうねー？」

「……おにいちゃん、いたずら？」

「後輩に妙なこと吹き込むな！ 仕事やりにくくなるだろうがっ！ 大体俺の好み知ってるだろう、とアドルフは苦い顔をする。

あの二人 失礼、三人の女性の中で見た目が一番好みなのはあの金髪のリミュリエルという少女だ。

まずスタイル、というか胸が素晴らしい。

やや強気なのが難点だが、関係を持っても割切れそうな相手という点では合格だ。

次点でヴィクトリアだが、あの手は関わると変に執着されて厄介なことになりそうだ。

「あれ？ 本命のマナレスちゃん？」

「アホ、あれが女ってカテゴリーかよ。あれはただのガキだ、ガキ。小動物つての？」

「えー？ それにしちゃ構いまくってるじゃん」

「あー……まあ、な」

指摘され、アドルフは天井を仰いで唸り、頬を掻く。

「いや、ああゆう「ちんまい」のがうるうるしてると、ほっとけないつつーか、うちのチビどもも相手にしてる気分になってさ」

「……見境ないな、ウチのリーダー」

「人聞き悪い事言うな。あの危なっかしい奴がちよろちよろされると落ちつかないんだよ。」

おまけに何も無いところでつまづくし、行動がとろいから遅れるし、人にはぶつかるし。うちのチビどもの方がしっかりしてる」

「一般人と我が家を比べちゃダメでしょ。でも面倒だねえその子。」

ほっといたら？」

「出来ると思うか？ この俺に」

仕事に差しさわり出ても困るしさあ、と大きく肩を落としたリーダーの様子に流石にこれ以上からかつては胃に穴が開くかもとサクリファイスは肩を竦めて止める。

「尊程の難易度じゃないと思ってたけど、違うのかもな」

溜息交じりにそう呟いたアドルフは、先程の光景を思い出していた。

知識が変われば見える風景だって違って見える。

それは当たり前のことだ。

男同士だと思っていたから流していた「陛下」と「ちびたん」のマネレスのあの「じゃれあい」風景。

これが男と女だとなると話はまた違ってくる。

(明らかに別扱いなんだよな……)

陛下からの「ちびたん」 そう言えば名前を忘れた だけではなく、お互いにとってお互いが特別だ。

それは第三者の目で見ている彼らだからこそはつきりと分かる。おそらく、あの目つきが凶悪な「ちびたん」は無自覚だろうが、ちよこまかと自分から構われに行っている姿は弟達と重なって微笑ましい。

そして、もう一人。

「あの人の方が問題なんだよな……」

陛下の方は意図的だ。

意図的に、あのちびたんを他とを差別化している。

「これを気に入っているのだ」ということを周囲に隠そうともしていない。むしろ積極的に見せつけている。

まあ趣味ならそれは人それぞれだからアドルフだって別にそれに口出しする気は無い。

だが、あの「陛下」に限ってただ気に入っているからというだけ

の理由であそこまであからさまに行動するだろうか。

何か、あの行動の裏には理由があるのではないか。

「なあ、サクリファイス」

「何？」

「今までの襲撃カウント幾つだ？」

「今二つ増えて記念すべき十六回目だけど？」

「半端だなオイ……」

しかしまだ一日経過していないのだ。

この短期間でこの回数の襲撃があるというのは明らかに異常だった。

異常な回数の襲撃。

通常では考えられない技術を備えた美貌の研究者。

マナレスの子供。

今回の件はイレギュラーだらけだ。

アドルフは頬を掻いて、ピンク色の目を微かに細めた。

・回復特化体質：

回復魔法特化、ではなく回復特化の体質になるようデザインされているので、アドルフはちょっとやそつとの傷では死なない上に、疲労も人より回復スピードが速い。

溜まった書類を徹夜の突貫工事で片付けるのに向いている、とは本人の言。

・お兄ちゃん：

話中にアドルフを兄と呼ぶ者達が多く登場するが、実際の血縁関係は無い。

ファミリーと呼ばれるDDD特有の集団にあって、年長者を兄、ま

たは姉と呼び、年少者を弟、妹として扱う風習がある為である。一定の性癖をもつ世の中の「お兄ちゃん」達にはたまらない空間かもしれないが、その妹達は基本的に「最終兵器・妹」なのを忘れてはいけない。

「ところで兄貴、あのちびたんにちゃんと謝罪してきた？」

「お前、兄貴って呼ぶなよなあ……昔はお兄ちゃんだったのに」

「古いんだよ兄貴。そういう女だから、みたいな差別発言はバツシ
ングされちまうぜ？」

こう言えばああ言う上に、脅しまでかけて来る。

反抗期だろうか、とアドルフは思ったが苦笑いしただけでそれ以上何も言わなかった。

DDDのファミリーというのは通常の家族とは規模が違う。

多くの弟達、妹たちを抱えるアドルフ（といってもそれは彼だけではないが）にしてみれば、この手のタイプの妹も別に珍しくもない。

今では彼の身長を抜いて、筋骨たくましく健康に生き残った弟から「お兄様」と呼ばれることもあるし、

見た目は可憐な妖精のような妹が実は魔窟の主で「おぬし」と呼んでくることもある。

五人がかりで兄を実験台にしようと襲ってくる開発課の小悪魔達や、すっかり生意気にそだった三羽ガラスに比べればこの程度可愛いものだ。

ちなみに年長組はもっとアクが強い。

「あ、何か涙でてきそうだ……」

「兄貴？」

「あー、いや良い。今は考えたくない。で、ちびたんがなんだって

？」

「謝ったんだろっな？」

「え？ あー……意外と気にしてるんだな」

「あつたりまえだろ！ 女同士！ 似たキャラどうし！」

「そこか、とは賢明にも突っ込まずにアドルフは苦笑する。

「全然似てないだろ？」

「えー？」

「お前あそこまで酷くないし、うちの妹の方が百倍可愛い」

心底本気で言い切ったアドルフに彼女は「こんの親馬鹿……」と

呻く。

「が、アドルフはその様子も「うちの妹は反抗期でも可愛いなあ」

と和むだけである。不毛だ。

「あー、もう良いや。兄貴の馬鹿！」

「は？ 何で急にそうなるんだ」

「良いの。気にするな。てかさあ、酷いって何だよ。ちびたん酷い
って」

「あーいや、とにかく謝罪だけはしてあるって」

「誠意ももって無いな」

「そうしないと仕事がやりにくくなるだろ……こつちの実力を疑わ
れたままにするのは得策じゃない」

「……ん？ 兄貴、謝って来たんだよな？」

「え？ ああ、マナレスだって気付かなかったのはこつちのミスだ
からな」

「そこおっ?!」

信じられないとばかりに全力で突っ込まれ、アドルフは「何か間
違えたか」とこっそり背中に冷や汗を流した。

・開発課の小悪魔、三羽ガラス：

この話では登場しないが、どちらもアドルフの後輩……妹と弟達になる。

多少手足がもげてても再生するアドルフは試験用にぴったりだと開発部から重宝されている。

三羽ガラスの方はそう言った意図すらなく、ただ単純にワルガキトリオだけである。どちらにせよアドルフには迷惑。

・何か間違えたか？：

多分世の中の男性諸君は一度は経験しているあの気持ち。

何でそんなところで怒り出したのか。何で急に不機嫌になったのか。どうしてそんな昔の話まで絡めてくるのか。

女性はすべからく謎にみちた存在なのかもしれない。

「アドルフさん」

「アー君」

「ルド兄」

「アニキ」

「お兄様」

「兄ちゃん」

「兄さん」

「……………何か言い残すことは？」

「女性の尊厳について軽く見過ぎていて誠に申し訳ございませんでした。以後心を入れ替えて敬意を払い日々謹んで参ります」

何処の世界でも女性強い。

姉妹の皆さまに囲まれて、アドルフは神妙にそう答えた。というかそう言っしかない。

下手に逆らうとどっいう目を見るのか。

良くも悪くも女性との付き合いが少なくないアドルフは骨身にし

みて良く承知していた。承知させられているというべきか。

ともかく、先程のアドルフの「仕事がやりにくくなるので、マナレスだと気付かなかったことは謝罪した」という発言は女性陣達の怒りを買った。

曰く「お兄ちゃん最低」「アンタそれでも男なの？」「うちの弟は唾棄すべき豚野郎か」「もう口きかない」エトセトラ。

愛すべきファミリーの半分（男女比1：1）からのごうごうたる非難にアドルフが屈するのは早かった。

それはもう神速といふべき速度で屈服した。

女性陣には逆らうな。

その教訓を身を持って示した勇者アドルフに、ファミリーの残り半分（すなわち男性陣）は心の中でそつと敬礼した。

具体的な助けの手を差し伸べることはできなかつた、とも言う。

それはさておき、

「良い、アー君。女の子は繊細なものなの」

アドルフよりも年上　つまり姉にあたるジェンカがにっこりと笑う。

ちなみに繊細な女の子である彼女は、片手でバグベアを昏倒させた実績の持ち主だ。それも一撃で。

逆らつてはいけない。

「それを……ずっと男扱いしていて、しかもパスを見せられるまで気付かず、女装扱いして大笑いしたそうね」

「誠に申し訳ございませんでした」

「ア　君の見る目が残念なのはどうしようもないけれど、それで詫びの一つも入れねえとはどういうことだあ？　ああん？」

「あ、軍曹モードだ」

「誠に申し訳ございませんでした」

「それはさつき聞いたなあ？　ええ？　おい、どうにか言ってみるや」

見た目はふんわりとした清楚なお嬢様のようなだが、ジェンカは4

t hクラスの営業部隊の一員である。

アドルフより年長で、しかも営業部隊で、かつ4 t h。

彼女の危険度 もとい実力を示すにはそれだけで十分だろう。

「はっ。次の接触時点で速やかに、心からの誠意を込めて謝罪させていただくであります」

アドルフの語尾が若干おかしいことになっていたが、ここで突っ込める命知らずは居なかった。

軍曹モードのジェンカの前でああいう「症状」を示すのは珍しくない。身に覚えのある者たちはそつと視線を逸らす。

その目じりに光るものがあつたかどうかは分からない。

それにジェンカはにっこりとと微笑み、

「当然ね」

そう言った瞬間にこの後のアドルフの命運は決まっていた。

どんな謝罪方法をやらせるか。

そんな話題にきやらきやらと華やかに騒ぐ女性陣の中で、アドルフはもうどうにでもなれと聊かリーダーらしくない思考に逃げた。

・どんな謝罪方法を：

結果として、罰ゲームのような「ジャンピング土下座」が発動することと相成った。

ちなみにアドルフはジパング式正当な謝罪方法と聞かされていた為、ナカバに指摘されるまでやり方の異常性に気付いていなかった。

合掌。

拍手 魔王とナカバの四方山話 29〜35 (前書き)

拍手ネタ応募中の話でした

拍手 魔王とナカバの四方山話 29〜35

魔王とナカバの四方山話 その29

「おい、デュラン。大変大変大変大変大変、変態」

「最後に何か付け加えられた気がするのだが」

「気にすんなって。それよりさ、大変なんだよ。そりゃあもう大変すぎるぐらいに大変なのですよ」

「そうか」

「そうか、って言ってる場合じゃねえよ。マジで大変なんだってば」

「それは先程聞いたな。それで？」

「うん、えーっと……ほら、大変だなーって」

「……大変を連呼するだけで満足して、説明するのが面倒になったのだな」

「うん」

ちゃんと説明して下さい。

魔王とナカバの四方山話 その30

「えーと、ほら、前回次の拍手ネタどうしまっか旦那？ みたいな話したじゃん」

「何と言つか際どい話題だが……まあ、そうだな」

「いいじゃん、拍手なんだからメタでも」

「それで？」

「投票が殆どない上に、入ってる奴は全部一票ずつだった」

「ほう。で?。」
「で? じゃねえよ。ネタ決まんないじゃん!」(ふしゃー!)
「落ちつけ。珍獣化が進んでいるぞ」
「いやだつてさ! ネタ未定ですよ! 拍手どーすんだよ!」
「しなければ良いだろう」(あつさり)
「……あ、そつか。そうだよな」(納得)

いや、あのー……お二人さん?

魔王とナカバの四方山話 その31

「じゃ、帰るべー」
「ああ、そうだな……帰って珈琲を飲まなくては」
「お前何でそんな珈琲ばっか……え? えーと、何かカンペで『戻つて』って出てるんですけど」
「ああ、そうだな」
「そうだな、つて気付いてたなら言えよ貴様」
「別段気にする物でも無いからな」
「いや、気にしろつて」
「良いか? ナカバ。冷静に考えてみる」
「ほむ?」
「あのカンペを書いたのは、お前に先天性のリスクを負わせ、某ストーカーを絡ませ、かつお前の目つきを非常に悪いと設定したあの作者だぞ?」
「……」(カンペ踏みにじり)

……。

魔王とナカバの四方山話 その32

「てかさあ、拍手ネタないってことはオレらやることねえじゃん」
「いや、投票した者の意志もあったのだからな。たまたま同数であつたとはいえ、そこを無碍にはならないだろう」

「さつきまで帰る気満々だった癖に……で？」

「もう少し選択肢の補足を行い、作者の言葉足らずを補うというのが適当だろう」

「あー、それ良いかも」

……悪かったですね、力量不足で。

魔王とナカバの四方山話 その33

「まず『過去お礼気になる』だな。よし、気にならないからカーッと！」

「まあ待て。一応過去の履歴が気になるという意見も来ている」

「え？ マジで？ 過去の恥って使い捨てじゃねえの？」

「若干間違っているが……まあ、タイミングとして見損ねている者も居るだろうしな」

「んー、あれか。期間限定って聞くと気になるみたいな」

「具体的にはこれに投票が集まった場合、雑談にログが転載されることになる」

「ほむー……普通だな」
「まったくだ」

……主役二人が冷たい。

魔王とナカバの四方山話 その34

「でー……えーと、歌ネタは？」
「それは詳細を言うと次回困窮することになるからな……まあ今まで通りと言っておこうか」
「ふーん、じゃあ自己紹介は？」
「基本は『オリキャラさんに15+1の質問』からお借りしようと思っっている」
「聞いたこと無いんですけど」
「勉強不足だな」
「……何の勉強？」

気になる方はこちら 『オリキャラさんに15+1の質問』 <http://fakewings.sakura.ne.jp/dl/> ht

魔王とナカバの四方山話 その35

「じゃあ、バトンは？」
「おそらく『あいつバトン』になるだろうな」

「あいつって誰？」

「それは回答者が決めることだ。俺の預かり知るところでは無い。まあ、他者への印象を述べるものだな」

「ほほう」

「まあ、ネタ候補としてカップリング系の質問に答えるというものもあつたが」

「……カップルいねえだろこの話」

「最悪、お前と俺だな」

「無理！ 無理無理無理っ！」

無理だそうです。

拍手 魔王とナカバの四方山話 36〜42 (前書き)

変え歌……というか、変歌話。

ちなみに全部私「尋」のやってしまった実話でもあります。

拍手 魔王とナカバの四方山話 36〜42

魔王とナカバの四方山話 その36

「ふーんふふーんふふーん」(ねるねるねる を練りつつ)
「楽しそうだな」

「あ、よつすデュラン」

「今のは何の歌だ？」

「あれ、有名な童謡なのに知らねえの？ お前でも知らないことあるんだな」

「まあ、世界の原理なら分かるが、童謡や民話の類たくいには疎くてな」
「お前凄いいんだか凄くないんだか分からない奴だな……」

「一応凄い奴ですよ？」

338

魔王とナカバの四方山話 その37

「つつてもオレも題名知ってるわけじゃねえんだよなあ。耳で覚え
たし」

「ほう……どのような歌詞だ？」

「えーっとね。……音痴でも笑うなよ」

「安心しろ。元の音程を俺は知らない」

「……うん、まあそうなんだけどさ。そうなんだけど」
「？」

知らなくても音痴だと分かっってしまうこの不思議……。

魔王とナカバの四方山話 その38

「笑うなよ、絶対」

「分かった、笑わない」

「絶対だからな？」

「ああ、約束する」

「うーん……じゃあ、いきまーす」

「ああ」

「『にーしんーのはーながー、さーいてーいるー』」

「ちよつと待て」

今何かおかしかった。いや、音程じゃなくて。

魔王とナカバの四方山話 その39

「ニシンの花？」

「うん、多分？」

「ニシンは魚のはずだが……」

「そうなの？」

「もう一度歌ってみてくれ」

「おけ。『にーしんーの花がー、咲ーいてーいるー』」

「……」

と「さで」の花を見てくれ、どう思う。　　すごく……なまぐちそつ
です……。

魔王とナカバの四方山話　その40

「とりあえずその歌詞は間違っ
て覚えているのでは？」

「そうなのかなあ……うん、
そうかも。オレ時々間違っ
てるっばいから」

「例えば？」

「もみじの歌とか」

「もみじ？」

「うん、えーっとね。『もー
みいじー何故鳴くのー』」

「『もみじは鳴かないぞー』」

人間と魔族の夢のデュエット実現。

魔王とナカバの四方山話　その41

「これは『七つの子』では？　も
みじではなく鳥が鳴く……」

「分かってるよそれぐらい。他
にもみじの歌ってのがあんのー！」

「どう言う歌だ？」

「えーと、それがなかなか出
てこなくて……もみじの歌、も
みじの歌、もみじ、もみじ、も、
『もーみいじー、何故鳴くのー』」

「『もみじは鳴かないぞー』」

振り出しに戻る。

魔王とナカバの四方山話 その42

「……もしやと思うが、『秋の夕日に』……と言つこの歌のことか？」

「そう、それだ！ デュラン頭良い！」

「頭の良さの問題では無い気がするがな」

「何で知つてんの？」

「一度聞いたことは忘れられないのでな」

「へー、でも思い出せてよかったー！」

「本当に大丈夫か？」

「うん、見てろよ。『あーきのゆうーひーにー、てーるうやーま

ーもーみいじーなぜなくのー』……あれ？」

「もみじは鳴かないぞ」

「……うん」

七つの子の魔力強し。

拍手 魔王とナカバの四方山話 43〜49

魔王とナカバの四方山話 その43

「そう言えばさ、デュランって双神子様とどう言う関係？」

「クロのことか？」

「……うん」

「どうした」

「いや、何でクロなのさ」

「BBだからだ」

「いや、だからそのBBって何？」

「B式のB型だ」

「いや、だから……」

今回は双神子様の話

魔王とナカバの四方山話 その44

「当初のコンセプトは、メイドだ」

「は？」

「メイドだ」

「……メイドってあの、いらっしやいませご主人様ー、とか言いながら萌え萌えじゃんけんしたり、オムレッツに絵書いてくれる人達？」

「まあ、惜しいというか違うというか……要は、雑務を引き受ける戦力が欲しかったということだ」

「え？ 双神子様って雑用係？」

突っ込みどころは雑用係よりも、ナカバの反応……

魔王とナカバの四方山話 その45

「まあ、それは初期型の話でな。クロはその設計図を基に作られた別物と思って良い」

「で、何で黒？」

「B式のBだからBlackでクロだ。ちなみに、対となるB式のAはAlbedoでシロだな」

「もしかして、デュランって双神子様のことをクローとかシローとかポチーって呼んでんの？」

「ポチは呼んでいないがその通りだ」

「……」

ちなみにblack(黒)の語源はblanc(白)

魔王とナカバの四方山話 その46

「俺がここに来るための戸籍も、パスも全てクロが用意してくれたものだ」

「あー、正当な手続きを経た「偽造」パスなのか……そりゃ安全だよね」

「あと、アサギの手配もクロだな」

「あー、それで車両まるごと買占めとか出来たんだ」
「それからDDDに護衛の依頼を出すのもクワの仲介があるお陰で
大分楽になっている」
「……へー」
「それから」
「デュラン」
「ん？」
「お前もう、「ヒモ」に改名しろよ」

談)
あの方のお役にたてるだけで幸せなのです……ポッ(「黒の君

魔王とナカバの四方山話 その47

「ところで、あの人性別無いんだっけか」
「男女と言う意味では性別は無いな。いわゆる無性種だ」
「胸が無くて、足の間についてねえと」
「まあ、そういうことだな。自然界に居る無性とはまた少し違うが」
「自然界に居る無性？」
「アミーバとか、イソギンチャクとか、ゾウリムシとか」
「……無性？」
「そうだ」
「双神子様と一緒に？」
「そうだ」

双神子様(黒) ゾウリムシ

魔王とナカバの四方山話 その48

「ちなみにシロは両性種^{ダブル}だ。これも中性種の一つだな」

「ダブル？ 何が？」

「いわゆるヘルマフロディテ……雌雄同体ということだ。女のように胸があり、男のように」

「あー、はいはい。そういうのか」

「ちなみに、このタイプで自然に存在するものとしては」

「しては？」

「カタツムリ」

「……」

「それからアメフラシ、ああ、それとミミズとかだな」

「……何か、双神子様見る目が変わりそう」

双神子様（白） ミミズ

魔王とナカバの四方山話 その49

「ちなみに、中性種にはもう一つ種類があつて、これを転換種^{スイッチ}と呼ぶ」

「それはどの双神子様？」

「いや、あれらは必ず無性種で【転移】を司る黒と、両性種で【共鳴】を司る白のセットになつてゐるからな。転換種は居ない」

「ふーん……良く分かんけど、その転換種って何？」

「その日の気分によって性別を男から女、女から男へ切り替えられるタイプだ」

「ちなみに自然界だと何が居るの？」

「まあ、好きな時に何度も……というのは無いが、魚や海老の仲間には多いな。クロダイとか、アマエビとか」

「じゅるり」

「ん？」

？ アマエビ

余談 観光旅行の後日談(前書き)

短く、特に中身も無い話ですが、よろしければどうぞ。

余談 観光旅行の後日談

アサギ。

セントラル

中央と外部をつなぐ公共の交通機関としてはほぼ唯一の物であるこの列車は、その古風な外観とは裏腹に最先端の技術の結晶でもある。否、最先端の技術のその先を行くいわゆる『失われし文明』の一つである。世界中を見渡しても一般に公開されており、かつ現役で稼働している『ロスト』は百に満たないが、この列車「アサギ」はその数少ない例のうちの一つだった。ちなみに余談だが、稼働中の『ロスト』の約八割が中央に集中しているのは周知の事実である。そもそも中央自体が一つの『ロスト』だと主張する歴史学者もいるくらいだ。

そんな学術的価値、歴史的価値もアサギの乗客にはあまり関係がない。ただ彼らはその恩恵を受けて、非常に快適な旅程を送るだけだ。

それは、五両編成の四号車目に搭乗中の女子学生三人組についても同じだった。

「うーん、やっぱり快適ねー」

上品なロイヤルブルーのソファアームの上で伸びをして、リミュリエル・ミルフィリアはカードを一枚引く。

「揺れないし、音もしないし……うちの車より快適だわ。はい、ペア成立。ドロー4、次ナカちゃんね」

「えー……何かオレまた負けそうなんですけど」
「頑張つて」

「うん、頑張る」

「いち、にーい」と言いながらカードを山から引いている友人にリミュリエルはクスクスと笑う。

そんな二人の様子から目を外し、三人のうちの一入 ヴィクト

リア・ミシディアは窓の外の景色に目を向ける。

移動手段ではあるが、同時に観光列車でもあるこのアサギの運行速度は特別早い訳ではない。むしろ、車窓からの光景を楽しんでもらう為に他の列車に比べればやや遅めのスピードで走っている。

(最高速度は確か……特急と比肩できるくらいは出せたはずですが……)

頭の中でパンフレットで見かけた情報を反芻しつつ、彼女は外の景色を眺める。

揺れも騒音もまるで感じさせず、加速・減速の際の加重すら羽の重さ程度しか感じられない為に窓の外の景色が流れて居なければ動いているのかすらも判然としなかっただろう。

この走行安定性は最大速度の時でも保たれているのだろうか。だが、物体に及ぶ振動、熱、摩擦、加速、重力、空気抵抗等諸々の物理現象を制御しなければこのような快適な乗り心地は得られない。

(理論上は非常に困難なことです……もしかしたらこの列車であれば可能なのかもしれませんね)

中央で見かけた様々な『ロスト』のことを思い起こし、彼女が心中でそう独り語ちた時、

「ぎゃー」

いまいち悲壮さにかける悲鳴が最後の一人、ナカバ・マサキから上がった。

どうやら良いカードを今回も引き当てられなかったらしい、とがつくり座席に沈むナカバを見てヴィクトリアは思う。

同じゲームをしているはずなのに、彼女だけカードの枚数が大富豪状態だ。

「……もうダメポ。オレのライフはゼロです。むしろ残機ゼロです」

「大丈夫ですか、ナカ吉」

「うっん、無理。何かもうお花畑が見える」

「……私には見えませんが」

窓の外を確認しても広がっているのは一面の田園風景だけである。

首を傾げたヴィクトリアにナカバは何故か「ヴィーたん可愛いよ。ヴィーたん天然だよ」と呟いていた。

人間なのだから当然天然ですね、とヴィクトリアは生真面目に返して自分の手札から場に出ているカードに合うものを次々に置いてゆく。

「ワイルド赤、ラスト1……そして、これであがりです」

「えー！ なんでー！」

「あー、やられたわー……本当に無駄に強いよね貴方」

「運が良かったのでしよう」

「その運をオレに下さい」

もーやだ、と背もたれに顔をおしつけて頂垂れる友人にヴィクトリアは少しだけ眉を下げて「すみません」と返す。

カードゲームにせよ、スロットにせよ、ヴィクトリアはこの手の勝負にめっぽう強かった。

「私も結構強いはずなんだけどなあ……じゃあ、はい、スキップ」

「え」

「もう一枚スキップ、で、スキップ六枚」

「ええー！」

「で、リバーズでしょ」

「ひどっ！」

「もう一個リバーズ、でラスト1」

「……」

「はい、あーがりー」

「うわーん、ヴィーたんー！」

また負けたー、と胸元に飛びこんできた友人を抱きとめて、ヴィクトリアは咎める視線をリミュリエルに送る。

しかし肝心のリミュリエルは「拗ねたナカちゃんも可愛いわあ」といささか危ない視線をうっとりナカバに注いでいるだけで、ヴィクトリアはそう言えばそう言う嗜好でしたねと一見可憐なお嬢様に見える友人の性癖を思い出して嘆息した。

ナカバの方は例によって口で言う程へこんでいる訳では無いらしく、ヴィクトリアを何度かハグしてぐりぐりと頭をこすりつけて甘えたことで満足したのか、既に平然とした顔で座席に戻り「あー、後一枚めくってればなー」と山の中身を確認して何やら呟いている。非常に負けず嫌いだが、負けに何時までも関わってウジウジすることの無いこの小さな友人の気風をヴィクトリアは好ましく思っていた。

「あー、負けた。十回勝負して十回負けるって何かもうオレ何か憑いてね？」

さばさばした口調言っただ座席にひっくり返ったナカバに、リミユリシエルが「魔王でも憑いてるんじゃない？」と苦笑する。

「そっかー、魔王かー。畜生魔王のやつめー……って何でっ?!」
「悪魔が憑いているより性質が悪そうですね」

「本気でお祓い行こうかなー……」
オレ神社とかが行くと具合悪くなるんだけど、などと言いつつカードを集め、ケースにしまう。

いまだき珍しい実際のカードを使ったゲームだったが、これはナカバが自宅から持ち出してきたものだ。

何でもジパング人の血を引く祖父の家から貰って来たのだとか。アンティーク好きらしい祖父の影響で、彼女の家にはいつの時代のものか分からないカードやボードゲームが眠っている。

「じゃ、最下位のナカちゃんから発表ね」

「はい。えーと、じゃあまず優勝者のヴィーたんからね。えーと、ヴィーたん殿。貴方は、第一回アサギ・カップにおいて八勝という優秀な成績を収められましたので、ここにその健闘をたたえて中央のお土産を贈ります。どーぞ」

「ありがとうございます」

リュックから取り出されたデザインナイフを受け取り、ヴィクトリアは「大切に使いますね」と微笑む。

「続きましてー、リムりん殿。えーと……以下同文」

「えー」

「だってさっき何言っただか忘れちゃったし……はい、リムりんにはこちらです」

「これなあに？」

ナカバがリュックから取り出した大きな四角い箱を覗きこみ、リミユリシエルは尋ねる。

白地に青で精緻な唐草花をあしらった包装紙と、封蝋を思わせる金色のシール。

「もしかしてこれ、カメラア？」

「うん、あそこに本店あったから。リムりん好きだって言ってたし」

「うわー、ありがと！ 嬉しいわ！」

ぎゅーっと抱きついたりリミユリシエルにナカバは「喜んでいただけたなら何よりですけど」とちよつと照れた風にぼそぼそと答える。

「でもインスタントだよ？ 一応クラシックブレンドとスペシャルソフトブレンドの二種類入りだけど」

「すっごく嬉しい」

「そか」

「開けて良い？」

「いいともー」

リミユリシエルは膝の上に箱を乗せて、包み紙を丁寧に外す。

そして中から現れた雪白の箱をゆっくりと開き

「……あれ、一個しかない」

「……そうね」

スペシャルソフトブレンドの瓶の隣りにぽっかりと空いた空洞を見て、止まる。

今まではしゃいでいた気持ちに急に水を差されたかのような、居心地の悪い沈黙がコンパートメントの中に降りた。

「何か、ごめん」

「何言ってるの。ナカちゃんのせいじゃないでしょ」

「うーん、でも受け取った時に中身確認してなかったし」

「包装された状態で受け取るんだからしょうがないわよ」

慰めるリミュリシエルに納得のいかない顔で箱の中の空洞を覗むナカバ。

それにヴィクトリアは小さく嘆息して、笑みを作る。

「店の方の手違いなのですから、ここで証拠の写真を撮って後で連絡しましょう」

「え、良いよ、そこまでしなくても……」

「いいえ、店の信用にもかかわる事なのですから、カメラアブランドの為にも言うべきです。購入記録は取っていますか？」

「うん、とってる」

「では、駅に着いたら連絡してみましよう」

「うーん……うん。ヴィーたんお願いしても良い？」

「任せて下さい」

微笑んだ彼女に、ナカバも安心したのかぎこちない笑顔を返す。

その様子に、残った嫌な空気を払しょくしようとしてリミュリシエルがパンと手を合わせてにつこりと微笑む。

「じゃあ、次は私のお土産の発表番ね。では、だらららららららら、じゃーん」

口でドラムロールを演出しながらスーツケースの中から、明らかにそこには入らないサイズのぬいぐるみを取り出したリミュリシエルに、ヴィクトリアとナカバは思わず二度見をしたのだった。

魔界。【地の座】の周囲に配置された四季離宮の一つ、『秋離宮』

。 梢高い柏の木々に囲まれた瀟洒な館の一室にある純白の寝椅子レカミヒの上で、今ゆっくりとその部屋の主が体を起こそうとしていた。

その動きにつれて癖の無い黒髪がさらさらと白い衣の表面を滑つ

て雪花晶の床の上に流れ落ち、黒々とした流水紋を描く。微かに震えて開いた黒い睫毛の狭間の色は目もくらむような鮮やかな紫。身じろぎした刹那、身に付けた幾百、幾千ともしれぬ漆黒の輪が触れ合って、しゃらしゃらと氷の碎けるような涼しげな音を立てた。

それに近くに控えていた忠実な家令は「お帰りなさいませ、陛下」とその人に向かって恭しく首を垂れる。

ゆるり、と白い闇のような瘦軀が起き上がった。

「ああ……今戻った」

何処かまだまどろみの中で現と夢を行き来しているかのような甘く掠れた声でそう呟き、寝乱れた髪を無造作にかき上げてその者

魔王、ディアヴォロス・デュランは眠気を払うように数度瞬く。

そして、緩く開いた桜色の唇で「セシエン、湯」と命じた。

「湯、でございますか？」

いつものように珈琲と要求が入るだろうと準備していた青年は、珍しい主人のリクエストに少し意外そうに金色の目を開いて振り返る。勿論、湯も既に用意はされているので困ることはないのだが。

戸惑う家令をちよいちよいと指で招き寄せ、王は何処からともなく取り出した硝子製の瓶を彼に向って放り投げる。

予備動作無しのをそれをなんとか受け止めて、セシエンはそれを怪訝そうに眺める。

「これは……？」

「インスタントコーヒーだ。湯を注ぐだけで出来る」

「左様でございますか……人間ど、失礼、あちらで購入なさったのですか？」

「いや、貰った」

装飾文字で「クラシカルブレンド」と書いてあるラベルをなぞりながら尋ねたセシエンに王は気だるい口調のままそう言っ、「とりあえず淹れてくれ」とまたレカミエに沈み込む。

「貰った、などと……何が入っているか分からない物を陛下に口にして頂く訳には参りません」

「問題ない」

「しかし」

「それは」

ちらつと紫色の視線を向け、王は唇の端を軽く吊り上げる。

「ちよつとしたガイド代だ」

分かったら用意してくれ、疲れた、と子供のような事を言ってそれきりまた横になってしまった王に苦笑し、セシエンは「仕方の無い方でございますね」と呟いてから湯を温め直すためにコンロに向かった。

暫くして、白い部屋には香ばしい珈琲の香りが立ち昇った。

余談 観光旅行の後日談（後書き）

犯人は、お前かつ！

雑談 わんことご主人様の場合（前書き）

一応正月の話だけれど、まったく正月の要素が見当たりません。

雑談 わんことご主人様の場合

「貴方」

ふわりと鼻をくすぐる香ばしい出汁の香り。

「起きて、貴方」

カーテンの隙間から差し込む朝の光は清々しく澄んで、まだまどろむ彼の体を柔らかかに照らす。

それに少し眉をしかめて唸った彼の額を、つんと何かが優しく突く。

「ん……」

「おはよう、お寝坊さん」

甘い声にからかうように囁かれ、彼はうつすらと金色の目を開きまだ合わない焦点を辺りに彷徨わせる。

「朝食にするか？ それとも先にシャワーを使うか？ それともわ、た、し？」

脳髓まで甘くとろかすような声。

柔らかく耳たぶを食まれたかのような感触にセシエンの意識は一気に覚醒する。

一気にクリアになった視界には何とも美しい白い顔が何か面白い玩具を見つけた顔で彼を覗きこんでいた。

紫色の目。

「へへへへへへいかっ!？」

「そんな妙な役職になった覚えはないが」

「も、申し訳ございません!」

主人より後まで寝ているなんて。いや、それよりも先程の台詞はいやいや、それよりも耳のアレは

あわわわわ、と普段の冷静沈着な執事ぶりを返上する勢いで焦って拳動不審になっているセシエンの鼻に、むぎゅ、と何かがおしつけられる。

「うばっ、ちゃっ、た」

「は？」

ぱくぱくぱくっ、と目の前で王の声に合わせて動いたパペットを茫然と見つめ、間の抜けた声を上げるセシエン。

それに王はその子犬型パペットを自分の顔の横に引きつけ、その口をまたぱくぱくとさせる。

「起きて貴方、ご飯よ」

「……陛下、それは一体」

「うん？ お前専用ポチ子ちゃん人形だ。さっきお前に話しかけていただろう」

「……恐れながら、先程からわたくしの耳などにちょっかいを出しておられたのは」

「これだな」

ぱくぱく、とデフォルメされたパペットの口を動かす王。

ついでに手の部分もぱたぱた、耳もぴびこさせしてみせる。

セシエンは思わずがっくりとうなだれた。

「ええ、陛下がそう言ったことをなさる方とは重々承知しておりますが……」

「何だ、嬉しくないのか。折角お前が寂しくないようにもう一匹犬を連れて来てみたというのに」

「陛下……恐れながら二点ほど修正が」

「言ってみろ」

「第一にそれは犬では無く、ぬいぐるみでございます。第二にわたくしも犬では無く、ドラゴンでございます」

「別に照れて誤魔化す事は無いぞ」

「照れても誤魔化してもおりません！」

「まあセシエン落ちつけ。とりあえず着替えたらどうだ？」

「こ、これは……申し訳ございません」

未だに自分が寝台上で寝巻のまま主人を立たせて話していることに遅まきながら気づき、セシエンは慌てて転がり落ちるように寝台

から降りる。

しかし何故主人である魔王ディアヴォロス・デュランがここに居るのか。そして何故こんなに食欲を誘う香ばしい匂いがするのか。そんな疑問が顔に出たのか彼の主人はパペットをもっていない方の手、に持っているお玉で部屋の片隅を指す。

「節料理だ」

「陛下がご用意くださったのですか!？」

「まあな」

と当然のようにお玉でスープの味見をしながら答える魔王。

よく見ればいつもの純白のいでたちと思いきや、主人が来ているのは純白の割烹着だ。

羞花閉月の中性的な美貌の持ち主だというのに、庶民的な割烹着にポニーテール姿が何故かやたらに良く似合う。しかも味見や調理する姿が妙に板について居て、セシエンは新年早々少し泣きたくなつた。

白銀狼なのに、何で主人に世話を焼かれているのだろう。

種族アイデンティティの揺らぎを感じつつ、セシエンは既に用意されていた服を片手に隣りの部屋の引っ込んだ。流石に主人の間で着替える訳にはいかなかった。

着替えて気持ちを落ちつけてみれば、ここはどうやらセシエンの部屋でも王の部屋でもなく、秋離宮に大量に余っている客室の一つのようだった。

良く良く思い出してみれば、あの後部屋に自力で戻った記憶も無い。

(……。まさか、陛下に運んで頂いて……?)

思いついた最悪の可能性にセシエンはがっくりとその場に膝をつきそうになり、寸でのところで留まる。服は支給品。主人からの頂き物を簡単に汚すわけにはいかない。

溜息をこらえつつタイを締め、セシエンは鏡で身なりを確認する。

本来ならば目出たい年の初め。しかし鏡に映ったセシエンの顔は暗く曇り、目の下には隈が出来ていた。とても主人の前に出ていけないような顔では無い。その己の顔を見ることで昨晚の失態を思い出し、セシエンの顔はますます暗くなる。

返す返すも自分の不明が悔やまれてならない。

主人に見当違いのことで意地を張って、心労をかけ、さらに寢床の世話までされるとは。

(合わせる顔がありません……っ)

「下らんことを考えている前にさっさと来い、いつまで俺を待たせる気だ」

頭を抱えた所を後ろからスカーンと景気良く「ポチ子さん」で叩かれ、セシエンは目を白黒させて「陛下？」と振り返る。

そこには花の顔も麗しく、腕を組んで仁王立ちし、呆れた眼差しでセシエンを眺めている王が居た。

「いつまでも出てこないと思ったら鏡の前で一人ぐねぐねして……面白いが、やるなら俺の見える所でやれ。つまらん」

「いえ、陛下……これはその」

「で？ 何時まで俺はお前を待たねばならないのかな？ それとも昨日のように抱き上げて運んでやるつか」

「結構でございます！」

「ならさっさと這って来い」

言って王は踵を返して最初の寝台のあった部屋に戻ろうとし、それから振り返って固まっているセシエンに苦笑して「本当に這うなよ？」と真剣に悩んでいた生真面目な青年にフォローを入れたのだ。つた。

本当に奇妙な年明けになった。

落ちつかない気分です席について料理を頂きながらセシエンは思う。

まさか、白銀狼の自分が責き方 全ての魔族の王にして己が主の手料理で新年を迎えるとは夢にも思わなかった。

通常、王が料理をするなどと言うことは無い。

それは王が多忙であるという理由もあるが、王の出身が基本的に四大卿の血筋であるからというのも大きい。貴族の中でも頂点に当たる、始原王デュランに従った四人の魔族の血統を引く彼らは自ら料理をすることは無い。それは、貴族として仕える者の仕事に手を出さないのが、家人達に対する敬意であり尊重であるからだ。

だが、四大卿の血筋では無い、魔族の位で考えても白種の中の下にあたりディアヴォロスである今上聖王デュランは平気で自分で身の回りのことをやろうとするし、料理も作る（しかもやたらに美味い）。昔軍属だったから、大抵のことは自分で出来るようになったのだという話を何かの拍子にぼつりと漏らしていたが、少なくとも目の前に並ぶ料理は軍で作るような野戦炊飯では無い。

盛り付けまでプロの料理人のように美しい節会料理を前に、セシエンは何となく箸をつけるのを躊躇う。

主人に仕え、主人の役に立つことこそを最上とする白銀狼としてこんな正月で良いのだろうか。

勿論セシエンはこの食事が昨日のいざこざに対する王なりの謝罪を込めているのだというのは分かるのだが、主人に尽くすならともかく尽くされるといふのはどういふことなのだろう。

セシエンはそつと視線を動かし、王の様子を窺う。
相変わらず美しい。

この王の存在を知って傍に居るようになってからけっして短く無い時間が経っているが、何度見ても色褪せない玲瓏たる美貌、そして麗容にはただ感嘆の溜息しか出てこない。殆どが謎に包まれている異色の王ではあるが、その分かっている部分だけを拾い上げてみても相当に血腥い経歴の持ち主にも関わらず、その白い面には一種犯しがたい気品というか清々とした無垢な雰囲気がある。

その顔には今でもうつすらと微笑が浮かんでいるが、表情が抜け落ちた時は直視するのが恐ろしい程整っていることをセシエンは知っている。

(陛下)

心の中で、セシエンは王を呼ぶ。

(陛下。我らの王よ。貴方は一体我らに何を望んでおられるのですか)

いったい、何故わたくしを傍において下さるのですか。

セシエンは目の前に用意された節会料理を見下ろす。

けして特別に凝っている訳ではないが、美しく盛りつけられた料理は味覚と嗅覚が他一倍鋭いセシエンに配慮してか薄めの上品な味付けになっている。そんなところに普段はわざとに分かり難くされている主人の思いやりが見え隠れするようで、セシエンは胸が詰まるような思いを覚える。

(貴方の為に、わたくしは何か出来ておりますでしょうか)

押しつけるようにして王の元に留まり、理由をこねて仕事を作ることで王の元に居る理由を作っている自分の姿を、セシエンは理解していない訳では無かった。

セシエンが魔族で唯一ここに留まることを許されたのは、ただ王が寛容であったというだけのことだ。

セシエンが白銀狼の中で特別に 例えば兄のように優秀だったからではない。

王は世間の噂とは違い、本当はとても寛容な人だ。

(仮に)

セシエンは目の前の皿を見下ろして想像する。

(今ここで、この皿を床に叩きつけて陛下が手ずから作って下さった料理を踏みにじったとしても……この方は笑って許すだろう)

王の白い横顔を見上げ、セシエンは思う。

仮に、セシエンがこの場で立ちあがって王の頬を打つても、王はそれを許すだろう。古の哲学者のように反対の頬をも差し出すことさえ厭わないだろう。

それは王としては誉められた行為ではない。

王はもっと傲慢で、もっと峻厳でなくてはならない。

王として、この方はあまりに寛容すぎて、甘過ぎる。

命令に背いて我を通した配下に対してその首を落としても本来は咎められるどころか当然と評されてしかるべきなのに、それを叱責するでもなく、まして仲直りの食事を手ずから拵えるなど　笑ってしまいたい程甘過ぎる。

けれども、そんな主人がセシエンはどうしようもなく好きだった。（陛下。わたくしの陛下。わたくしの、大事な大事な、かけがえの無い大切な主様じゆうさま）

見つめられていた視線に気づいたのかまじりけの無い紫の瞳がセシエンを捉え、不思議そうに小さく首を傾げる。

その様子にセシエンは思わず笑みを誘われる。

「陛下」

「どうした」

「……ありがとうございます」

「何だ、おかしな奴だな」

紫眼を少し和らげて笑った王にセシエンはひそやかに思う。

きっと本当は、この美しい人には誰も必要な相手などいないのだ。それでも、自分はこの方の為に生きたい。

口に入れた魚の身はほろりと崩れて、甘く優しいバターの香りが出た。

雑談 わんことご主人様の場合（後書き）

【作者後記】

あけましておめでとうございます。

今年の作品第一弾は、魔界の御正月（陛下とワンコ）になりました。節会料理は思いつきり内容をぼかして書いてますが、和風おせちではございません。魔界には正月を祝う風習はあってもおせち料理みtainのはありません。

地域や種族によって異なりますが、大抵パンとスープと魚料理一品だけです。この時だけは貴族であっても質素な食事の方がむしろ好まれます（ヴァンパイアになると質素な中に如何に「美」を詰め込むかみたいな、シンプルイズビューティフルを追求した料理になります）。

ちなみに陛下が作ったのは野菜入りコンソメスープと白身魚のムニエルでした。

ちなみに前日談として「魔王様家出する」「わんこの大掃除」「長さん、家出少年を匿う」の三話があります（笑）

最後の話に関してはいつもご感想を頂いている某方に捧げ済みです。

それでは、本年も宜しくお願い致します。

雑談 俺とチビたんの場合 (前編) (前書き)

正月っぽくない正月、第二弾。

雑談 俺とチビたんの場合 (前編)

アドヴェント
待降節の辺りから正月明け三日頃まではDDDの営業部は死ぬほど忙しい。

世間様がやれクリスマスだ、大晦日だ、正月だ、イベントだと浮かれている間、彼らは大抵要人警護やら会場警護に駆り出されて朝から晩まで働きづめになる。それが終われば終わったで報告書を書いたり、仕事の間滞っていた決算を済ませたり、他の細々とした業務に追われて結局落ちつくのは一月半ばになるのが例年のパターンだ。

ちなみに、この怒涛の一ヶ月半が終わった直後には聖バレンタイン記念日があつて、またしても似たような状況に追い込まれるのはある意味お約束である(とはいえこちらは一週間で終わるので遥かに楽だが)。

そんな中、当然DDD中央本社勤務、4thのアドルフもまた当然のようにこの怒涛の年末年始ラッシュに駆り出され、笑顔と愛想を振りまく仮面の下でこつそりと世間を呪い、帰還後に山と積み上がった報告書等々を不眠不休で片付け続け、仕事を部下に割り振り、どうしても片付かなかった分はメモを付けてやはり下に投げ、一通り目途がついて一日分の休みをもぎ取ったのは正月明けて六日目のことだった。

「さつとと、どうすつかな」

愛機GRIFON2100を道端に停めて、ヘルメットを取ってアドルフは呟く。

あまりゆっくりしていられる時間は無い。

中央に帰還する為の移動時間は勿論のこと、こちらが頼んだ仕事を笑顔と涙で引き受けてくれた可愛い弟達への土産を買う時間も必要だ。それらを考えると、あまり自由な時間は無い。実質半日行動出来れば良い程度だ。

アドルフは手元の携帯端末「コメント」を操作して現在地を確認する。

「この辺、のはずなんだけどな……」

アドルフは、ここにある人を探しに来ていた。

昨年引き受けた依頼の中でも最も印象的だったものの一つ。

それは、東大陸のD種公務員を名乗るデュラン・ケヒトから受けた護衛依頼だった。

依頼期間の五日間の間に受けた襲撃の頻度も他の依頼に比べて異様なほど高かったが、それ以上にその依頼に関わった顔ぶれが個性的だった。

まず依頼者のデュラン・ケヒト。

実はこのデュラン・ケヒトと言う名前はDDDの中ではかなり有名である。何故なら、同姓同名で同じ内容の依頼がDDDへ過去数回にわたって持ち込まれているからである。これだけならただの上得意で終わる話だが、その依頼と依頼の間が百年以上空いているとなると話は別である。しかも、その依頼があったことと報酬が振り込まれた記録は残っているにもかかわらず当事者が誰も居ないのもこの奇妙な依頼者からの依頼の特徴だった。関わったはずのDDDの職員の誰もがその事を聞いても「覚えていない」の一点張りでも語らないのだ。しかし、確かにその年の収支明細には依頼料がきちんと振り込まれており、なおかつ成功の場合はその依頼に関わったメンバーのうち、特に営業成績不振であったものがまるでスランプを抜けたかのようにその依頼以降優秀な職員に成長する。

関わった者が緘口令を敷かれる謎の依頼。

それが半ば都市伝説の様相を帯びてDDD内で語り継がれている「デュラン・ケヒトの依頼」である。

そして今回、アドルフはその噂の「デュラン・ケヒトの依頼」にプロジェクトリーダーとして参加した。

とはいえ、大してその依頼内容に期待をしていたわけではない。

受けた依頼内容自体はごくありふれた護衛依頼であつたし、報酬金額も雇った職員の数を考えれば妥当なものであつて、特に破格の報酬と言う訳でも無かつた。デュラン・ケヒトの名前は恐らくコードネームだろうという見解もDDDの仲間内では既に出ている話で、それを面白おかしく話しているのは営業部隊とは別の例えば情報管理部や資材調達部、或いはまだ実戦に出る前のジュニア達だけで、実動部隊である彼らには大して興味をそそられない話だつた。

出会う、までは。

アドルフは今でも鮮明に覚えている。

大して期待もせずに、しかしこのふざけた名前を使ってくる依頼者の度肝を抜いてやるうなどという多少意地の悪い心をもって依頼者の居るコンパートメントの窓から入り、その姿を初めて見た時の衝撃を。

肩の高さで切りそろえた真っ直ぐな黒髪。白百合の花弁を連想させる肌。清々とした佇まいで桜色の唇に淡い笑みを刷いて、その依頼者はまるでアドルフが来るのが分かつていたかのようにそこに堂々と立っていた。

その姿を見た時にアドルフの胸に最初に去来したのはその端正な美貌への感嘆でもなく、見抜かれて待ち伏せされていたかのような苛立ちでもなく、ただ酷く曖昧で言葉にしづらい郷愁に似た懐かしさだつた。

今までずっと、物心がついて世の中の道理が分かるようになってから絶えずアドルフの胸の奥深くに巣くっていた渴望、違和感、何かが欠けているという焦燥感。そう言ったものが急速にみだされたかのような安堵の気持ちだつた。

最初はその未知の感覚に戸惑い、そして次に棘を癒されたことを当然のように受け止めている自分に戸惑い、お陰でまるで初仕事に臨んだ子供のようにしどろもどろになりかけたのは　まあ、忘れておこつ。

とにかく、あの仕事はその依頼主のこともあって、強くアドルフの記憶に残る仕事になった。

あれ以来仕事にも真面目に取り組むようになった。

お陰で「デュラン・ケヒトの依頼」に新たに要らない根拠が出来てしまったような気もするが、噂を否定することよりも仕事をきっちり片付ける方がより重要だろうとアドルフは苦笑いして噂補強の点については考えないことにしている。

（ま、ここで終わっとけば印象的な依頼……ってことで終わるんだけどな）

通りを行く人の群れに目を配りながらアドルフは思う。

問題はここからだ。

そう、問題。

この依頼に関わったアドルフ以外の全員が依頼についてまるでこの件を覚えていないという問題。

最初は冗談かと思ったが、確認していくうちにアドルフは自分以外の全員がこの件について忘れていることに気がついた。

誰に聞いても答えは同じ。「覚えていない」「そんなのあったっけ？」

そして、依頼記録を見せると「あつたかもしれないけれど、一つの依頼なんて覚えて居られない」。

それは正しい。

アドルフも別に今まで受けた依頼全てを覚えている訳ではないし、むしろ詳細は積極的に忘れようとしている。ただでさえ煩雑な日常の中で、過去の細かいことを覚えているよりも今の仕事に集中する方が優先するからだ。

しかし、全員がこの短期間で忘れるだろうか。まして、依頼主のデュランはあの美貌である。仕事にも関わらずに妹たちも弟達も何かとキャアキャアと女学生のように騒いでいたのだ。それを、忘れるだろうか。

アドルフは嫌な予感を覚えつつ、依頼主達の宿泊先、買い物等で

立ち寄った店など思いつく限りのところに仕事の合間を縫うようにして問い合わせをかけた。

その結果は、ゼロ。

誰も「デュラン・ケヒト」を覚えておらず、映像記録からも綺麗に消えていた。まるで、最初からそんな人物は存在し無かったかのように。

その結果に、流石のアドルフも寒気を覚えた。

緘口令が敷かれているならまだ分かる。しかし、それならば何故自分だけに何の指示もされていないのかが分からない。まして、あの期間中に関わった相手はDDD職員や公共施設の職員、店員だけでは無いのである。行き交う通行人、観光客、巡回する監視装置。それらすべてに対してフォローなど出来るだろうか、いや、出来ない。まして全身白づくめの、俳優でも見ない程の美貌をもった長身の依頼主は何処に行っても目立つ存在だった。早々忘れられるものではない。

だとすればあの依頼は、あの美貌の依頼主は、一体なんだったのか。

本当は実在しない、アドルフの見た白昼夢だったのか。

その疑問は年を越す前から、年末年始のあの怒涛のスケジュールの中でもずつとアドルフの中に薄気味悪い疑問としてわだかまっていた。

そして年明けの今、アドルフはその疑問を検証すべく最後の「証人」を探してここにやってきていたのだった。

あの依頼の中で唯一身元を調査済みだった関係者、ナカバ・マサキの元へ。

「つつてもなあ……大雑把過ぎて分かんねえっつーの」

垂れ落ちて来る苺ピンクの前髪を掻き上げ、アドルフは唸る。

住所と言っても区画までしか分かっていない。そこからさらに「認定特殊障害者申請」の記録や「特殊血統者保護登録」などで検索

をかけてみたが一向に引つかかる気配が無い。医療記録はガードが固い上に、アクセスする手続きが煩雑でこういう私的な調べ物には向かない。

しかも現在一般の教育機関は冬休み。登下校時に見かけるという可能性はゼロだ。

つまるところ、思い切り手詰まりだった。

「あいつ、どう考えても休みの時は外で遊ぶタイプじゃねえよなあ」
目付の悪いチビたの生白い不健康そうな肌の色を思い出してアドルフはぼやく。大体あの鈍くさいチビたんが外を走り回ったらその辺で転んでひざでもすりむくのが関の山だろう。それよりもあの細っこい手足を縮めて、家でゲームでもして遊んでいる方があり得そうだ。

「流石に自宅に押し掛けるわけにやいかねえし、大体自宅の位置も分かんねえし……こう言う時検索サーチにひつかからないっーあの体質は厄介だな」

しょうがねえ、と溜息をついてアドルフはコメントを操作して近くのコンビニを探す。

こう言う時は気分転換だ。

温かい珈琲でも飲みながら、土産物を考えよう。

と、開いた自動ドアの先。

「……居やがった」

見覚えのある、ちょっとつつけばポキッといきそうなちっぽけな体が、不機嫌な顔をしてレジの奥を睨んでいた。

雑談 俺とチビたんの場合 (前編) (後書き)

【作者後記】

観光旅行後日談第二弾、ということ人で人間サイドです。

唯一観光旅行のことを覚えていいるアドルフですが、自分の記憶にはあるのに周囲の誰も覚えていない……って、実際あったらものすごく気持ち悪いだろうなあと思います。

幸いにして尋にはそういうことはありません。

ただ、まわりのみんなが覚えていいるのに自分だけさっぱりおぼえて居ないというのは良くあります。

気持ち悪くはありませんが、結構不便です。

こんな感じの物書きもどきではございますが、今年も宜しくお願ひ致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4228/>

魔王陛下の雑談

2012年1月2日22時43分発行